

に在り。須らく是れ、第三の流注生相を出得して、方に始めて快活自在なるべし」と、無功用の田地に到るも、有るか無きかの八識微細の流注がフイ／＼と起るから、脱洒自在を得るには、八識微細の處を打ッ越えろと。併し此の解は未だ十分ぢやない、コリヤ二乗の義を約したのぢや。「所以に瀉山、仰山に問ふて云く、寂子如何。仰山云く、和尚、他の見解を問ふか、他の行解を問ふか。若し他の行解を問はば、某甲知らじ。若し是れ見解ならば、一瓶の水をして、一瓶の水に注ぐが如し」と、瀉山が仰山に問ふのに、惠寂如何ぢやと。スルト仰山が云ふのに、和尚は見解を問はつしやるのか、行解を問はつしやるのか。若し行解ならば、某甲には行解相應には届かぬ場が御座る。又た若し見解ならば、我と法と、不二平等ぢやと。「若し此くの如きことを得ば、皆な以つて一方の師と爲る可し」と、コレなら立流な宗匠ぢや。「趙州云く、急水上に毬子を打すと、早く是れ轉轉地。更に急水上に向つて打する時、眨眼すれば便ち過ぐ」と、油断をすると流すぞ。徳山、臨濟も、此の急水上には倒退三千ぢや。「譬へば楞嚴經に云ふが如し、急流の水の、望めば恬靜爲るが如し」と、餘り急な故に、遠く見れば閑かなやうなと。コノ評では届かぬぞ。「楞嚴經」には、「阿難當に知るべし、此の湛は眞に非らず、急流の水の如し、流れ急にして見えず、是れ流れ無きには非らず。若し想無ければ寧ろ妄習を受けん、汝が六根互用合開するに非んば、此の妄想、滅するを得る時無し」とある。「古人云く、譬へば駛流の水の如し、水流れて定止無し、各各相ひ知らず、諸法も亦た是くの如し

と、是れは「華嚴新經」の第六にある、唐譯とは少し異つて居るが、コレも流注生のことを説いたのぢや。「趙州の答處、意渾べて此れに類す」と、此の評は是なることは是ぢやがサ、若し念々變滅の義と見ては大錯了ぢや。「其の僧又た投子に問ふ、急水上に毬子を打すと云ふ意旨如何。子云く、念念不停流」と、根本無明の皮を冠つて居るから、念念不停流ぢや。「自然に他の問處と恰好なり。古人の行履綿密、答へ得て只だ一箇に似たり、更に計較を消せじ。爾纒かに他に問へば、早く爾が落處を知り了れり」と、趙州と投子と、一ツ口で云ふたやうぢや。分別も計較もない、一句で落處を知るぢや。「孩子の六識、然も無功用なりと雖も、争奈せん、念念停らずして、密水の流るるが如きことを」と、コノ十九は不可ない、投子の答とは大違ひぢや、削るが好い。「密水」とは山川の水ぢや。「投子恁麼に答ふ、謂つ可し、深く來風を辨ずと。雪竇、頌して云く」と、此處は來風を辨ずる處でない、二人の答處は絶倫ぢや。ドウも此の評は全體に亘つて二師の妙處を盡して居らぬぞ。ッレよりも雪竇の頌を看よ。

六識無功伸一問

○有眼如盲有耳如聾 ○明鏡當臺明珠在掌 ○一句道盡

作家曾共辨來端

○何必也 也要辨箇縞素 ○惟証乃知 茫茫急水打

毬子テウジ ○始終一貫シジウイツクワン ○過也クワダ ○道什麼ダウシマ 落處不停誰解看ラクジョトテイジヤクケン ○看即瞎ケンニツクサ ○過也クワダ ○灘下接取ナンゲカケトル

【和訓】六識無功一問を伸ぶ。(○眼有つて盲の如く、耳有つて聾の如し。○明鏡臺に當り、明珠掌に在り。○一句に道ひ盡す。) 作家會つて共に來端を辨ず。(○何んぞ心ならずしもせん。○也た箇の縋素を辨せんを要す。○惟證すれば乃ち知る。) 茫茫たる急水に毬子を打すと。(○始終一貫。○過也。○什麼と道ふぞ。) 落處停らず誰れか看ることを解せん。(○看ば即ち瞎す。○過也。○灘下に接取せよ。)

【提唱】

○コレから雪寶の頌ぢや。

「六識無功一問を伸ぶ」と、六識無功の處を以つて一問を伸べた。問も高ければ答も高いぞ。雪寶が何故斯う頌出したかサ、コレには別に仔細がある。

「作家會つて共に來端を辨ず」と、趙州も投子も、先の手を見越してからに、動きはせぬ。

「茫茫たる急水に毬子を打すと」、二師の答を引ッからけて頌した。雪寶は殊に趙州の句が賞翫ぢやけれどもサ、實に細密の處のあるは、是れ投子ぢや。

「落處停らず誰れか看ることを解せん」と、コリヤ雪寶の拖泥、七穿八穴かサ。ナンの〜、拖泥す

ることがあるものか。二師の妙處、玉の落處が知れぬ。停か不停か、すじつたか曲つたか。看人がない。どうぞ看よかし〜。

【習語】 コレから圓悟の著語ぢや。

「六識無功一問」——「眼有つて盲の如く、耳有つて聾の如し」、コリヤ無功の體を云ふたものぢやが、此處の下語は皆な取らぬが好い。「明鏡臺に當り、明珠掌に在り」、無心にして應ずる、コレも無功の體ぢや。「一句に道ひ盡す」、雪寶、一句に此の僧を贊し盡した。

「作家會共辨來端」——「何んぞ心ならずしもせん」、「作家會つて共に來端を辨ず」と云ふを奪つてサ、某甲はサウでもない。「也た箇の縋素を辨せんことを要す」、宗師ならば、來機の縋素を辨せなければならぬ。「惟證すれば乃ち知る」、刻苦して看よ、人に聞いては役に立たぬぞ。

「茫茫急水打毬子」——「始終一貫」、趙州、投子、二老の答は、首尾が整ふて居る。「過也」、此の僧逃らかした。「什麼と道ふぞ」、コリヤ雪寶を肯ふか、肯はぬか。

「落處不停誰解看」——「看ば即ち瞎」、看たらば早や眼がつぶれるぞ。「過也」、雪寶、何處に看る處があるぞ。見んと要すれば蹉過了ぢや。「灘下に接取せよ」、此の毬子は餘處へは行かぬ、灘下に取り留めよと。届きはせぬども好く著けた。

六識無功伸フ一問古人學道ナ養到這裏謂之無功之功與嬰兒一般雖有眼耳鼻舌身意而不能分別六塵ナ蓋無功用也ナ既到這般田地ニ便乃降龍伏虎坐脫立亡ス如今人但將目前萬境一時歇却何必八地以上方乃如是ニ雖然無功用處ニ依舊山是山水是水雪竇前面頌云活中有眼還同死藥忌何須鑑作家ナ蓋爲趙州投子是作家故云作家會共辨來端茫茫急水打毬子投子道念不停流諸人還知落處ナ麼雪竇末後教人自著眼看是故云落處不停誰解看此是雪竇活句且道落在什麼處ニ

佛果圓悟禪師碧巖集卷第八終

【和訓】六識無功一問を伸ぶと。古人の學道、養ふて這裏に到る、之れを無功の功と謂ふ、嬰兒と一般なり。眼耳鼻舌心意識と雖も、而も六塵を分別すること能はず。蓋し無功なればなり。既に這般の田地に到つて、便乃ち龍を降し虎を伏して、坐脫立亡す。如今の人、但だ目前の萬境を將つて、一時に歇却す。何んぞ必ずしも八地以上にして、方に乃ち是くの如くならん。然も無功の處なりと雖も、舊に依つて山は是れ山、水は是れ水。雪竇、前面に頌して云く、活中に眼有り還つて死に同じ、藥忌何んぞ須ひん作家を鑑みることと。蓋し、趙州、投子、是れ作家なるが爲に、故に云ふ、作家會つて共に來端を辨ず、茫茫たる急水に毬子を打すと。投子道く、念不停流と。諸人還つて落處を知る處。雪竇、末後に人をして自ら眼を著けて看せしむ。是の故に云ふ、落處停らず誰れか看ることを解せんと。此れは是れ雪竇の活句。且らく道へ、什麼の處にか落在する。

佛果圓悟禪師碧巖集、卷の第八終り。

【提唱】コレから圓悟の評ぢや。「六識無功一問を伸ぶと。古人の學道、養ふて這裏に到る、之れを無功と謂ふ、嬰兒と一般なり。眼耳鼻舌身意有りと雖も、六塵を分別すること能はず。蓋し無功なればなり」と、誰れでも參禪の士は、聖胎長養して無功の田地に到れば、嬰兒と同じで、六塵を分別することはない。「既に這般の田地に到つて、便乃ち龍を降し虎を伏して、坐脫立亡す」と、無功の境界に到れば、何んでも思ふ儘の働きが出来る。龍や虎のやうな猛獸を降伏させるのも此の働きぢや。世尊が龍を降したとは、「本行經」に出て居る。晉唐の時代の高僧の中でも、泉大道は龍を降し、豐干禪師、華林善覺、嚴陽尊者、稠禪師等は虎を伏した。又た「坐脫立亡」とは坐死立死と云ふことで、坐脫の人は數ふるに違あらずぢやが、亡立は三祖大師、紙衣道者等ぢや。コリヤ普通の人にや出來ぬ。「如今の人、但だ目前の萬境を將つて、一時に歇却す。何んぞ必ずしも八地以上にして、方に乃ち是くの如くならん」と、併しコレは何も六ヶ敷いことはない、但だ目前の萬境を放下せよ。無功ぢやから直に行く、八地以上の菩薩に限つたことではない。「然も無功の處なりと雖も、舊に依つて山は是れ山、水は是れ水」と、ぢやと云ふても尻に目薬ぢや、とどかぬ。山は山、水は水と云ふても、ホンのことでない。「雪竇、前面に頌して云く、活中に眼有り還つて死

に同じ、藥忌何んぞ須ひん作家を鑑みることをと、コリヤ四十一則の頌ぢや。ソノ則是趙州と投子との問答ぢや。趙州問ふて云く、大死底の人、却つて活する時如何と。スルト投子云く、夜行を許さず、明に投じて須らく到るべしと。コレを雪竇が頌したのぢや。死活不二の作家ぢやから、言句を以つて看んとするは無用ぢやと。蓋し、趙州、投子、是れ作家なるが爲めに、故に云ふ、作家會つて共に來端を辨ず、茫茫たる急水に毬子を打すと、趙州と投子とは、古今の作家ぢやから、此處でも二師の答處の絶倫なることを頌した。「投子道く、念念不停流と。諸人還つて落處を知る麼」と、サト是りや、佛界を説いたか、魔界を説いたかサ。「雪竇、末後に人をして自ら眼を著けて看せしむ」と、コリヤ好い評ぢや。雪竇が二老の落處を自知せしめ様としてサ、「是の故に云ふ、落處停らず誰れか看ることを解せん」と、此の語の寒じさは、「急水上に毬子を打す」よりも、「念念不停流」よりも超過して居る。何故雪竇が漏逗したと云ふたぞ。「此れは是れ雪竇の活句。且らく道へ、什麼の處にか落在する」と、是れを活句と計り押付けて置いては大いに錯るぞ。雪竇の意では、人をして二老の妙處を咬著せしめんことを要したのぢや。若し雪竇の句を以つて本則を看んとせば、癡人猶ほ屏む夜塘の水ぢや。

「佛果圓悟禪師碧巖集、卷の第八終り」と、コレデ八の卷は終りぢや。

註釋 「井の髓を視るが如し」 曹山和尚、徳上座に問ふ、佛の眞法身は猶ほ虚空の若し、物に應じて形を現すること水中の月の如しと。作麼生か箇の應底の道理を説く。徳云く、髓の井を視るが如し。曹山云く、道ふことは太殺だ道ふ、只だ八九成を追ひ得たり。徳云く、和尚又た作麼生。曹山云く、井の髓を視るが如しと。「降龍」「本行經」に曰く、「佛、初め法輪を轉じ、三迦葉を降す。火神堂に於て威光を放ち、彼の火龍の毒火を滅す。四面一時、洞然として熾盛んなり。唯だ所坐の處有つて火光を見ず。火龍見已む、漸く佛の處に向ひ、便即ち身を踊して佛鉢中に入る云々」と。

碧巖集卷第八 終

佛果圓悟禪師碧巖集卷第九

秣陵遠庵吳自弘 校
天界比丘 性湛 閱

第八十一則 藥山射麈中麈

〔藥山射麈中麈〕

垂示云、ニ攬旗奪鼓、キ千聖莫窮、シ坐斷諸訛、チ萬機不到、ス不是神通、レ妙用亦非、ニ本體如然、ニ且道憑箇什麼、ニ得恁麼奇特、一

〔和訓〕 垂示に云く、旗を攬き鼓を奪ふ、千聖も窮むること莫し。諸訛を坐斷して、萬機到らず。是れ神通妙用にあらず、亦た本體如然に非らず。且らく道へ、箇の什麼に憑つてか、恁麼に奇特なることを得たる。

【提唱】 コレから九の巻ぢや。第八十一則、「藥山射塵中塵」と、コノ則是、唯だ是れ、我れ法王と爲つて動作の自在なる、便ち宗門の死活、別に長處有り、世人の知るべからざるとを明すのぢや。「垂示に云く、旗を擡ぎ鼓を奪ふ、千聖も窮むること莫し」と、宗師の大機、能く學者の知解を奪ふぢや。縦ひドンナ悟りを擔いて來ても撲り倒す。是りやナカク佛道とも魔道とも見窮められぬ。「諸訛を坐斷して、萬機至らず」と、サー寝ても起きても法窟の爪牙ぢや。此處へは佛祖と雖も届く者でない。「是れ神通妙用にあらず、亦た本體如然に非らず」と、上件の處へは、神通妙用も本體如然も、比べられるものでない。神通妙用は神仙鬼神も得る、本體如然は凡夫も得る。唯だ是れ、我れ法王と爲つて法に於て自在なる底ぢや。「且らく道へ、箇の什麼に憑つてか、恁麼に奇特なることを得る」と、サー是りや如何したものぞ。幾度か泣き、幾度か歡喜してこそ、コノ奇特は來るぢや。

舉僧問藥山平田淺草塵鹿成群如何射得塵中塵 ○把髻投
 衙○擎頭帶角出來○腦後拔箭 山云看箭 ○就身打劫○下坡不走快便難逢
 ○著 僧放身便倒 ○灼然不同○一死更不再活○弄精魂漢 山云侍
 者拖出這死漢 ○據令而行○不勞再勘○前箭猶輕後箭深 僧便走 ○

棺木裏瞪眼○死中得活○猶有氣息在 山云弄泥團漢有什麼限 ○可
 惜許放過○據令而行○雪上加霜 雪竇拈云三步雖活五步須死 ○一
 手擡一手搦○直饒走百步也須喪身失命○復云看箭○且道雪竇意落在什麼處○若是
 同死同生藥山直得目瞪口呆○一向似無孔鐵鎚堪作何用

【和訓】 擧す。僧、藥山に問ふ、平田淺草、塵鹿群を成す、如何んが塵中の塵を射得せん。(○髻を把つて箭に投ず。○頭を擧げ角を帯びて出で來る。○腦後に箭を抜く。) 山云く、箭を看よ。(○就身打劫。○坡を下つて走らざれば快便逢ひ難し。○著) 僧、身を放つて便ち倒る。(○灼然として同じからず。○一死更に再活せず。○精魂を弄する漢。) 山云く、侍者這の死漢を拖き出せ。(○令に據つて行ず。○再勘するに勞せず。○前箭は猶ほ輕く後箭は深し。) 僧便ち走る。(○棺木裏に瞪眼す。○死中に活を得たり。○猶ほ氣息の在る有り。) 山云く、泥團を弄する漢、什麼の限りか有らん。(○可惜許、放過することを。○令に據つて行ず。○雪上に霜を加ふ。) 雪竇拈じて云く、三步には活すと雖も、五歩には須らく死すべし。(○一手擡一手搦。○直饒ひ走ること百歩すとも、也た須らく喪身失命すべし。○復た云く、箭を看よ。○且らく遣へ、雪竇の意、什麼の處にか落在する。○若し是れ同死同生せば、藥山直に得ん、目瞪口呆すること。○一向に無孔の鐵鎚に似たらば、何んの用を作すにか堪へん。)

【提唱】

本則 コレから本則ぢや。

「擧す。僧、藥山に問ふ、平田淺草、塵鹿群を成す、如何んが塵中の塵を射得せん」と、澧州藥山の惟儼禪師は、石頭希遷の法嗣ぢや。コレは藥山が平田寺に住する時の問答ぢや。僧が出て来てからに、好い狩場にて候、三百五百集まつた中から、塵中の塵を射當てやうとするには、如何したもので御座ると。塵とは大鹿のことぢやから、塵中塵のとは鹿の王ぢや。コノ坊主も喰へぬ奴ぢや。獅子王の如き藥山の處へ、己が塵中の塵となつて来て、藥山を如何と見た。コリヤ驗主問ぢや。斯う云ふ處は、出合頭の一戦に依るものぢや。ソコデ。

「山云く、箭を看よ」と、間、髪を容れず、靦面に射透した。

「僧、身を放つて便ち倒る」と、是れ作家ぞ。粉にはたかれても關はぬと、石火光中に身を横へた。併しサ、惜しむ可し、些の罅隙有りぢや。

「山云く、侍者這の死漢を拖き出せ」と、僧が倒れた處で、諸勘定は濟んだに、藥山で無ければ此の語は出ぬ。嗚呼、打つたと云ふ意ぢや。

「僧便ち走る」と、お世話にならずと、ソロ／＼參りませうと。音もない、見事な働さぞ。

「山云く、泥團を弄する漢、什麼の限りか有らん」と、藥山が僧の走つたのを見て、悟りの泥ン子に居る奴が、ドウなるものかと止を刺したのぢや。茲で僧を見損ふなよ、此の語の通りなれば、雪寶の著語も頷も入らぬ譯ぢや。コレには別に仔細あるが、此の語の寒じさは知音少しぢや。

「雪寶拈じて云く、三步には活すと雖も、五歩には須らく死すべし」と、此の語は南天棒も三回錯つて講じた。三步ばかりは生きるが、五歩までは得生きまいと。雪寶が斯のやうに云ふは、此の僧のことか、諸人のことか、又た藥山のことかサ。此の一句に、雨も風も皆な封じ込めたぞ。コレをサ、僧の倒れた處は三步、走つた處は五歩と見るは邪解ぢや。

習語 コレから圓悟の著語ぢや。

「擧僧問藥山平田淺草塵鹿成群如何射得塵中塵」——「髻を把つて衝に投ず」、罪人が我れと我身に白狀して、首を差出して公儀の役所へ出た。「頭を撃げ角を帯びて出て來る」、此の坊主、寒じい奴らや。天晴れ塵中塵ぢやがサ、腦後に箭を抜く、憐れや、とつくにボン／＼ボ迄射抜かれた。

「山云看箭」——「就身打切」、身に引ッ添ふて、袖の摺合に巾著を切つた。「坡を下つて走らざれば快便逢ひ難し」、コレは急に走つて乗らざれば、恐くは便船を失せんと云ふ義ぢや。矢の落處は急に見ずんば見えまい。「著」、コノ箭は確かに當つたぞ。

「僧放身便倒」——「灼然として同じからず」、此奴、只者でない。福本には「不同」の二字がない。「一死更に再活せず」、コレまでは働いたが、後はいかぬ。「精魂を弄する漢」、倒れて如何する。若し塵中の塵なりや、コ、で藥山を一突に突き殺す處ぢや。コリヤ達者な働さではない。

「山云侍者拖出這死漢」——「令に據つて行ず」、掟通りの仕置ぢや。「再勘するに勞せず」、もう坊

主の腹の中は見えた。コンナ死人は二度と再び世話焼くにや及ばぬ。「前箭は猶ほ軽く後箭は深し」、此處の箭はグツと應へた。能く射込まれたナ。

「僧便走」——「棺木裏に睡眼す」、ナンホ働いても死人ぢや。「死中に活を得たり」、死人も働き出したわいと。コリヤ弄したやうナ。「猶ほ氣息の在る有り」、まだ死に切らぬか。

「山云弄泥團漢有什麼限」——「可惜許、放過することを」、モット打たないで放過したは残念ぢや。「令に據つて行ず」、併し能く止を刺した。「雪上に霜を加ふ」、前には「這の死漢を拖き出せ」と云ひ、又た「泥團を弄する漢」と云ふは餘り叮嚀すぎるわい。

「雪竇拈云三步雖活五步須死」——「一手指一手指、助けたやうな、又た殺したやうな。届かぬ下語ぢや、斯う看ては不可ぬ。「直鏡ひ走ること百歩すとも、也た須らく喪身失命すべし」、もう藥山の第一機に於て射透されて居るものを、三步でも活するものか。いくら走つても無駄なことぢや。此の下語も好くない。「復た云く、箭を看よ」、ソノ射透された箭を看よと。不可々々。「且らく道へ、雪竇の意、什麼の處にか落在する」、サ、雪竇の意は如何ぢや。コノ已下の下語は好い。「若し是れ同死同生せば、藥山直に得ん、目瞪し口呿することを」、此の僧、同死同生の知音ならば、藥山も雪竇の拈語にはキヨロくすべい。「瞪」は目を怒らして直視すること、「呿」は口を張ることぢや。「一向に無孔の鐵鎚に似たらば、何んの用を作すにか堪へん」、一枚平等に見ては、取り柄もない鈍漢ぢや。

這、公案洞下謂之借事問亦謂之辨主問用明當機鹿與麀尋常易射唯有麀中塵是鹿中之王最是難射此塵鹿常於崖石上利其角如鋒銳穎利以身護惜群鹿亦不能近傍這僧亦似惺惺引來問藥山用明第一機山云看箭作家宗師不妨奇特如擊石火似閃電光豈不見三平初參石鞏鞏才見來便作彎弓勢云看箭三平撥開胸云此是殺人箭活人箭鞏彈弓弦三下三平便禮拜鞏云三十年一張弓兩隻箭今日只射得半箇聖人便拗折弓箭三平後舉似大顛顛云既是活人箭爲什麼向弓弦上辨三平無語顛云三十年後要人舉此話也難得法燈有頌云古有石鞏師架弓矢而坐如是三十年知音無一箇三平中的來父子相投和子細返思量元伊是射梁石鞏作略與藥山一般三平頂門具眼向一句下便中的一似藥山道看箭其僧便作塵放身倒這僧也似作家只是有頭無尾既做圈績要陷藥山爭奈藥山是作家一向逼將去山云侍者拖出這死漢如展陣向前相似其僧便走也好是則是爭奈不脫洒粘脚粘手所以藥山云弄泥團漢有什麼限藥山當時若無後語千古之下遭人檢點山云看箭這僧便倒且道是會是不會若道是會藥山因什麼却恁麼道弄泥團漢這箇最惡正似僧問德山學人仗鎧劍擬取師頭時如何山引頸近前云囡僧云師頭落也德山低頭歸方丈又巖頭問僧什麼處來僧云西京來巖頭云黃巢過後曾收得劍麼僧云收得巖頭引頸近前云囡僧云師頭落也巖頭呵呵大笑這般公案都是陷虎之機正類此恰是藥山不管他只爲

識得破只管逼將去雪竇云這僧三步雖活五步須死這僧雖甚解看箭便放身倒山云侍者拖出這死漢僧便走雪竇道只恐三步外不活當時若跳出五步外天下人便不奈他何作家相見須是賓主始終互換無有間斷方有自由自在分這僧當時既不能始終所以遭雪竇檢點後面亦自用他語頌云

【和訓】この公案、洞下に之れを借事問と謂ふ、亦た之れを辨主問と謂ふ。用ゐて當機を明す。鹿と塵とは尋常射易し、唯だ塵中の塵のみ有つて、是れ鹿中の王なり、最も是れ射難し。此の鹿塵、常に崖石の上に於て、其の角を利用して、鋒鏑の類利なるが如し。身を以つて群鹿を護惜す、虎も亦た近傍すること能はず。この僧亦た惶惶なるに似たり、引き來つて藥山に問ふて、用ゐて第一機を明す。山云く、箭を看よと。作家の宗師、妨げず奇特なることを。擊石火の如く、閃電光に似たり。豈に見ずや、三平初め石翠に參ず。翠、才に來るを見て、便ち弓を彎く、勢を作して云く、箭を看よと。三平、胸を撥開して云く、此れは是れ殺人箭か活人箭かと。翠、弓弦を嘖すること三下。三平便ち禮拜す。翠云く、三十年一張弓、兩隻の箭、今日只だ半箇の聖人を射得すと云つて、便ち弓箭を拗折す。三平後に大顛に舉似す。顛云く、既に是れ活人箭、什麼と爲てか弓弦上に向つて辨すと。三平無語。顛云く、三十年後、人の此の語を舉せんことを要すとも、也た得難からんと。法燈、顛有り云く、古石翠師有り、弓矢を架して坐す。是くの如くすること三十年、知音一箇も無し。三平的に中り來る、父子相ひ投和す。子細に返つて思量すれば、元と併れ是れ塚を射ると。石翠の作略、藥山と一般なり。三平頂門に眼を具す、一句下に向つて便ち的に中る。一へに藥山道ふ、箭を看よと。其の僧便ち塵と作つて、身を放つて倒るるに似たり。この僧也た作家に似たり、只だ是れ頭有つて尾無し。既に圖繪を假して、藥山を陥れんことを要す。爭奈せん、藥山是れ作家、一向に遇め將ち去ることを。山云く、侍者、この死漢を拖き出せと。陣を展べて向前するが如くに相ひ似たり。其の僧便ち去る。也た好し、是は則ち是、爭奈せん脱酒ならず、脚に結び手に粘することを。所以に藥山云く、泥團を弄する漢、什麼の限りか右

らんと。藥山若し當時後語無くんば、千古の下、人の檢點に遭はん。山云く、箭を看よと。この僧便ち倒る。且らく道へ、是れ會か是れ不會か。若し是れ會と道は、藥山什麼に因つてか却つて塵塵に道ふ、泥團を弄する漢と。這箇最も惡なり。正に僧の徳山に問ふに似たり。學人、鏑の劍に仍つて、師の頭を取らんと擬する時如し。山、頭を引べて近前して云く、因。僧云く、師の頭落ちぬと。徳山、低頭して方丈に歸る。又た巖頭、僧に問ふ、什麼の處より來る。僧云く、西京より來る。巖頭云く、黃巢過ぎて後、曾つて劍を取得す麼。僧云く、取得す。巖頭、頭を引べて近前して云く、因。僧云く、師の頭落ちぬと。巖頭、呵呵大笑す。這般の公案、都て是れ陷虎の機、正に此れに類す。恰も是れ藥山、他を管せず、只だ識得破するが爲に、只管逼め將ち去る。雪竇云く、この僧、三步には活すと。塵も、五歩には須らく死すべしと。この僧、甚だ箭を看よとを解して、便ち身を放つて倒ると雖も、山云く、侍者、この死漢を拖き出せと。僧便ち走る。雪竇道く、只だ恐るしくは三步の外活せざらんことを。當時若し五歩の外に跳出せば、天下の人、便ち他を奈何ともせじ。作家の相見、須らく是れ賓主始終互換、間斷有ること無くして、方に自由自在の分有るべし。この僧、當時既に始終すること能はず、所以に雪竇の檢點に遭ふ。後面に亦た自ら他の語を用ゐて頌して云く。

【提唱】 コレから圖悟の評ぢや。「この公案、洞下に之れを借事問と謂ふ、亦た之れを辨主問と謂ふ」と、コレは曹洞宗では借事問と云ふ。事を借つて理を顯はすからぢや。又た辨主問とも云ふぢや。「用ゐて當機を明す」と、自ら塵中の塵となつて寄せ付けぬ、當機觀面の一機を明すぢや。「鹿と塵とは尋常射易し、唯だ塵中ののみ有つて、是れ鹿中の王なり、最も是れ射難し。此の鹿塵、常に崖石の上に於て、其の角を利用して、鋒鏑の類利なるが如し。身を以つて群鹿を護惜す、虎も亦た近傍すること能はず」と、サー塵中の塵のやうに、衲僧も自己の鋒鏑を利用して、佛道を護持し、衆生

を利益せねばならぬぞ。この僧亦た惺惺なるに似たり、引き來つて藥山に問ふて、用ゐて第一機を明す」と、此の僧もサ、まるで晴漢でもないから、塵中の塵を將ち來つてからに、手前の器量一杯を顯した。「山云く、箭を看よ」と、一本參つたが覺えたかと。存じも寄らぬことを云ふたものぢや。「作家の宗師、妨げず奇特なることを。擊石火の如く、閃電光に似たり」と、コノ藥山の答處の素早さは目にも留らぬ。「豈に見ずや、三平初め石鞏に參ず」と、コレから類則ぢや。三平は漳州三平の義忠禪師ぢや、大顛寶通に嗣ぎ、大顛は石頭希遷に嗣いだ。又た石鞏慧藏は馬祖の法嗣ぢや。「鞏、才かに來るを見て、便ち弓を彎く勢を作して云く、箭を看よ」と、サテ／＼見事ぢや。「三平、胸を撥開して云く、此れは是れ殺人箭か活人箭かと」、屋島の戰で、佐藤嗣信が能登守の矢面に立つたやうに、胸を押ッ撥けて、サ、是りや殺人箭か活人箭かと。此の答は可なることは可なるも、猶ほ些の罅隙有りぢや。福本には此れが、「此れは是れ殺人箭、如何なるか是れ活人箭」とある。「鞏、弓弦を彈ずること三下。三平便ち禮拜す。鞏云く、三十年一張弓、兩隻の箭、今日只だ半箇の聖人を射得すと云つて、便ち弓箭を拗折す」と、石鞏は流石に馬祖下の人ぢやから、寒じい處がある。別に仔細有り、我れ舌を弄する處、等閑に聞くな。「半箇の聖人」とはサ、未だ許さざるの義ぢや。「晉の符堅が漢南を破り、士一人半を獲たるのみ。謂ゆる道安一人、習鑿齒半人」と云ふより出たのぢや。コレは「通論」に詳しくある。サ、諸人、如何んが答へて、半箇の聖人と道はるゝことを免れ得んぢ

や。「三平後に大顛に舉似す。顛云く、既に是れ活人箭、什麼と爲てか弓弦上に向つて辨ず」と、後に三平が、師匠の潮州大顛の寶通禪師に、此の話を舉似したものと見える。ヌルト大顛の云ふのに、弓弦上に向つて辨ずるは殺人箭でこそあれ、活人箭なりや左様ではあるまいと。只だ此の些子、金鷄一粒の粟ぢや。三平の未徹を知つたから斯う云へるのぢや。此の語は不思議ぢや、南天棒も三十年錯つて會した。佛祖に妙處ないと云ふな、此の語の正味は、趙州も投子も、恐くは吐き出すとはならぬ。透過の人なりや身振ひをするぞ。「三平無語」と、ヤットコ參つた。ハテサテ無語でなければならぬ。法燈の頌、此の南天棒は好かぬ。「顛云く、三十年後、人の此の話を舉せんことを要すとも、也た得難からんと」。三十年後になつても知音はない、舉して問ふ者もあるまいぞ。「法燈、頌有り云く」と、法燈泰欽禪師は、法眼文益に嗣いだ。「古石鞏師有り、弓矢を架して坐す。是くの如くすること三十年、知音一箇も無し。三平的に中り來る、父子相ひ投和す。子細に返つて思量すれば、元と伊れ是れ堞を射ると」、石鞏と三平とサ、父子投機同和して、射當てたと思ふたに、仔細に看りや、石鞏が射たのは黒星ではないと。成程能く見抜いた。大顛の語を呑み込ませぬと、皆々堞を射るぞ。「石鞏の作略、藥山と一般なり。三平頂門に眼を具す、一句下に向つて便ち的に中る」と、コノ石鞏の作略、藥山と同じぢや。三平は一隻眼有る漢ぢやから、胸を撥開した。「一へに藥山道ふ、箭を看よ」と。其の僧便ち塵と作つて、身を放つて倒るるに似たり」と、此の僧が、倒れて藥山を看ん

とかつた處は、三平が錯つた處と、罅隙が相ひ似て居る。「一似藥山道看箭」の十字は、「藥山と一般なり」と云ふ下に在るべき文ぢや。「この僧也た作家に似たり、只た是れ頭有つて尾無し。既に鬮績を做して、藥山を陥れんことを要す。争奈せん、藥山是れ作家、一向に逼め將ち去ることを」と、此の坊サマも作家ぢやけれども、龍頭蛇尾ぢやから、藥山を陥れんとして、却つて己が藥山の手に落ち、キエリ云はせられて二進も三進も行かぬ。「山云く、侍者、この死漢を拖き出せと。陣を展べて向前するが如くに相ひ似たり。其の僧便ち走る。也た好し、是は則ち是、争奈せん脱洒ならず、脚に粘じ手に粘ずることを」と、此の僧の走つたのは、まだく脱洒自在とは行かないがサ、併し斯うより外はあるまい。「所以に藥山云く、泥團を弄する漢、什麼の限りか有らんと。藥山若し當時語無くんば、千古の下、人の檢點に遭はん」と、其の時藥山が泥團を弄する漢と、止を刺いて置かかけりや、後人の點檢に遭つたぢやらう。「山云く、箭を看よと。この僧便ち倒る。且らく道へ、是れ會か是れ不會か」と、此の僧は只者ぢやないから、會、不會を論ずるのは、其の理に當らない。「若し是れ會と道はば、藥山什麼に因つてか却つて恁麼に道ふ、泥團を弄する漢と、泥團を弄する漢と云ふたのは、賞罰でもない、抑下でもない。「這箇最も惡なり」と、惡は當に毒と作るが好い。コリヤ徳山の低頭、巖頭の大笑と同じぢや。「正に僧の徳山に問ふに似たり。學人、鐵錮の劍に仗つて、師の頭を取らんと擬する時如何。山、頸を引へて近前して云く、團。僧云く、師の頭落ちぬと。徳

山、低頭し、方丈に歸る」と、コレは二十則と六十六則との評にあるから、今は云はぬ。此の僧と云ふは龍牙ぢや。「徳山、低頭して方丈に歸る」とサ、ソリヤこそ狼が尾を引ッ込めたぞ。コノ死老爺め、こはし居つた。「又た巖頭、僧に問ふ、什麼の處よりか来る。僧云く、西京より来る。巖頭云く、黄巢過ぎて後、曾つて劍を收得す麼。僧云く、收得す。巖頭、頸を引へて近前して云く、團。僧云く、師の頭落ちぬと。巖頭、呵呵大笑す」と、コレも六十六則の本則ぢやから、就いて看るが好い。「這般の公案、都べて是れ陷虎の機、正に此れに類す」と、此の三つの公案は、總べて同じ作略ぢや。三老とも、嗚呼能く働いた。「恰も是れ藥山、他を管せず、只だ識得破するが爲に、只管逼め將ち去る」と、藥山は此の僧の手元を、肝腸まで見ほして居るから、物の數ともせず逼め付けた。「雪竇云く、この僧、三步には活すと雖も、五歩には須らく死すべしと。この僧、甚だ箭を看ることを解して、便ち身を放つて倒ると雖も」と、三千世界、針の先程も箭でない處はないぞ。併し、コノ評、己は不好ん、心元ない。「山云く、侍者、この死漢を拖き出せと。僧便ち走る。雪竇道く只だ恐くは三步の外、活せざらんことを」と、此の處、須らく仔細に看ずんば、恐くは雪竇の意を失せん。「當時若し五歩の外に跳出せば、天下の人、便ち他を奈何ともせじ」と、コ、處を呑み込んだならばサ、塵中の塵ぢや、不生不滅の法華ぢや。此の坊サマを如何シンマイもなるまい。「作家の相見、須らく是れ賓主始終互換、間斷無くして、方に自由自在の分有るべし」と、藥山と僧と、餘り

違ひはない。コリヤ七十五則にある鳥白と僧との商量の如く、賓主互換ちや。「この僧、當時既に始終すること能はず、所以に雪竇の檢點に遭ふ」と、併しサ、此の僧、尻スボミになつたから、遂と雪竇に検査せられた。「後面に亦た自ら他の語を用ゐて頌して云く」と、次ぎ下に、雪竇が公案の中で云ふた語を用ゐて頌した。サ一頌を看よ。

塵中塵

○高著眼看○擊頭戴角去也 君看取 ○何似生○第二頭走○要

射便射看作什麼

下一箭

○中也○須知藥山好手

走三步

○活鐵鏡

地○只得三步○死了多時

五步若活

○作什麼○跳百步○忽有箇死中得活

時如何 成群趁虎

○二俱並照○須與他倒退始得○天下衲僧放他出頭○也

只在草窠裏 正眼從來付獵人

○爭奈藥山未肯承當這話○藥山則故是雪

竇又作麼生○也不于藥山事也不于雪竇事也不于山僧事也不于上座事

雪竇高

聲云看箭

○一狀領過○也須與他倒退始得○打云已塞却爾咽喉了也

【和訓】塵中の塵。(○高く眼を著けて看よ。○頭を撃げ角を戴き去れり。) 君看取せよ。(○何似生。○第二頭に走る。○射んと要せば便ち射よ。看て什麼か作さん。) 一箭を下す。(○中れり。○須らく知るべし、藥山好手なることを。) 走ること三步。(○活鐵鏡地。○只だ三步を得たり。○死に了ること多時。○五步若し活せば。(○什麼をか作さん。○跳ること百歩。○忽ち箇の死中に活を得る有る時如何。○群を成して虎を趁はん。○二俱に並べ照さん。○須らく他の與に倒退して始めて得べし。○天下の衲僧、他に出頭を放す。○也た只だ草窠裏に在り。) 正眼從來獵人に付す。(○爭奈せん、藥山未だ肯て這の話を承當せざることを。○藥山は則ち故に是、雪竇又た作麼生。○也た藥山の事に干らず、也た雪竇の事に干らず、也た山僧が事に干らず、也た上座が事に干らず。) 雪竇高聲に云く、箭を看よ。(○一狀に領過す。○也た他の與に倒退して始めて得べし。○打つて云く、已に爾が咽喉を塞却し了れり。)

【提唱】

○コレから雪竇の頌ぢや。

「塵中の塵」と、雪竇が斯く頌出したは、恰も佐藤嗣信が、能登守の矢先に立ち塞つたやうぢや。只だ能く此の僧の、作家か作家ならざるかを看よ。茲に仔細が有るぞ。

「君看取せよ」と、サ一君看取せよと、此の僧の未在の處を見辨けて此の句を下した。

「一箭を下す」と、藥山が、箭を看よと、一箭を下した。

「走ること三步」と、コリヤ身を放つて倒れた處ぢや。

「五步若し活せば」と、此處で一働きたら、虎が手に入るべいにサ。惜しいとは走つたが、

少し足らぬと、細かな穿鑿ぢや。

「群を成して虎を趣はん」と、若し活き返つたならばサ、如何なものでも寄つても付かぬと。此の頰は寒じいぞ、ドウも云はれぬ。併し何んの群を成すことがある、一人で好い。

「正眼從來獵人に付す」と、コリヤ弓を射る目的の正しきに就いて云ふたものぢや。藥山は獵師の名人ぢや。「泥團を弄する」の語、藥山能く目端が利いた。ソレを雪竇が、恐らく智音はないぞと切つて投げ出した。雪竇の奇妙な名作ぞ。

「雪竇高聲に云く、箭を看よ」と、コ、へ来て、雪竇の奴が大衆をグツと睨み廻してからに、高聲に云く、「箭を看よ」と。此の語の鋒を犯し手を傷くること莫れぢや。サ、諸人、此の箭はドノやうなものぢや、直かサ、曲かサ、各々看よ。前箭は猶ほ軽く後箭は深し。コレで諸勘定相ひ濟んだと云ふものぢや。

「雪竇」 コレから圓悟の著語ぢや。

「麀中麀」——「高く眼を著けて看よ」、各々、ウツカリと看まいぞ。「頭を擧げ角を戴き去れり」コリヤ麀中の麀の當體を云ふたぢや。

「君看取」——「何似生」、雪竇が看取せよと云はれるが、何に似たナ。作家にも似、不作家にも似た。稽古木か杓子か。「第二頭に走る」、此の僧の働きは、向上の作用でない。「射んと要せば便ち

射よ、見て什麼か作さん」、射やうとするなら射よ、何より易いことぢや、見て居つては埒が明かぬと。此の下語は不是々々。

「下一箭」——「中れり」、此の箭は黒星を射當てた。「須らく知るべし、藥山好手なることを」、藥山は弓の名人ぢや、無駄箭は射ぬ。

「走三步」——「活鱗鱗地」、身を放つて倒れた處は天晴れぢや。「只だ三步を得たり」、此の僧、力一杯で三步ぢや、コレが全力ぢや。五歩なりや必ず死ぬる。「死に了ること多時」、此の僧は、是れ切りの奴ぢや。

「五步若活」——「什麼をか作さん」、たけの知れたとぢやと。此の句は、「跳百歩」の下へ入れて看るが好い。「跳ること百歩」、百歩しても、別なことはあるまいサ。「忽ち箇の死中に活を得る有る時如何」、若しサ、活き返つたら、其の時は藥山何んとするぞ。

「成群趣虎」——「二り俱に並べ照さん」、師學共に見抜いて好く頌した。趣ふ者も趣はれる者も、兩鏡の相照すが如く一般ぢや。「須らく他の與に倒退して始めて得べし」、麀の爲めに虎も倒退三千ぢや。「天下の衲僧、他に出頭を放す」、此處に到つては、天下の衲僧も後に退つて、此の僧に我儘を云はせらうぞ。「也た只だ草窠裏に在り」、併し何を云ふにもムサ／＼しい。虎を趣ふ處か、草裏に倒れてケツカル。

「正眼從來付獵人」——「爭奈せん、藥山未だ肯て此の話を承當せざることを」、併し、藥山は未だ正眼を具した獵師ぢやないぞと。雪竇が托上したを圓悟が奪つた。コリヤ好い下語ぞ。「藥山は則ち故に是、雪竇又た作麼生」。藥山は且らく措きサ、雪竇の主は如何ぢや、正眼は有るか無いかと。「也た藥山の事に干らす、也た雪竇の事に干らす、也た山僧が事に干らす、也た上座が事に干らす」、他人に當てた事ぢやない、佛祖も識らぬぞと。コリヤ圓悟、天晴れの腕力、絶前絶後ぢや。

「雪竇高聲云看箭」——「一狀に領過す」、雪竇と藥山とは同罪ぢや。此の雪竇の語に出合ふては、三世の諸佛も詫り證文ぞ。「也た須らく他の與に倒退して始めて得へし」、雪竇の矢面に向ふ者はあるまい。「打つて云く、已に爾が咽喉を塞却し了れり」、コレが圓悟の一箭ぢや。見ん事、諸人の咽喉に立つたぞ。

麀中麀君看取納僧家須是具麀中麀底眼有麀中麀底頭角有機關有作略任是插翼猛虎載角大蟲也只得全身遠害這僧當時放身便倒自道我是麀下一箭走三步山云看箭僧便倒山云侍者拖出這死漢這僧便去也甚好爭奈只走得三步五步若活成群越虎雪竇道只恐五步須死當時若跳得出五步外活時便能成群去越虎其麀中麀角利如鎗虎見亦畏之而走麀爲鹿中王常引群鹿越虎入別山雪竇後面頌藥山亦有當機出身處正眼從來付獵

人藥山如能射獵人其僧如麀雪竇是時因上堂舉此語東爲一圓話高聲道一句云看箭坐者立者一時立不得

【和訓】麀中の麀、君看取せよと、納僧家、須らく是れ麀中麀底の眼を具し、麀中麀底の頭角有り、機關有り、作略有るべし。任ひ是れ翼を挿む猛虎、角を載く大蟲も、也た只だ身を全うして害に遠かることを得ん。這の僧當時身を放つて便ち倒れて、自ら這ふ、我れは是れ麀と。一箭を下す、走ること三步と。山云く、箭を看よと。僧便ち倒る、山云く、侍者、這の死漢を拖き出せと。這の僧便ち去る。也た甚だ好し、爭奈せん、只だ三步を走り得ることを。五步若し活せば、群を成して虎を越はん。雪竇道く、只だ恐くは五歩には須らく死すべしと。當時若し五歩の外に跳得出して活せん時、便ち能く群を成し去つて虎を越はん。其の麀中の麀、角の利なること鎗の如し、虎も見て亦た之れを畏れて走る。麀は麀中の王爲り、常に群鹿を引いて、虎を越ふて別山に入らしむ。雪竇、後面に、藥山の亦た當機出身の處有ることを頌す。正眼從來獵人に付すと。藥山、射を能くする獵人の如し、其の僧、麀の如し。雪竇是の時、因に上堂。此の語を舉して、東にて一圓の話を爲して、高聲に一句を道ふて云く、箭を看よと。坐者立者、一時に立つこと得じ。

【提唱】コレから圓悟の評ぢや。「麀中の麀、君看取せよと。納僧家、須らく是れ麀中麀底の眼を具し麀中麀底の頭角有り、機關有り、作略有るべし」と、サー見地透脱せねば、麀中麀底の眼も頭角も出來ぬ。機關は宗旨の第一ぢや。脱洒自在な作略がなければ、爲人はならぬぞ。「任ひ是れ翼を挿む猛虎、角を載く大蟲も、也た只だ身を全うして害に遠かることを得ん」と、ドンナ猛虎でも、コ

レに出合ふては、身仕舞をして逃げる外はあるまい。「この僧、當時身を放つて便ち倒れて、自ら道ふ、我は是れ麋と」、此の僧が未だ藥山の前へ出ぬ先に、身を野原へ出し、死人になつて働いた大機ぞ。「一箭を下す、走ること三步と。山云く、箭を看よと。僧便ち倒る。山云く、侍者、この死漢を拖き出せと」、藥山が箭を看よと云ふと、僧が倒れた。ソコで藥山が、エ、此の死漢を引摺り出せと。人を殺さば須らく血を見るべしぢや。「この僧便ち走る。也た甚だ好し、争奈せん、只だ三步を走り得ることを」と、逃げるが奥の手、能く逃げた。併しソレもやつと三步ぢや。「五歩若し活せば、群を成して虎を趣はん」と、若し五歩で活き返つたら、虎を趣ふ作用があらう。「群を成して」と云ふには譯があらう、コレは一人でなければ面白くない。「雪竇道く、只だ恐くは五歩には須らく死すべし」と、コレは先に辨じたとは少し違ひがある、自ら看よ。只だ此處の安排、モソツト云ひやうがありさうなものぞ。「當時若し五歩の外に跳得出して活せん時、便ち能く群を成し去つて虎を趣はん」と。其の麋中の麋、角の利なること鎗の如し、虎も見て亦た之れを畏れて走る。麋は鹿中の王爲り、常に群鹿を引いて、虎を趣ふて別山に入らしむ」と、コレは虎を趣ふと云ふことから、又た麋中麋の講釋ぢや。別に文句は無い。「雪竇、後面に、藥山の亦た當機出身の處有ることを頌す。正眼從來獵人に付すと」、南天棒も此の語を久しく見錯つた。「藥山、射を能くする獵人の如し、其の僧、麋の如し」と、此の已下は好くない、亦た一場の懺懼、取らぬ方が好い。コレでは「正眼從來」の句の

大事の風味が突ン抜けた。「雪竇是の時、因に上堂。此の語を擧して、束ねて一團の話を爲して、高聲に一句を道ふて云く、箭を看よと。坐者立者、一時に起つこと得じ」と、坐下の大衆、皆な腰骨を抜かした。「雪竇後録」に云ふのに、「今日、古人の作に倣つて、擬して一箭を放つ。高聲に喝して曰く、箭を看よ。復た云く、中れりと。便ち下座」とある。

【注】「髻を把つて箭に投す」 方語にて自許冤家と云ふこと。即ち僧の、自ら麋中麋となつて、藥山の前に出でたるに譬ふ。把髻は、罪人の首を斬る時、髻を振り上げて居るを云ふ。箭は「韻會」に、治を以て箭と爲すと有り、役所なり。

第八十二則 大龍堅固法身

【大龍堅固法身】

垂示云、竿頭絲線具眼方知格外之機、作家方辨且道、作麼生是竿頭、絲線格外之機、試舉看。

【和訓】垂示に云く、竿頭の絲線、具眼方に知る。格外の機、作家方に辨す。且らく道へ、作麼生か是れ竿頭の絲線、格外の

【提唱】 第八十二則、「大龍堅固法身」と、コノ則はサ、堅固法身、別に意味あることを明すぢや。

「垂示に云く、竿頭の絲線、具眼方に知る」と、機關作略を具した師家の探竿、コリヤ佛祖の命脈ぢや。向はんと擬すれば便ち背く。正知見に有らずんば、安んぞ能く見ることを得んや。研き抜いた衲僧でなければ合點行かぬ。「格外の機、作家方に辨す」と、コリヤ超宗越祖の機を云ふ。師家は格外の機を用ひて、學者の力量を驗する。コレも作家で無けりや辨せられぬ。「且らく道へ、作麼生か是れ竿頭の絲線、格外の機。試に擧す、看よ」と、サー其の竿頭の絲線、格外の機は、何んと辨得したものだ。本則に就いて看よ。

舉僧問大龍色身敗壞如何是堅固法身 ○話作兩概 ○分開也好

龍云山花開似錦澗水湛如籃 ○無孔笛子撞著氈拍板 ○渾崙擊不破

○人從陳州來却往許州去

【和訓】 擧す。僧。大龍に問ふ。色身敗壞、如何なるか是れ堅固法身。(○話、兩概と作る。○分開するも也た好し。) 龍云

く、山花開いて錦に似、澗水湛へて藍の如し。(○無孔の笛子、氈拍板に撞著す。○渾崙擊けれども破れず。○人、陳州從り來つて、却つて許州に往き去る。)

【提唱】

本則 コレから本則ぢや。

「擧す。僧、大龍に問ふ、色身敗壞、如何なるか是れ堅固法身」と、破れては堅固とは云はれま
いが、色身の外に堅固法身が御座るか。此の僧は、色身と法身と、二つに見た。無平等の差別ぢ
や。又た一つと見たら、無差別の平等ぢや。コレは人々仔細に見ねば話しはならん。サー此の僧は、
有眼か無眼か、先づ無眼に似たがサ、亦た恐しい根性玉のある奴ぢや。大龍は哲州大龍山の智洪弘
濟禪師のことぢや。法を白兆志圓に嗣ぎ、圓は感潭資國に嗣ぎ、國は徳山宣鑑に嗣いだ。

「龍云く、山花開いて錦に似、澗水湛へて藍の如し」と、是れ什麼ぞ。サー風雨惡しき時は如何
ぢや、湫を傾け嶽を倒す時は如何ぢや。此の味を知ると禪者ぢやがサ。世間の瞎知識共が不變真如
と云ふ、ソナナことではないぞ。或る師家の云ふのに、若し此の語を以て、當意即妙、皆な實相と相
違背せずとなさば大いに庭逕有りと。隱山は深く其の言を感じた。且らく道へ、大龍何故ぞ、山
花、澗水を以つて、他の問處に答ふ。諸方、此の則を邪解して云ふのに、溝に填ち壑に塞ると。

南天棒云く、従前、香殿の「的的兼帶無し」の頌を以つて、等閑の看を作し、今ま大龍の語を見て、始めて言語に非らず道斷に非らざる處を知つた。知の端的は、大笑の外は無い、啼哭の外は無い。大笑は啼哭、即ち是れぢや。

【著語】 コレから圓悟の著語ぢや。

「舉僧問大龍色身敗壞如何是堅固法身」——「話、兩概と作る」、色と法と、壞と不壞と、二つになつたと。甘口な下語ぢや。「分開するも也た好し」、色法の二つに見るも苦しくない。一つに見る無差別の平等は、惡平等ぢやから。

「龍云山花開似錦澗水湛如藍」——「無孔の笛子、甕拍板に撞著す」、大龍の答處は、諸人の耳には聞えずいと。コリヤ不可ぢや。此の下語では本則はいかぬ、却つて學者の邪魔になる。只だ骨を折れ。「渾崙壁けども破れず」、此の答話、ナカ／＼手の輪に乗らぬと。コレも不是々々、あゝ斯うぢやない。「人、陳州従り來つて、却つて許州に往き去る」、コレは所問と相違の義ぢや。陳州と許州とは大いに隔つて居るからぢや。日本の諺にある、「伊勢や日向の物語り」と云ふ類ぢや。コレは堅固法身を問ふたに、傍へ外したと。ソレではない。此の答話ナカ／＼如何して〜。

此事若向言語上覓一如掉棒打月且得沒交涉古人分明道欲得親切莫將問來問何故問

在答處答在問處這僧擔一擔莽鹵換一擔鶻突致箇問端敗缺不少若不是大龍爭得蓋天蓋地他恁麼問大龍恁麼答一合相更不移易一絲毫頭一似見兔放鷹看孔著楔三乘十二分教還有這箇時節麼也不妨奇特只是言語無味杜塞人口是故道一片白雲橫谷口幾多歸鳥夜迷巢有者道只是信口答將去若恁麼會盡是滅胡種族漢殊不知古人一機一境敲枷打鎖一句一言渾金璞玉若是納僧眼腦有時把住有時放行照用同時人境俱奪雙放雙收臨時通變若無大用大機爭解恁麼籠天罩地大似明鏡當臺胡來胡現漢來漢現此公案與花藥欄話一般然意却不同這僧問處不明大龍答處恰好不見僧問雲門樹凋葉落時如何門云體露金風此謂之箭鋒相拄這僧問大龍色身敗壞如何是堅固法身大龍云山花開似錦澗水湛如藍一如君向西秦我之東魯他既恁麼行我却恁麼行與他雲門一倍相返那箇恁麼行却易見這箇却不恁麼行却難見大龍不妨三寸甚密雪竇頌云。

【和訓】 此の事、若し言語上に向つて覓めば、一へに棒を掉つて月を打つが如し、且得沒交涉。古人分明に道ふ、親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れ。何が故ぞ。問は答處に在り、答は問處に在りと。這の僧、一擔の莽鹵を擔つて、一擔の鶻突に換ふ。箇の問端を致す、敗缺少なからず。若し是れ大龍にあらずんば、争でか蓋天蓋地なることを得ん。他、恁麼に問ふ。大龍、恁麼に答ふ。一合相にして、更に一絲毫頭を移易せず、一へに兔を見て鷹を放ち、孔を看て楔を著くるに似たる。三乘十二分教、還つて這箇の時節有り麼。也た妨げず奇特なることを。只だ是れ言語無味にして、人口を杜塞す。是の故

に道ふ、一片の白雲谷口に横ふ、幾多の歸鳥か夜巢に迷ふと。有る者は道ふ、只だ是れ口に信せて答へ將ち去ると。若し恁麼に會せば、盡く是れ滅胡種族の漢なることを。殊に知らず、古人一機一境、枷を敲き鎖を打ち、一句一言、渾金璞玉なることを。若し是れ衲僧の眼瞶ならば、有る時は把住し、有る時は放行す、照用同時、人境俱奪、雙放雙收、時に臨んで通變なり。若し大用大機無くんば、争でか恁麼に天を籠め地を罩むることを解せん。大いに明鏡、臺に當つて、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現するに似たり。此の公案は、花藥欄の話と一般なり。然れども意却つて同じからず、道の僧の問處明かならず、大龍の答處恰好なり。見ずや、僧、雲門に問ふ、樹湖み葉落つる時如何。門云く、體露金風と。此れ之れを箭鋒相ひ挂ふと謂ふ。道の僧、大龍に問ふ、色身敗壞、如何なるか是れ堅固法身。大龍云く、山花開いて錦に似、澗水湛へて藍の如しと。一へに君は西秦に向ひ、我は東魯に之くと云ふが如し。他既に恁麼に行き、我は却つて不恁麼に行く。他の雲門と一倍相ひ返く。那箇恁麼に行き、却つて見難し。這箇却つて不恁麼に行きは、却つて見難し。大龍、妨げず三寸甚だ密なることを。雪竇頌して云く。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢや。「此の事、若し言語上に向つて覓めば、一へに棒を掉つて月を打つが如し、且得没交涉」と、此の則にコンナことを云ふては不可ぬ。此の評、恰も意が無いやうぢや。「古人分明に道ふ、親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れ。何が故ぞ。問は答處に在り、答は問處に在りと」、法の淵源、佛道の根元を徹見せんとするなら、何も殊更に問ふとはないぞ、問處で済む譯ぢやと。コレは首山省念の語ぢや。「這の僧、一擔の莽鹵を擔つて、一擔の鶻突に換ふ」と、コリヤ好評ぞ。コノ坊主、犬の糞と猫の糞とを取り換へたやうなものぢやと。「莽鹵」は苟且ぢや、即ち草卒ぢや。「鶻突」は無分曉ぢや。無分曉のホダグイなら、火いけにもならぬ。「箇の問處

を致す、敗缺少なからず」と、イヤ、敗缺でない、僧の問も好いぞ。「若し是れ大龍にあらずんば、争てか蓋天蓋地なることを得ん」と、サー大龍で無さや、卵の毛程も残らぬ働きは出来ぬ。「他恁麼に問ふ。大龍、恁麼に答ふ。一合相にして、更に一絲毫頭を移易せず、一へに兎を見て鷹を放ち、孔を看て楔を著くるに似たる」と、問處答處共に血滴々の親切ぢや、一絲毫も違はせぬ。丁度兎を見て鷹を放ち、孔を看て楔を著くるが如くに諦當ぢや。「三乘十二分教、還つて這箇の時節有り。也た妨げず奇特なることを」と、經文の中にも、此のやうな難有いことがあるかサ。「只だ是れ言語無味にして、人口を杜塞す」と、此處がドウも不可々々。ナンの無味であらう。「是の故に道ふ、一片の白雲谷口に横ふ、幾多の歸鳥か夜巢に迷ふ」と、コリヤ夾山善會の法嗣の洛浦元安の語ぢや。「禪林類聚」の一に、「僧、洛浦に問ふ、百千の諸佛に供養せんより、一りの無心道人に供養せんに如かじと、未審し、百千の諸佛、何の過か有る、無心の道人、何の徳か有る。浦曰く、一片の白雲谷口に横ふ、幾多の歸鳥か夜巢に迷ふ」と。コレを引いたのは、大龍の語の見分け難きを云ふ爲めぢや。サー白も黒も、覆ふ味は同じことぞ。道の分らなくなつた坊主どもは、マゴ／＼するぢや。「有る者は道ふ、只だ是れ口に信せて答へ將ち去ると。若し恁麼に會せば、盡く是れ滅胡種族の漢なることを」と、大龍の語を、出放題の答話とするは、佛法を滅す奴ぢや。「殊に知らず、古人一機一境、枷を敲き鎖を打ち、一句一言、渾金璞玉なることを」と、古人は拂子を立てキウが、飯を喫はら

が、佛見法見を打ち敲くぢや。エヘン、ウフンにも、一つとして無駄はない。「若し是れ衲僧の眼腦ならば、有る時は把住し、有る時は放行す。照用同時、入境俱奪、雙放雙收、時に臨んで通變なり」と、目の鞘の外れた者ならば、放行するも把住するも、雙放するも雙收するも、ソノ時々で通變自在ぢや。「若し大用大機無くんば、争てか恁麼に天を籠め地を罩むることを解せん。大いに明鏡、臺に當つて、胡來れば胡現し、漢來れば漢現するに似たり」と、此の大用大機が無さや、蓋天蓋地して、明鏡の如く、來る者を直に映するやうな働きは出來ぬ。「此の公案は、花藥欄の話と一般なり」と、御叮嚀なこと。一般か兩般か、汝自ら看よ。圓悟の言に便つて、他の脚跟下に轉するな。花藥欄の話は、第三十九則にある。「僧、雲門に問ふ、如何なるか是れ清淨法身。門云く、花藥欄。僧云く、便ち恁麼にし去る時如何。門云く、金毛の獅子」と。「然れども意却つて同じからず」と、サー何處が違ふた。「這の僧の問處明かならず、大龍の答處恰好なり」と、此の坊主、根性の底が知れない。ソコへ以つて行つてからに、大龍が毛抜合せに答へた。「見ずや、僧、雲門に問ふ、樹凋み葉落つる時如何。門云く、體露金風と。此れ之れを箭鋒相ひ拵ふと謂ふ」と、是れは第二十七則ぢや。作家と作家との出合ひぢや。「這の僧、大龍に問ふ、色身敗壞、如何なるか是れ堅固法身。大龍云く、山花開いて錦に似、澗水湛へて藍の如し」と、コノ大龍の語を胡亂にして置くな。「一へに君は西秦に向ひ、我は東魯に之くと云ふが如し。他既に恁麼に行き、我は却つて不恁麼に行く。他の雲門と一倍

相ひ返く」と、コノ二十九字は好くない、削る方が好い。雲門は西秦に向ひ、大龍は東魯に向つたやうに、雲門は順に表を答へ、大龍は逆に裏を答へて、雲門の則と此の則とは、丁度裏表ぢやと。茲は左様でないぞ。那箇恁麼に行く、却つて見易し。這箇却つて不恁麼に行くは、却つて見難し、大龍妨げず三寸甚だ密なるを。雪竇頌して云く」と、雲門の則は却つて見易いが、大龍は見難い。大龍の舌頭甚だ細密で、佛祖も齒が立たぬ。雪竇の頌を看よ。

問曾不知 ○東西不辨 ○弄物不知名 ○買帽相頭 答還不會 ○南北不

分 ○換却獨體 ○江南江北 月冷風高 ○何似生 ○今日正當這時節 ○天下人

有眼不曾見 ○有耳不曾聞 古巖寒檜 ○不雨時更好 ○無孔笛子撞著甕柏板

堪笑路逢達道人 ○也須是親到這裏始得 ○還我拄杖子來 ○成群作隊恁麼

來 不將語點對 ○向什麼處見大龍 ○將箇什麼對他好 手把白玉

鞭 ○一至七拗折了也 驪珠盡擊碎 ○留與後人看 ○可惜許 不擊

碎 ○放過一著 ○又恁麼去 增瑕類 ○弄泥團作什麼 ○轉見郎當 ○過犯彌

天 國有憲章 ○ 誠法者懼 ○ 朝打三千暮打八百 三千條罪 ○ 只道
得一半在 ○ 八萬四千無量却來墮無間業也未還得一半在

【和訓】問會つて知らず。(○東西辨せず。○物を弄して名を知らず。○帽を買ふに頭を相す。○答還つて會せず。○南北分たず。○胸體を換却す。○江南江北。○月冷かく風高し。○何似生。○今日正當、道の時節。○天下の人、眼有つて會つて見ず。○耳有つて會つて聞かず。○古巖寒槍。○雨らざる時も更に好し。○無孔の笛子、篋板に撞著す。○笑ふに堪へたり路に達道の人に逢ふて。(○也た須らく是れ親しく這裏に到つて始めて得べし。○我に拄杖子を還し來れ。○群を成し隊を作して恁麼に來る) 語黙を將つて對せざるを。(○什麼の處に向つてか大龍を見ん。○箇の什麼を將つてか他に對して好ならん。) 手に白玉の鞭を把つて。(○一より七に至るまで拗折し了らん。○驪珠盡く擊碎す。○後人に留與して看せしむ。○可憐許。○擊碎せずんば。(○一著を放過す。○又た恁麼にし去る。○我頼を増さん。○泥團を弄して什麼か作さん。○轉た見る即當たることを。○過犯彌天。) 國に憲章有り。(○法を講る者は懼る。○朝打三千暮打八百。○三千條の罪。○只だ一半を道ひ得ると在り。○八萬四千、無量劫來、無間の業に墮すとも、也た未だ一半を還し得ざると在らん。)

【提唱】

團 コレから雪竇の頰ぢや。

「問會つて知らず」と、僧と大龍と、兩方に丁目を出した。所謂師學機を同うした其の按排が如何も云はれぬので、且らく雪竇が斯く云ふた。初めの二句で骨合を云ふが雪竇の家風ぞ。本則が親切

ぢやから、頰も親切ぢや。

「答還つて會せず」と、大龍の答は、色身か法身か、齒が立たぬ。コリヤ「誰れか當に的を辨ずべき」と云ふと同じぢや。此の「問會つて知らず、答還つて會せず」の二句は、團悟も天下の老和尚も、權を入れることはならぬ。

「月冷かく風高し」と、大龍の答處の孤峻なるを云ふ。齒の立たぬ端的、切めてやはとて秋の月かサ。上の二句では行くまいと思ふて又た斯う遣つた。

「古巖寒槍」と、脈も熱も上つた。繪にも描かれぬ、歌にも述べられぬ。コレで頰し盡した。

「笑ふに堪へたり路に達道の人に逢ふて」と、コリヤ香嚴の語ぢや。サテ「云ひも云ふたとぞ。

コレはサ、一轉して、香嚴が斯く云ふたも尤ぢやと、知音は笑ふと云ふのぢや。香嚴志閑禪師の頰に「的を兼帶無し、獨運何んぞ依頼せん。路に達道の人に逢ふて、語黙を將つて對せざれ」とある。ソレを引いたのぢや。

「語黙を將つて對せざれ」と、語でも合ふが、駄でも合ふぞ。何も規則は定めない。

「手に白玉の鞭を把つて」と、大龍の答處は如何あらうぞならば、手に拄杖子を把つてサ。

「驪珠盡く擊碎す」と、十方法界、一顆の明珠と悟つた處、今時那邊ともに打つ。是れは能く打つた。見事なものは皆な打つぢや。

「擊碎せずんば」と、ソレを打ち砕かずに、大事に守らうぞならば、それこそ。

「瑕類を増さん」と、却つて瑕が出来やうぞ。

「國に憲章有り」と、サウして國の旋に依つて罰せられる。三千條の罪過ぢや。此の語は百年後、絶えて知音がない。上で済んだに、又た斯う云ふ、此處が雪竇の妙處ぢや。

「三千條の罪」と、コレを、「抄」に、大龍漏逗して、佛祖に肖たる故にと云ふは、茶紙袋ぢや。

習語 コレから圓悟の著語ぢや。

「問會不知」——「東西辨せず」、「知らず」と云ふから、「辨せず」と云ふたのぢやが、コ、の下語は總て好くない。「物を弄して名を知らず」、色身の法身のと、日常玩んでゐながら名を知らぬと。コナとは不可ぬ。帽を買ふに頭を相す、比べ廻して、好みの寸法に随つて答へた。

「答還不會」——「南北分たず」、コ、の下語も不是々々。「會せず」から「分たず」と云ふた。「髑髏を換却す」、大龍の答話を呑み込むと、天下皆な變る。何んと變る、地獄も變る。「江南江北」、堅固法身かと思ふたに色身敗壞か、大いに取ッ違つた。

「月冷風高」——「何似生」、コノ風色、何物に似たぞ。色身に似たか、法身に似たかサ。諸人、高く眼を著けて看よ。「今日正當、這の時節」、直下にはれぢや、何も遠方のことではない。「天下の人、眼有つて會つて見ず」、「耳有つて會つて聞かず」、天下の人、眼もあり耳もありながら、「山花開

いて錦に似、澗水湛へて藍の如し」の端的は、見ることも聞くことも出来ぬ。

「古巖寒槍」——「雨らざる時も更に好し」、見渡せば柳櫻をこぎ交せてサ、雨にも好い晴にも好い、見事々々。「無孔の笛子、甕柏板に撞著す」、無分曉ぢや、カラ分らぬ。

「堪笑路逢達道人」——「也た須らく是れ親しく這裏に到つて始めて得べし」、此の笑ひは滅多な者には出来ぬ。達道の人ならではサ。「我に拄杖子を還し來れ」、拄杖で達道の人の胸骨を打ち折つてくれへい。「群を成し隊を作して恁麼に來る」、衆生は元來達道の人よ。

「不將語默對」——「什麼の處に向つてか大龍を見ん」、語黙を離れて、ドウ大龍を見るか。死獨地なれば夢にも見ぬ。「箇の什麼を將つてか他に對して好ならん」、語黙では悪いとならば、吹き飛ばしてもするが好いのか。

「手把白玉鞭」——「一より七に至るまで拗折し了らん」、ソノ七尺の拄杖子を、一寸々々にヘン折れと。知見情量と云ふも元來他物に非らずサ、コレを打ち砕くものはないぞ。ぢやから拄杖子を折ると云ふのぢや。

「驢球盡擊碎」——「後人に留與して看せしむ」、打ち砕いた見事な處を、後人に看せうぞ。「可惜許」、雪竇、打ち砕いて、アラ惜しやと、コリヤ弄したのぢや。

「不擊碎」——「一著を放過す」、雪竇、後學の爲に織路を開いて、好い手を見せた。「又た恁麼に

し去る「雪竇、ひどい男ぢやが、柔かなことも云ふか。

「増瑕類」——「泥團を弄して什麼か作さん」、ソレが何にならうぞ、「轉た見る即當たることを」、郎當ぢや、見られたザマかい。「過犯彌天」、碎かすして瑕を増せば、大龍の罪過は彌天ぢや。

「國有憲章」——「法を識る者は懼る」、雪竇は流石法を識つて居ると弄した。「朝打三千、暮打八百」、コレが憲章と云ふものぢや。

「三千條罪」——「只だ一半を道ひ得ること有り」、雪竇が斯く云ふも一半に過ぎぬと。コノ下語は取らぬ。「八萬四千、無量却來、無間の業に墮すとも、也た未だ一半を還し得ざること有り」、本分の宗師、本分に依つて行ずべしぢや。若し然らざれば、無量却來、無間の業に墮つとも、漸く一半ぢやと。此の下語も大いに違つた。

雪竇頌得最有工夫前來頌雲門話却云問既有宗答亦依同這箇却不恁麼却云問曾不知答還不曾大龍答處傍瞥直是奇特分明是誰恁麼問未問已前早納敗缺了也他答處俯能恰好應機宜道山花開似錦澗水漲如藍爾諸人如今作麼生會大龍意答處傍瞥直是奇特所以雪竇頌出教人知道月冷風高更撞著古巖寒檜且道他意作麼生會所以過來道無孔笛子撞著甌柏板只這四句頌了也雪竇又怕人作道理却云堪笑路逢達道人不將語默對

此事且不是見聞覺知亦非思量分別所以云的無兼帶獨運何依賴路逢達道人不將語默對此是香嚴頌雪竇引用也不見僧問趙州不將語默對未審將什麼對州云呈漆器這箇便同適來話不落爾情塵意想一似什麼手把白玉鞭驪珠盡擊碎是故祖令當行十方坐斷此是劔刃上事須是有恁麼作略若不恁麼總辜負從上諸聖到這裏要無些子事自有好處便是向上人行履處也既不擊碎必增瑕類便見漏逗畢竟是作麼生得是國有憲章三千條罪五刑之屬三千莫大於不孝憲是法章是條三千條罪一時犯了也何故如此只爲不以本分事接人若是大龍必不恁麼也

【和訓】雪竇、頌して得て最も工夫有り。前來雲門の話を頌するに、却つて云く、問既に宗有り、答も亦た同じき故なりと。這箇却つて不恁麼。却つて云く、問曾つて知らず、答還つて會せずと。大龍の答處、傍瞥にして直に是れ奇特なり。分明に是れ誰か恁麼に問ふ、未だ問はざる已前に、早く敗缺を納れり。他、答處、俯して能く恰好なり。機宜に應じて道ふ、山花開いて錦に似、澗水漲へて藍の如しと。爾諸人、如今作麼生會大龍の意を會す。答處傍瞥にして、直に是れ奇特なり。所以に雪竇、頌出して、人をして知らしむ。月冷かく風高し、更に古巖寒檜と撞著すと道ふ。且らく道へ、他の意作麼生か會せん。所以に過來道ふ、無孔の笛子、甌柏板に撞著すと。只だ這の四句に頌し了れり。雪竇、又た人の道理を作さんことを怖れて、却つて云く、笑ふに堪へたり路に達道の人に逢ふて、語默を將つて對せざることと。此の事、且つ是れ見聞覺知にあらざ、亦た思量分別に非らず。所以に云く、的的兼帶無し、獨運何んぞ依賴せん、路に達道の人に逢ふて、語默を將つて對せざれと。此れは是れ香嚴の頌なり、雪竇引き用ゆ。見すや、僧、趙州に問ふ、語默を將つて對せざれと、未審し、什麼を將つてか對せん。州云く、漆器を呈すと。這箇便ち過來の語に同じ、爾が情塵意想に落ちず、一へに什麼にか似たる。手に白玉の鞭を把

つて、驪球盡く擊碎すと。是の故に祖令當行、十方坐斷、此れは是れ劍刃上の事なり。須らく是れ慈愍の作略有るべし。若し不愆ならば、總に從上の諸聖に辜負せん。這裏に到つて、要らず些子の事無くして、自ら好處有り。便ち是れ向上の人の行履の處なり。既に擊碎せんば、必ず瑕類を増さん。便ち漏逗を見ん。畢竟して是れ作廢生か是なることを得ん。國に憲章有り、三千條の罪と。五刑の屬三千、不孝より大なるは莫し。憲は是れ法、章は是れ條。三千條の罪、一時に犯し了れり。何が故ぞ此くの如くなる、只だ本分の事を以つて、人を接せざるが爲めなり。若し是れ大龍ならば、必ず不愆ならん。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢや。「雪竇、頌し得て最も工夫有り。前來雲門の話を頌するに、却つて云く、問既に宗有り、答も亦た同じき攸なりと。這箇は却つて不愆。却つて云く、問會つて知らず、答還つて會せずと」、雪竇の此の頌はサ、最も工夫を凝したものでぢや。前來には第二十七則の雲門の「體露金風」の話を頌するのに、「問既に宗有り、答も亦た同じき攸なり」と云ふたが、大龍は雲門とは違ふたから、「問會つて知らず、答還つて會せず」と頌した。「大龍の答處、傍瞥にして直に是れ奇特なり」と、大龍の答はサ、チヨツと傍瞥を見て、ヒヨツクラと云ふたやうぢやが、甚だ奇特ぢや。「分明に是れ誰か慈愍に問ふ。未だ問はざる已前に、早く敗缺を納れ了れり」と、サ、分明に斯のやうに問ふて來たのは誰かサ。此の僧は問はない已前に、大龍に引ツこくられて仕舞ふた。「他、答處、俯して能く恰好なり」と、機に應じ、第二義に下つて慈悲を垂るゝと。此の「俯して」と云

ふ字が落付かぬ。恰好ならば合頭ぢや。「機宜に應じて道ふ、山花開いて錦に似、澗水湛へて藍の如しと」、コ、の「機宜に應じ」とは合點行かぬ、問ひ人に依つて答へる氣か。庫裡で火を焼く坊主が、物を書くと云ふても堅固法身ぢや。機宜に應じて違ふと云ふこともない。「備諸人、如今作廢生か大龍の意を會す。答處傍瞥にして、直に是れ奇特なり」と、又た傍瞥が出たわい。「所以に雪竇頌出し、人をして知らしむ。月冷かく風高し、更に古巖寒檜と撞著すと。且らく道へ、他の意作廢生か會せん」と、此の中で、「教人知」の三字と、「更撞著」の三字とは削る方が好い。古人も取らぬ。「所以に適來道ふ、無孔の笛子、甕柏板に撞著すと」、コノ十四字も無い方が好い。「只だ這の四句に頌し了れり。雪竇、又た人の道理を作さんことを怕れて、却つて云く、笑ふに堪へたり路に達道の人に逢ふて、語黙を將つて對せざる」と。此の事、且つ見聞覺知にあらず、亦た思量分別に非らず」と、祖師門下の事はサ、見聞覺知や、思量分別で行くものでない。所以に云く、的的兼帶無し、獨運何んぞ依頼せん、路に達道の人に逢ふて、語黙を將つて對せざれと。此れは香嚴の頌なり、雪竇引き用ゆ」と、ぢやから云ふのに、「的的兼帶無し」と、妙狹帶をも透脱し分明にすれば、明暗偏正の沙汰もないと。悟溪和尚は著語して、斬釘截鐵と云ふた。サウあらうぞなれば、「獨運何んぞ依頼せん」で、家舍を離れて途中に非らず、途中を離れて家舍に非らず。萬象の中獨露身ぢや。コリヤ脱體無依の道人底ぢや。「路に達道の人に逢ふて、語黙を將つて對せざれ」と、上の如き獨運の人に逢

へば、眉八字に分るぢや。目撃道存ぢや。一劔天に倚つて寒しか。「見ずや、僧、趙州に問ふ、語黙を將つて對せざれと、未審し、什麼を將つてか對せん」と。州云く、漆器を呈すと、或る坊様が、趙州に「語黙を將つて對せざれ」を問ふた。ヌルト趙州は、「漆器を呈す」と。古食器の無分曉を將つて來たか。老漢大分困つたナ。「這箇便ち適來の話に同じ、備が情塵意想に落ちず、一へに什麼にか似たる」と、大龍と趙州とは同じぢやと。餘り叮嚀な。「手に白玉の鞭を把つて、驢珠盛く擊碎すと、サ、大龍の手段は何んぢやと云へば、方に正令當行ぢや。「是の故に祖令當行、十方坐斷」と、ソレに逢ふては何んでも耐るものでない。「此れは是れ劔刃上の事なり。須らく是れ慙慙の作略有るべし。若し不慙慙ならば、總に従上の諸聖に辜負せん」と、凡そ宗師ともあらう者は、此の擊碎底の作略が無けらにやならぬ。若しサツでないならば、佛祖に對して申譯があるまい。「這裏に到つて、要らず些子の事無くして、自ら好處有り。便ち是れ向上の人の行履の處なり」と、盡く擊碎して退けた處に、些子の事も無いと。好箇の不淨潔、サテく穢ない。コレでは元の一ツものぢや。是れが向上の人の洒落の處でもあるまい。可笑な評ぢや。「既に擊碎せずんば、必らず瑕類を増さん」と、見事な瑕ぢや。「便ち漏逗を見ん。畢竟して是れ作麼生か是なることを得ん」と、ソレが漏逗ぢやとすれば、如何すれば好いかサ。「國に憲章有り、三千條の罪と。五刑の屬三千、不孝より大なるは莫し。憲は是れ法、章は是れ條。三千條の罪、一時に犯し了れり」と、國には刑の憲法がある。五刑とは、

一には墨刑、是れは額に入墨することぢや。二には劓刑、是れは鼻を截ることぢや。三には剕刑、是れは足を削ることぢや。四には宮刑、是れは淫刑ぢや。五には大辟、是れは死刑ぢや。不孝の罪が一番重いとある。墨刑が一千條、劓刑も一千條、剕刑が五百條、宮刑が三百條、大辟が二百條、合せて三千條となる。コレを一時に犯したのぢやと。「何が故ぞ此くの如くなる。只だ本分の事を以つて、人を接せざるが爲めなり。若し是れ大龍ならば、必らず不慙慙ならん」と、大龍は正令を行じたから、上の如く漏逗はせぬと。コノ評は取らぬ。

【圖】「湫を傾け嶽を倒す」 湫は小池なり。「兩方に丁目を出した」 双方同じやうに出でたること 「茶紙袋」 やくたいもな
いと云ふ意。「死鴉地」 鴉は犬の一種を云ふ、「妙狹兼帶」 浮山遠錄公の九帶の一。「人天眼目」の頌に云く、「妙叶眞機、境物
如如、是れ凡是れ聖、欠くる無く餘る無し」と。

第八十三則 雲門露柱相交 【雲門露柱相交】

擧雲門示衆云古佛與露柱相交是第幾機 ○三千里外沒交涉 ○
七花八裂 自代云 ○東家人死西家人助哀 ○一合相不可得 南山起雲

○乾坤莫觀○刀斫不入

北山下雨

○點滴不施○半河南半河北

【和訓】擧す。雲門、衆に示して云く、古佛と露柱と相ひ交る、是れ第幾機ぞ。(○三千里外没交渉。○七花八裂。) 自ら代つて云く。(○東家の人死すれば、西家の人哀を助く。○一合相不可得。) 南山に雲起り。(○乾坤觀ること莫し。○刀斫れども入らず。) 北山に雨を下す。(○點滴も施さず。○半は河南、半は河北。)

【提唱】 第八十三則、「雲門露柱相交」と、コノ則是、雲門の言句、益、意味に參すべきことを明すぢや。コレも垂示がなくて直に本則ぢや。

本則

「擧す。雲門、衆に示して云く、古佛と露柱と相ひ交る、是れ第幾機ぞ」と、サー古佛と大黒柱と相撲を取る、見たか〜と、「相ひ交はる」とは交遊同參の義ぢや。

「自ら代つて云く」と、大衆の中で、誰れも道ひ得る者がなかつたから、ソコで雲門が自ら代つて云ふのに。

「南山に雲起り」と、コノ相撲はサ、南山に雲が寄つて、北山に雨が降るのぢやと。錯つて現成の會を作すな。風吹けども入らずぢや。

「北山に雨を下す」と、コリヤ又た如何ぢやな。水洒げども著かずぢや。

今時の或る長老がサ、此の則を判断して云ふのに、古佛を妄心とし、露柱を無心として、非一非異の阿頼耶識とすると。大小大の妄判ぢや、笑ふ可し〜。

著語 コレから圓悟の著語ぢや。

「擧雲門示衆云古佛與露柱相交是第幾機」——「三千里外没交渉」、コリヤとても及びもないとぢや。「七花八裂」、コノ垂語は、天堂をも破り、地獄をも破るぢや。

「自代云」——「東家の人死すれば、西家の人哀を助く」、雲門泣き面、圓悟も泣いた。雲門が自問自答したは、諸人の悲を助けたやうぢや。「一合相不可得」、古佛と露柱と一合相の處は不可得ぢやに、何に云ふことがあるかと。コノ下語は不可々々。

「南山起雲」——「乾坤觀ること莫し」、造化の力に干らぬ。黒漫々ぢや、眼にも遮らぬ。「刀斫れども入らず」、南山に雲起る端的是、斫ることも碎くことも出来ぬ。

「北山下雨」——「點滴も施さず」、雨が降ると云ふが、何處に降つた。米粒程の雨も降りはせぬ。「半は河南、半は河北」、平等と見たを、圓悟、放開して見せた。

雲門大師出八十餘員善知識遷化後七十餘年開塔觀之儼然如故他見地明白機境迅速

大凡垂語別語代語直下孤峻只這公案如擊石火似閃電光直是神出鬼沒慶藏主云一大藏教還有這般說話麼如今人多向情解上作活計道佛是三界導師四生慈父既是古佛爲什麼却與露柱相交若恁麼會卒摸索不著有者喚作無中唱出殊不知宗師家說話絕意識絕情量絕生死絕法塵入正位更不存一法爾纔作道理計較便纏脚纏手且道他古人意作麼生但只使心境一如好惡是非撼動他不得便說有也得無也得有機也得無機也得這裏拍拍是合五祖先師道大小雲門元來膽小若是山僧只向他道第八機他道古佛與露柱相交是第幾機一時問且向目前包裹僧問未審意旨如何門云一條條三十文買他有定乾坤底眼既無人會後來自代云南山起雲北山下雨且與後學通箇入路所以雪竇只拈他定乾坤處教人見若纔犯計較露箇鋒銚則當面蹉過只要原他雲門宗旨明他峻機所以頌出云。

【和訓】 雲門大師、八十餘員の善知識を出す。遷化の後、七十餘年にして、塔を開いて之れを観るに、儼然として故の如し。他、此地明白にして、機境迅速なり。大凡そ垂語、別語、代語、直下に孤峻なり。只だこの公案、擊石火の如く、閃電光に似たり。直に是れ、神出で鬼没す。慶藏主云く、一大藏教に還つて這般の說話有り麼と。如今の人、多く情解の上に向つて活計を作して道ふ、佛は是れ三界の導師、四生の慈父。既に是れ古佛、什麼と爲てか却つて露柱と相ひ交ると。若し恁麼に會せば、卒に摸索不著ならん。有る者は喚んで、無中に唱へ出すと作す。殊に知らず宗師家の說話、意識を絶し情塵を絶し、生死を絶し、法塵を絶して、正位に入つて更に一法を立てざることを。爾纔かに道理計較を作さば、便ち脚に纏ひ手に纏はん。且らく道へ、他の古人の意作麼生。但只心境をして一如ならしむれば、好惡是非、他を撼動すること得じ。便ち有と説くもまた得たり、無も也た得たり。有機も也た得、無機も也た得たり。這裏に到つて拍拍是れ合ふ。五祖先師道く、大小の雲門、元來眼小なり。若し是れ山僧ならば、只だ他に向つて第八機と道はんと。他道ふ、古佛と露柱と相ひ交る、是れ第幾機ぞと。一時の間、且らく目前に向つて包裹す。僧問ふ、未審し、意旨如何。門云く、一條の條、三十文に買ふと。他、乾坤を定むる底の眼有り、既に人の會する無し。後來自ら代つて云く、南山に雲起り、北山に雨を下すと。且らく後學の與に箇の入路を通ず。所以に雪竇、只だ他の乾坤を定むる處を拈じて、人をして見せしむ。若し纔かに計較を犯して、箇の鋒銚を露さば、則ち當面に蹉過せん。只だ他の雲門の宗旨に原いて他の峻機を明めんことを要す。所以に頌出して云く。

【提唱】 コレから圓悟の評ちや。「雲門大師、八十餘員の善知識を出す」と、コノ八十餘員と云ふのは、傳燈錄に依つたのぢやが、「會元」には十三人とある。實際は七十六人ぢやと云ふ。遷化の後、七十餘年にして、塔を開いて之れを観るに、儼然として故の如し」と、コノ七十餘年と云ふも、十七年と云ふのが正しい。雲門が世を去つてから十七年目に、塔を開いて見ると、其の形は儼として故の儘ちやつたと。是れ禪定か、信心か。是れは「雲門本録」で見ると、雄武軍の節度使、阮紹興と云ふ者が、夢に雲門の告に依つて、朝廷に奏して開塔したのぢやとある。「他、見地明白にして、機境迅速なり。大凡そ垂語、別語、代語、直下に孤峻なり」と、前にも度々云ふたやうに、雲門は見地透脱明白、應機の手段が迅速ぢやから、垂語、別語、代語共に、峻峻で手も付けられぬ。此の三語は雲門から始つたのぢや。「只だこの公案、擊石火の如く、閃電光に似たり。直に是れ、神出で鬼没

「と、サー神かと思へば猫も出る。見定められぬぢや。」慶藏主云く、「一大藏經に還つて這般の説話有り麼と。如今の人、多く情解の上に向つて活計を作して道く、佛は是れ三界の導師、四生の慈父、既に是れ古佛、什麼と爲てか却つて露柱と相ひ交ると。若し恁麼に會せば、卒に摸索不著ならん」と、慶藏主は、一大藏經にも雲門の示衆のやうな傑れたものはないと云つて居る。コノ慶藏主と云ふは、圓悟の同參の人ぢや。然るに今時の者は、只だく情解してからに、佛は古佛ぢや、ソノ古佛が何故淫交するのぢやと。何んたる死たわ言ぞ。有る者は喚んで、無中に唱へ出すと作す。殊に知らず、宗師家の説話、意識を絶し、生死を絶し、法塵を絶して、正位に入つて更に一法を存せざることをと。又た或者は、根も葉もないことを云ふたのぢやと。大機大用を具した宗師の説話は、ソナナことではない。意識、情量を離れ、生死の絆を切り、佛見法見の煩惱をも斷つたものをサ。コノ「一法を存せざるとを」と云ふのは削つた方が好い。「正位に入つて」も元來賞玩ではないがサ。「爾纔かに道理計較を作さば、便ち脚に纏ひ手に纏はん。且らく道へ、他の古人の意作麼生」と、若し道理計較を以て看やうとすれば、泥田の中へ陥つたやうなものぢや。ソレならば、雲門の意は畢竟如何ぢや。「但只心境をして一如ならしむれば、好惡是非、他を撼動すること得じ。便ち有と説くも也た得たり、無も也た得たり。有機も也た得、無機も也た得たり。這裏に到つて拍拍是れ合ふ」と、コノ三十九字は取らぬ、削る方が好い。斯う教へて出来るものでない、鴉を鷹に遣ふやうな。コレ

では雲門宗は窺はれぬ。心境一如の場に到れば、誰れと打つても拍子が合ふと云ふては、本則には何んの奇持もない。「五祖先師道く、大小の雲門、元來膽小なり。若し是れ山僧ならば、只だ他に向つて第八機と道はんと」。コレは「禪林類聚」の一に出て居る。五祖法演の云ふのに、雲門は膽ツ玉の小さい奴ぢや。山僧なら第八機と云はうと。サテく尤も至極。「南山に雲起り、北山に雨を下す」と秤に掛けて見よ。雲門も好いがサ、五祖も亦た最も好い。「他道ふ、古佛と露柱と相ひ交はる、是れ第幾機ぞと。一時の間、且らく目前に向つて包裹す」と、紙に包んで目前に投げ出して、周遮すると。圓悟、コノ繪解は何んぢや。「僧問ふ、未審し、意旨如何。門云く、一條の條、三十文に買ふ」と、「雲門録」の垂語部を見ると、「上堂に云く、古佛と露柱と相ひ交る、第幾機ぞと。對無し。師曰く、我に問へ、汝が與に道はん。僧便ち問ふ。師云く、一條の條、三十文に買ふと。又た前話に代つて云く、南山に雲起り、北山に雨を下すと。僧云く、作麼生か是れ一條の條、三十文に買ふ。師云く、打與」と。サー一條の條を三十文に買ふとは何んぢやナ。「他、乾坤を定むる底の眼有り、既に人の會する無し」と、雲門は大道の淵源を呑み込んで居るが、人は知らぬ。「後來自ら代つて云く、南山に雲起り」と、コレは雲が晴れると讀め。「北山に雨を下す」と、コレは雨が歇んだと讀め。「且らく後學の與に、箇の入路を通ず」と、コリヤ諸人の爲に、一織路を通じたのぢや。「所以に雪寶、只だ乾坤を定むる處を拈して、人をして見せしむ。若し纔かに計較を犯して、箇の鋒鋒を露さ

ば、則ち當面に蹉過せん。只だ他の雲門の宗旨に原いて、他の峻機を明めんことを要す。所以に頌出して云くと、ぢやから雪竇が、雲門の乾坤を定める底の機鋒を拈出したのぢやが、知見を以つてしては見えぬ。雲門宗が手に入らねば全體に蹉過ぢや。先づ雲門の宗旨を明めて掛かれ。サ、雪竇の頌ぢや。

南山雲

○乾坤莫觀○刀斫不入

北山雨

○點滴不施○半河南半河北

四七二三面相觀

○幾處覓不見○帶累傍人○露柱掛燈籠

新羅國裏

曾上堂

○東湧西沒○東行不見西行利○那裏得這消息來

大唐國裏未

打鼓

○遅一刻○還我話頭來○先行不到未後太過

苦中樂

○教阿誰知

樂中苦

○兩重公案使誰舉○苦便苦樂便樂○那裏有兩頭三面來

誰道黃

金如糞土

○具眼者辨○試拂拭看○阿刺刺○可惜許○且道是古佛是露柱

【和訓】 南山の雲、(○乾坤觀ること莫し。○刀斫れども入らず) 北山の雨、(○點滴も施さず。○半は河南、半は河北)

四七二三 面り相ひ觀る。(○幾處にか覓るに見ず。○傍人を帶累す。○露柱、燈籠を掛く) 新羅國裏曾つて上堂。(○東湧西沒。○東行、西行の利を見ず。○那裏よりか這の消息を得來る) 大唐國裏未だ鼓を打せず。(○遅一刻。○我に話頭を還し來れ。○先行到らず未後太過ぎたり) 苦中樂。(○阿誰をしてか知らしめん) 樂中苦。(○兩重の公案誰をしてか舉せしめん。○苦は便ち苦、樂は便ち樂。○那裏にか兩頭三面有り來らん) 誰れか道ふ黃金糞土の如しと。(○具眼の者辨ぜよ。○試に拂拭して看よ。○阿刺刺。○可惜許。○且らく道へ、是れ古佛か是れ露柱か)

【提唱】

頌 コレから雪竇の頌ぢや。

「南山の雲」と、南山の雲と吐き出したは有り難い。コリヤ雲門の宗旨を目前に抛出したのぢや。見上ぐれば箱根山、見下せば三島か。

「北山の雨」と、此の二句には、何んとも云はれず讚歎の意を含んで居る。

「四七二三面り相ひ觀る」と、上に云ふ雲門の句を會せば、佛祖とも面り相見の分有らん。七佛已前より黒眼で見ホスぢや。

「新羅國裏曾つて上堂」と、コレと下の句との二句は、差別無しぢや。雲門の活機を見せた句で、道理は云はれぬ。懷州の牛禾を喫すれば、益州の馬腹脹ると云ふと同じぢや。

「大唐國裏未だ鼓を打せず」と、鼓を打つてこそ上堂すべきに、ソレもせずサ。

「苦中樂」と、雪竇の名作、青龍刀を首へ打ち掛けたやうナ。
 「樂中苦」と、コレも雪竇の腕力。「苦中樂、樂中苦」は、雲門と衡を争ふの六字ぢや。
 「誰れか道ふ黄金糞土の如し」と、此の一句は禪月の詩を引いたのぢやが、禪月の心とは月に籠
 ぞ。是れ雪竇の家風、又た東山下の調、最も絶唱、須らく仔細にすべしぢや。

【習語】 コレから圓悟の著語ぢや。此の著語も好くない。

「南山雲」——「乾坤觀ること莫し」、雲門の手元には霞もない。「刀斫れども入らず」、併し何處に
 も隙が無くて、切り入ることも出来ぬ。

「北山雨」——「點滴も施さず」、イヤ／＼一滴の雨もないぞと。「半は河南、半は河北」、コリヤ南
 山、北山へ掛けてサ。

「四七二三面相觀」——「幾處にか覓るに見ず」。面り觀ると云はれるが、全體見ずぢや。「傍人
 を帶累す」、四七二三を見て何にせうぞ。お世話ナ。「露柱、燈籠を掛く」、靚面に相呈すて、面前分明
 ぢやないか。

「新羅國裏會上堂」——「東湧西没」、新羅も大唐も、東西一致と看よ。自由自在、箇々轉處に立在
 すぢや。上堂の活機用は、十八神變のやうぢや。「東行、西行の利を見ず」、圓悟は此處へ邪魔を入れ
 てサ、雪竇は新羅は知るが大唐は知らないと。向ひ合つてさへ人の利は知れぬ、ソノ知れぬ處こそ

知音よ、「行」とはサ、魚行などの行で、商賣と云ふことぢや。「那裏よりか這の消息を得來る」、ソ
 ナ馬鹿な消息は何處から得たぞ。

「大唐國裏未打鼓」——「遅一刻」、先づ打つべき鼓ぢやに、如何して遅れたのぢや。「我に話頭を
 還し來れ」、口を叩かずとも置きやれ、己が仕様があるぞ。「先行到らず末後太だ過ぎたり」、元來遅
 速の差別はない。遅牛も淀、早牛も淀ぢや。速いが速いでなく、遅いが遅いでない。

「苦中樂」——「阿誰をしてか知らしめん」、此の苦中樂は、誰れにも知らせることは出来ぬ。自知
 自得するのみぢや。

「樂中苦」——「兩重の公案、誰をしてか舉せしめん」、苦中樂、樂中苦とは、兩重の公案ぢや、
 誰れが取り上げるものやら。「苦は便ち苦、樂は便ち樂」、コリヤ圓悟の唱和ぢや。「那裏にか兩頭三面
 有り來らん」、上には生佛一致と説き、又た生は生、佛は佛と頌す。コレぢや兩頭三面ぢや。驢にな
 り貂になりかサ、無性に化けたものぢや。

「誰道黄金如糞土」——「具眼の者辨ぜよ」、眼の開いたものなら、黄金か糞土かを辨じて看よ。
 「試に拂拭して看よ」、見えなげりや、目を拭ふて看よ。「阿刺刺」、オ、恐ろしく酷い。「可惜許」、黄
 金を糞土とはあつたらぢや。「且らく道へ、是れ古佛か是れ露柱か」、黄金と土と、是れが古佛かサ、
 露柱かサ。サ、諸人如何ぢや。

南山雲北山雨雪寶買帽相頭看風使帆向劔刃上與爾下箇注脚直得四七二三面相視也
 莫錯會此只頌古佛與露柱相交是第幾機了也後面劈開路打葛藤要見他意新羅國裏會
 上堂大唐國裏未打鼓雪寶向電轉星飛處便道苦中樂樂中苦雪寶似堆一堆七珍八寶在
 這裏了所以未後有這一句子云誰道黃金如糞土此一句是禪月行路難詩雪寶引來用禪
 月云山高海深人不測古往今來轉青碧淺近輕浮莫與交地卑只解生荆棘誰道黃金如糞
 土張耳陳餘斷消息行路難行路難君自看且莫土曠人稀雲居羅漢

【和訓】 南山の雲、北山の雨と。雪寶、帽を買ふに頭を相し、風を見て帆を使ふ。劔刃上に向つて、爾が與に箇の注脚を
 下す。直に得たり、四七二三、面り相ひ觀ることを。也た錯つて會すること莫れ。此れ只だ古佛と露柱と相ひ交る、是れ第幾
 機ぞと云ふことを頌し了れり。後面に路を劈開して、葛藤を打して、他の意を見さしめんことを要す。新羅國裏會つて上堂、
 大唐國裏未だ鼓を打せずと。雪寶、電轉じ星飛ぶ處に向つて、便ち道ふ、苦中樂、樂中苦と。雪寶、七珍八寶を堆一堆して、
 這裏に在きたるに似たり。所以に未後、這の一句子有り。云く、誰れか道ふ黃金糞土の如しと。此の一句は、是れ禪月の行路
 難の詩なり。雪寶、引き來つて用ゆ。禪月云く、山高く海深うして人測らず、古往今來轉た青碧、淺近輕浮與に交ること莫れ、
 地卑うして只だ荆棘を生ずることを解す、誰か道ふ黃金糞土の如しと、張耳陳餘消息を斷ず、行路難行路難、君自ら看よと。
 且らく、土曠かに人稀なること莫し。雲居の羅漢。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢや。南山の雲、北山の雨と。雪寶、帽を買ふに頭を相し、風を見て帆

を使ふ。劔刃上に向つて、爾が與に箇の注脚を下す」と、雪寶がサ、「古佛と露柱と相ひ交る、第幾
 機ぞ」と云ふ注に、「南山の雲、北山の雨」と、丁度帽を買ふに頭を相し、風を見て帆を使ふ様に、
 都合して恰好よく遣つた。下手に觸ると命がないぞ。「直に得たり、四七二三面り相ひ觀ることを」と。
 也た錯つて會すること莫れ。此れ只だ古佛と露柱と相交る、是れ第幾機ぞと云ふことを頌し了れり」
 と、此の「四七二三面り相ひ觀ることを」と云ふ處さへ合點行けば、大黒柱と立白と相撲を取つた、
 何方が勝つたと云ふことも知れるぢや。「後面に路を劈開して、葛藤を打して、他の意を見さしめん
 ことを要す。新羅國裏會つて上堂、大唐國裏未だ鼓を打せずと。雪寶、電轉じ星飛ぶ處に向つて、
 便ち道ふ、苦中樂、樂中苦と。雪寶、七珍八寶を堆一堆して、這裏に在きたるに似たり」と、雪寶
 がサ、雲門の意を看せしめやうとしてからに、電轉じ星飛ぶ底の活句を以つて頌した。コリヤ雪寶が
 所有ゆる法財をマケ出して、爾が將ち去るに任すと云つたやうなものぢや。「所以に未後、這の一句
 子有り、云く、誰れか道ふ黃金糞土の如しと」、コノ一句、前箭は猶ほ軽く後箭は深しぢや。元來生
 死も無い、衆生も無いぞ。「此の一句は、是れ禪月の行路難の詩なり。雪寶、引き來つて用ゆ」と、
 此の一句は、禪月が皓首座と云ふ人の住院を送る時に作つた行路難の詩の一句ぢや。雪寶、茲に引
 き來るとは云へ、禪月の意とは雲泥を隔るぞ。「禪月云く」と、此の詩は、只だ一句の證引ぢや、外
 に意味はない。「山高く海深うして人測らず」と、道人の心は山の高さが如く、又た大道の根源は海

の深さが如くにして、中々測り難い。「古往今來轉た青碧」と、看よ、今も昔も、山は青く聳ち、海は碧く澄み渡る如く、徳行の人は何時になつても變ることはないぞ。「淺近輕浮與に交ること莫れ」と、馬鹿な者は氣が賤しい、不實の人は輕々しい。ソナ者を友とするな。「地卑うして只だ荆棘を生ずることを解す」と、心が賤しいから荆棘が生える。「誰れが道ふ黄金糞土の如しと」、「人の心の善は、用ゐるときは虎になるが、用ゐざるときは鼠も同じぢや。「張耳陳餘消息を斷ず」と、此の二人は初めは仲が好かつたが、後には仇となつた。コリヤ道心が無いからぢや。此の事は、「前漢書」を見ると分る。曰く、「張耳は大梁の人なり、陳餘も亦た大梁の人なり。餘、年少し、耳に父事す。相ひ共に刎頸の友たり。高祖、布衣たりし時、嘗つて耳に従つて遊ぶ。秦、魏を滅して、耳を千金、餘を五百金に購求す。兩人姓名を變じて、俱に陳國に之き、里監門(官吏)と爲る。又た耳、餘の交遊、父子の如からず、國に據つて權を争ふ。還つて豺虎の如し」と、然るに、「刁刀記」と云ふ書にある事柄は、大分異つて居る。「張耳は元と是れ常山王なり。陳餘は彼の鄰國の王なり。互に其の契り深く、斷金の志有り。然るに國境を論じて、終に其の消息を斷ち了る。終に國を捨て、張耳は高祖の臣と成り、陳餘は趙の歌王の臣と成る。高祖、張耳と韓信とを得、同じく左右の大將と成す。歌王、陳餘を得、一國彼をして其の政を致さしむ。其の後、高祖、趙國を亡し、張耳を以つて王と爲す」とある。一説として述べて置く。「行路難行路難、君自ら看よ」と、世の中の有様を看

よ。せ、ち辛い世に比ぶれば、阿波の鳴門には波風もない。「且らく、土曠かに人稀なること莫し。雲居の羅漢」と、雪竇が此の一句を擧げた意を知る者はない、圓悟と雪竇ばかりぢやと天狗鼻にした、コリヤ圓悟の自點胸ぞ。

註釋 (四生の慈父) 胎生、卵生、溫生、化生を四生と云ふ。(禪月) 名は貫休。蜀主王建、禪月大師の號を賜ふ。後梁の乾化二年寂、壽八十一。詩名大いに天下に聞ゆ。寒山詩と共に、禪門盛んに引用す。

第八十四則 維摩不二法門

【維摩不二法門】

垂示云道是是無可是言非非無可非是非已去得失兩忘淨裸裸赤
灑灑且道面前背後是箇什麼或有箇衲僧出來道面前是佛殿三門
背後是寢堂方丈且道此人還具眼也無若辨得此人許爾親見古人
來

【和訓】垂示に云く、是と道ふも是の是とす可き無く、非と言ふも、非の非とす可き無し。是非已に去け、得失兩つながら忘す。淨裸赤濯濯。且らく道へ、面前背後、是れ箇の什麼ぞ。或は箇の衲僧有つて、出て來つて道はん、面前は是れ佛殿三門、背後は是れ寢堂方丈と。且らく道へ、此の人還つて眼を具すや、也た無や。若し此の人を辨得せば、備に許す、親しく古人を見來ることを。

【提唱】第八十四則「維摩不二法門」と、コノ則是、維摩不二、別に仔細有り、參訣す可きに堪へたることを明すぢや。

「垂示に云く、是と道ふも、是の是とす可き無く」と、柱を柱と見ずサ、萬法不可得ぢや。女に女性なく、男に男性ない。「非と言ふも、非の非とす可き無し」と、非と云ふも不可得ぢや。非とて、非で通るものでない。「是非已に去け、得失兩つながら忘す」と、ぢやからは是非得失を一切手放して看よ。實にハヤ、サツバリした心持ちは、行水した後の様ぢや。「且らく道へ、面前背後、是れ箇の什麼ぞ」と、上のやうな境界は、衲僧家向上の行履ぢやが、ソレは且らく置き、サー諸人、ソノ前後は什麼ぢやとするナ。「或は箇の衲僧有つて、出て來つて道はん、面前は是れ佛殿三門、背後は是れ寢堂方丈と。且らく道へ、此の人還つて眼を具すや、也た無や」と、サー其の時に伶俐なる漢があつてからに、面前は佛殿三門ぢや、背後は寢堂方丈ぢやと、只だ有り底に云ふたならばサ、果して此の者は正眼を具して云ふたとするか如何ぢや。「若し此の人を辨得せば備に許す、親しく古人を見來ることを」と、能く其の眞偽を見分け得た者は、維摩や文殊に逢ふた人ぢや。

學維摩詰問文殊師利 ○這漢太煞合開一場 ○合取口 何等是菩薩

入不二法門 ○知而故犯 文殊曰如我意者 ○道什麼 ○直得分疎

不下 ○擔枷過狀 ○把髻投銜 於一切法 ○喚什麼作一切法 無言無說

○道什麼 無示無識 ○瞞別人即得 離諸問答 ○道什麼 是爲

入不二法門 ○用入作什麼 ○用許多葛藤作什麼 於是文殊師利問

維摩詰我等各自說已仁者當說何等是菩薩入不二法門

○這一靠莫道金粟如來 ○設使三世諸佛也開口不得 ○倒轉鎗頭來也 ○刺殺一人 ○中

箭還似射人時 雪竇云維摩道什麼 ○咄 ○萬箭攢心 ○替他說道理 復

云勘破了也 ○非但當時即今也 恁麼 ○雪竇也是賊過後張弓 ○雖然爲衆竭力爭

奈禍出私門 ○且道雪竇還見得落處麼 ○夢也未夢見 ○說什麼勘破 ○嶮 ○金毛獅子也

摸索不著

【和訓】 擧す。維摩詰、文殊師利に問ふ。(○この漢太慈だ合開一場。○口を合取せよ。) 何等か是れ菩薩の入不二法門。
 (○知つて故に犯す。) 文殊曰く、我が意の如きんば。(○什麼と道ふぞ。○直に得たり分疎下なることを。○擔枷過狀。
 ○擧を把つて荷に投ず。) 一切の法に於て。(○什麼を喚んでか一切の法と作さん。) 無言無説。(○什麼と道ふぞ。) 無示
 無識。(○別人を瞞することは即ち得たり。) 諸の問答を離る。(○什麼と道ふぞ。) 是れを入不二法門と爲す。(○入
 ることを用ひて什麼か作さん。○許多の葛藤を用ひて什麼か作さん。) 是に於て文殊師利 維摩詰に問ふ、我等各自に説き已
 る、仁者當に説くべし、何等か是れ菩薩の入不二法門。(○この一葉、道ふと莫れ金粟如来と。○設使ひ三世の諸佛も、也た
 口を開くこと得じ。○倒に鎗頭を轉じ來れり。○一人を刺殺す。○前に中ることは還つて人を射る時に似たり。) 雪寶云
 く、維摩什麼とか遊ひし。(○唯、○瀧筋、心に掛る。○他に精つて道理を説く。) 復た云く、勘破了也。(○但だ當時のみ
 に非らず、即今也た恁麼。○雪寶也た是れ賊過ぎて後ち弓を張る。○然も衆の爲に力を竭すと雖も、争奈せん 彌、私門よ
 り出づることを。○日らく道へ、雪寶還つて落處を見得ず麼。○夢にも也た未だ夢見じ。○什麼の勘破とか説かん。○驗。○
 入 金毛の獅子、也た摸索不著。

【提唱】

本則 コレから本則ぢや。

擧す。維摩詰、文殊師利に問ふ」と、維摩詰、コレよ、此の翁よ。サ、維摩が文殊に不二法門を問ふた。途に劍客に逢はば須らく劍を呈すべしぢや。是れは「維摩經」問疾品の長文を略して示したのぢや。維摩がサ、衆生の爲に悲んで、疾に毘耶離城に臥して居る時、文殊が世尊の命を承けて見舞つた、其の時の問答ぢや。維摩詰は翻して、無垢稱と云ひ、又た淨名とも云ふ。文殊は妙

徳と云ふ。

「何等か是れ菩薩の入不二法門」と、不二法門とは、所謂一乗の法門ぢや、大惠平等の眼を開く大事の處ぢや。サ、維摩が文殊に、其の菩薩の入不二法門を問ふた。是れ浪倒に、端無くして荒草に入るぢや。

「文殊曰く、我が意の如きんば」と、ソコで文殊が、己が思ふにはと喋舌り出した。歎は囚人の口より出で、親言は親口より出づぢや。

「一切の法に於て」と、世間にあれ、出世間にあれ、一切の法に於てサ。

「無言無説」と、迷悟を離れた端的、言ふこともない。諸勘定はトツクに濟んだ。語ることを撒すぢや。

「無示無識」と、能所をボツ超えて、示すこともなければ、識ることもない。所謂瑪瑙盤中眞珠を撒すぢや。

「諸の問答を離る」と、無言無説、無示無識なりや、諸の問答を離れるのは云ふまでもない。コリヤ土上に泥を加ふぢや。

「是れを入不二法門と爲す」と、コレが菩薩の入不二法門ぢやと。

「是に於て文殊師利、維摩詰に問ふ、我等各自に説き已る、仁者當に説くべし、何等か是れ菩薩の入不二法門」と、今度は文殊が維摩に向つて、我等(コリヤ三十二人の菩薩を云ふたものぢや)は

各々、不二法門を説き了つたから、これから仁者が説くが好いと云ふた。

「雪竇云く、維摩什麼とか道ひし」と、雪竇がサ、己は耳が遠くて聞へぬが、文殊に不二法門を問はれて、維摩は何んと云つたかと。コレはサ、默然の處こそ賞翫ぢやが、ソノ默の處を默と云ふが可厭さに。併し又た云はなけりや、人が默を認めて、一默の會を作すのを恐れて斯う云ふた。吹毛曾つて動せずぢや。

「復た云く、勘破了也」と、コリヤ又た取つて置ききの、鼠の淨土に猫の一聲ぢや。サー雪竇は何を勘破したのぢや、維摩に代つてか、維摩の答をかサ。

著語 コレから圓悟の著語ぢや。

「舉維摩詰問文殊師利」——「この漢太煞だ合關一場、維摩もキツイ世話焼ぢや。」「口を合取せよ、不二法門などと、きたないことを云ふ口を撈ぎ取つて仕舞へ。」

「何等是菩薩入不二法門」——「知つて故に犯す、言詮の及ばないのは知りながらと。コノ下語も亦た御叮嚀なこと。」

「文殊曰如我意者」——「什麼と道ふぞ、文殊は七佛の師ではないか。ソレぢやに、「我が意の如きんば」等と口を開けば、早や第二第三ぢや。」「直に得たり分疎不下なるとを、云ひ譯が出来なくて、カイが廻るまい。「擔枷過狀」、首下駄を嵌められた。「髻を把つて衝に投ず」、自身から評定所へ白

狀して出るか。

「於一切法」——「什麼を喚んでか一切の法と作さん、都盧一枚、佛の全身ぢや。本來無法ぢやのに、什麼を喚んで一切の法とするか。」

「無言無説」——「什麼と道ふぞ、無言無説なら何も云ふな。」

「無示無識」——「別人を瞞ずることは即ち得たり、文殊如何程伶俐さうに喋舌つても、他の者は知らぬこと、圓悟をば能う瞞じ得まい。」

「離諸問答」——「什麼と道ふぞ、黙つてをれば好いに、又た何を小言を云ふか。」

「是爲入不二法門」——「入ることを用ひて什麼か作さん、不二ならば、出るの入ると云ふことはあるまい。渡り者の奉公人ぢやあるまいしサ。「許多の葛藤を用ひて什麼か作さん」、無言無説ぢやの、無示無識ぢやのと、ゴテ／＼言句を並べるには及ばぬことぢやと、一蹴りに蹴り飛した。」

「於是文殊師利問維摩詰我等各自説已仁者當説何等是菩薩入不二法門」——「這の一靠、道ふこと莫れ金粟如來と」、「靠」は倒すぢや。サー推し倒されて關が潰れたが、維摩一人を倒したと云ふナ。維摩は金粟如來の後身ぢやとサ。「設使三世の諸佛も、也た口を開くこと得じ」、斯う逆波を打ち掛けられては、維摩一人ぢやない、三世の諸佛と雖も寄り付かれぬ。「倒に鎗頭を轉じ來れり」、今迄受太刀であつた文殊が、大力を出して攻め寄せて來た。「一人を刺殺す」、誰を突いたナ。「箭に中

ることは還つて人を射る時に似たり、問を受けるのは、他に問ふたからぢや。初め文殊を射た程に、今又射返された。手前をつまんで見て、人の痛さを知れ。

「雪竇云維摩道什麼」——「咄、雪竇、喋舌り過ぎるぞ。」「萬箭、心に掛る、雪竇に斯う撻せられは、諸人の心胸は萬箭の集るやうぢやらう。」「他に替つて道理を説く、維摩は何んとも云はぬのに、雪竇めが維摩に代つて、道理の無い處に道理を説きさる。早や落草ぢや。」

「復云勘破了也」——「但だ當時のみに非らず、即今也た慙麼、雪竇の勘破ばかりぢやない、目前皆な勘破ぢや。」「雪竇也た是れ賊過ぎて後ち弓を張る、雪竇、獨り合點した様に云ふが、コレぢや勘破の仕様が遅いぞ。」「然も衆の爲に力を竭すと雖も、争奈せん禍、私門より出づることを、雪竇、大衆の爲に骨を折つて、兎や角と云はれるがサ、それが却つて禍と云ふものぢや。不二法門には黙も間違ひぞ、勘破了也も間違ひぞ。圓悟、其處を見て取つて、禍は私門より出づると云ふた。コレヤ餘り慈悲が過ぎたからぢや。」「且らく道へ、雪竇還つて落處を見得ず麼、雪竇は維摩の落處を知つた上で、勘破了也と云ふたのか。」「夢にも也た未だ夢見じ、イヤ、其のザマでは夢にも知るまい。」「什麼の勘破とか説かん、勘破とは氣が強いぞ。」「嶮、默の端的是嶮ぢや。コレヤ雪竇に代つて云ふた。」「金毛の獅毛、也た摸索不著、維摩の默、雪竇の勘破は、大小大の文殊も、摸り當て得まいぞと。金毛の獅子とは文殊を指して云ふ。」

越前福井の大安寺の開山、大愚築和尚は、示滅の時、遺偈を書して曰ふのに、「西天の的、東海の崑崙、平生の受用、不二法門。八十六翁、大愚叟」と、入滅の三日前に書したのぢや、現に大安寺に在る。維摩禪に於て、眞實堪當するは、夫れ此の老和尚か。

維摩詰令諸大菩薩各說不二法門時三十二菩薩皆以二見有爲無爲眞俗二諦合爲一見爲不二法門後問文殊文殊云如我意者於一切法無言無說無示無識離諸問答是爲入不二法門蓋爲三十二人以言遺言文殊以無言遺言一時掃蕩總不要是爲入不二法門殊不知靈龜曳尾拂迹成痕又如掃帚掃塵相似塵雖去帚迹猶存末後依前除蹤跡於是文殊却問維摩詰云我等各自說已仁者當自說何等是菩薩入不二法門維摩詰默然若是活漢終不去死水裏浸却若作慙麼見解似狂狗逐塊雪竇亦不說良久亦不說默然據坐只去急急處云維摩道什麼只如雪竇慙麼道還見維摩麼夢也未夢見在維摩乃過去古佛亦有眷屬助佛宣化具不可思議辯才有不可思議境界有不可思議神通妙用於方丈室中容三萬二千獅子寶座與八萬大衆亦不寬狹且道是什麼道理喚作神通妙用得麼且莫錯會若是不二法門唯同得同證方乃相共證知獨有文殊可與酬對雖然慙麼還免得雪竇檢責也無雪竇慙麼道也要與這二人相見云維摩道什麼又云勘破了也備且道是什麼處是勘破處只

這些子不拘得失不落是非如萬仞懸崖向上捨得性命跳得過去許爾親見維摩如捨不得大似羝羊觸藩雪竇故然是捨得性命底人所以頌出云

【和圓】 維摩詰、諸大菩薩をして、各不二法門を説かしむ。時に三十二の菩薩、皆な二見の有爲無爲、眞俗二諦を以つて、合して一見と爲して、不二法門と爲す。後に文殊に問ふ。文殊云く、我が意の如きんば、一切の法に於て、無言無説、無示無識、諸の問答を離る、是れを入不二法門と爲すと。蓋し三十二人は言を以つて言を遣り、文殊は無言を以つて言を遣るが爲に、一時に掃蕩して總に要せず、是れを入不二法門と爲すと。殊に知らず、靈龜尾を曳く、迹を拂へば痕を成すことを。又た掃蕩の塵を拂ふが如くに相ひ似たり、塵去ると雖も、等迹猶ほ存す。末後依前として蹤跡を除す。是に於て文殊却つて維摩詰に問ふて云く、我等各自に説き已る、仁者當に自ら説くべし、何等か是れ菩薩入不二法門と。維摩詰、默然。若し是れ活漢ならば、終に死水裏に去つて發却せず。若し是れ佛の見解を作さば、狂狗の塊を逐ふに似ん。雪竇亦た良久と説かず、亦た默然坐と説かず、只だ急急の處に去つて云く、維摩什麼とか道ひしと。只だ雪竇、佛に道ふが如きんば、還つて維摩を見る處。夢にも未だ夢見ざるに在らん。維摩は乃ち過去の古佛、亦た眷屬有つて佛の宣化を助く。不可思議の辯才を具し、不可思議の境界有り、不可思議の神通妙用有り。方丈室中に於て、三萬二千の獅子の寶座を容れて、八萬の大衆に與ふるに、亦た寬狹ならず。且らく道へ、是れ什麼の道理ぞ。喚んで神通妙用と作し得ん塵、且らく錯つて會すと莫れ。若し是れ不二法門ならば、唯だ同得同證して、方に乃ち相ひ共に證知せん。獨り文殊のみ有つて、與に剛對するに可なり。然も佛なりと雖も、還つて雪竇の檢責を死れ得んや、也た無や。雪竇、佛に道ふ、也た這の二人と相見せんことを要す。云く、維摩什麼とか道ひし。又た云く、佛破了也と。爾且らく道へ、是れ什麼の處か是れ破破の處。只だ這の些子、得失に拘らず、是非に落ちず、羝羊の觸藩の如し。向上に性命を捨得して、跳得過し去らば、爾に許す、親しく維摩を見んとを。若し捨得ならずば、大いに羝羊の藩に觸るに似たり。雪竇、故然として是れ性命を捨得する底の人。所以に頌出して云く。

【提唱】 コレから圓悟の評ちや。「維摩詰、諸大菩薩をして、各不二法門を説かしむ」と、コレはサ、「維摩經」を見れば分るが、三十二の菩薩が、文殊同道で維摩の許へ押し掛けて行つて、各々不二法門を説いたちや。「時に三十二人の菩薩、皆な二見の有爲無爲、眞俗二諦を以つて、合して一見と爲して、不二法門と爲す」と、併し三十二人の菩薩は、皆な煩惱と菩提と二つに辨じて、平等の知見を爲したものでちやから、ソコで維摩が文殊に問ふた。「後に文殊に問ふ。文殊云く、我が意の如きんば、一切の法に於て、無言無説、無示無識、諸の問答を離る、是れを入不二法門と爲すと」と、茲が本則にもあつた處ちや。「蓋し三十二人は言を以つて言を遣り、文殊は無言を以つて言を遣るが爲に」と、ツマリ三十二の菩薩は、有相の言を以つて言を遣り、文殊は、無言を以つて無相の理を説いたちや。「一時に掃蕩して總に要せず、是れを入不二法門と爲す。殊に知らず、靈龜尾を曳く、迹を拂へば痕を成すことを。又た掃蕩の塵を掃ふが如くに相ひ似たり、塵去ると雖も、等迹猶ほ存す。末後依前として蹤跡を除す」と、文殊が、「一切の法に於て、無言無説、無示無識、諸の問答を離る」と云ふて、一時に掃蕩したが、所謂靈龜尾を曳くで、塵を帚で掃けば、塵は無くなるが、掃目が残るやうなもので、文殊の掃蕩にも依然迹が残つた。「除蹤跡」が、一本には「餘蹤跡」とある。「是に於て文殊却つて維摩詰に問ふて云く、我等各自に説き已る、仁者當に自ら説くべし、何等か是れ菩薩入不二法門と」、今度は文殊が維摩に問ふた。ソコで、「維摩詰、默然。若し是れ活漢なら

ば、終に死水裏に去つて浸却せず」と、サー有氣の漢ならば、コノ默然の處を聞いてゾツとするぞ。「若し恁麼の見解を作さば、狂狗の塊を逐ふに似たり」と、若しサ、「維摩詰默然」と云ふに、一默の會を爲さば、狗ツ子が塊を投げた人は逐はず、塊を逐ふやうなものぢや。「雪竇亦た良久と説かず、亦た默然據坐と説かず、只だ急急の處に去つて云く、維摩什麼とか道ひしと」「雪竇が、一默と云ふが可厭さに、良久とも説かず、默然據坐とも説かず、急所に針を刺すがやうに、「維摩什麼とか道ひし」と遣つた。「只だ雪竇恁麼に道ふが如きんば、還つて維摩を見る麼。夢にも也た未だ夢見ざること存らん」と、雪竇が斯のやうに云ふたのは、維摩の落處を知つたが爲めか。イヤ、三世の諸佛すら尙ほ見ることは出来ぬものを、何んの雪竇に會るものかサ。「維摩は乃ち過去の古佛、亦た眷屬有つて佛の宣化を助く」と、此の維摩詰は過去の古佛ぢや、即ち阿含の時に出て、小乗を呵して大乘を唱へた。亦た妻子眷屬が有つて、佛の布教を助けたものぢやから、維摩居士とも云はれた。「不可思議の辯才を具し、不可思議の境界有り、不可思議の神通妙用有り。方丈室中に於て、三萬二千の獅子の寶座を容れて、八萬の大衆に與ふるに、亦た寛狹ならず」と、維摩には不可思議な神通妙用が有つてサ、方丈の中に、三萬二千の獅子座を設けて、八萬の大衆に與ふるに、寛くも狭くもないと。ソノ管サ、煙管の吸口に三世の諸佛を入れて、スツキリ寛狹ならぬぞ。コレは「維摩經」の第六不思議に出て居る。「且らく道へ、是れ什麼の道理ぞ。喚んで神通妙用と作し得てん

麼、且らく錯つて會すること莫れ」と、コレを不可思議な神通妙用とばかり看るな。「若し是れ不二法門ならば、唯だ同得同證して、方に乃ち相ひ共に證知せん。獨り文殊のみ有つて、與に酬對するに可なり」と、コレの「唯」は「雖」と云ふ字に改めて、「方に乃ち相ひ共に證知せん」と看る方が好い。サー三十二の菩薩も、同得同證の者ぢやけれども、入不二法門に至つては、文殊計りが、維摩の話し相手ぞ。「然も恁麼なりと雖も、還つて雪竇の檢責を免れ得んや、也た無や」と、ぢやと云ふても、維摩も文殊も、雪竇の檢責は免れ得まい。「雪竇恁麼に道ふ、也た這の二人と相見せんことを要す」と、雪竇が、維摩、文殊と肩を並べんとして云ふのに、「云く、維摩什麼とか道ひし。又た云く、勘破了也」と、コリヤ雪竇の腕前ぢや。「爾且らく道へ、是れ什麼の處か是れ勘破の處」と、雪竇が勘破と云ふたのは、何處を指したのか。「這の些子、得失に拘らず、是非に落ちず、萬仞の懸崖の如し。向上に性命を捨得して、跳得過し去らば、爾に許す、親しく維摩を見ることを」と、サー是れは、得失是非を超越して、萬仞の懸崖の如く恐しいものぢやから、向上に出て、生死の命根をも斷ち、百尺竿頭更に歩を進めたならば、維摩と相見することも出来やうがサ。「如し捨不得ならば、大いに羝羊の藩に觸るるに似たり」と、若し命根斷ぜずんば、脱け出る處は無くて、徒らに蕩擻くばかりぞ。「羝羊藩に觸る」とは易の雷天大壯にある句ぢや。「雪竇、故然として是れ性命を捨得する底の人。所以に頌出して云く」と、雪竇は誠に大死一番底の人ぢや。ソノ頌出する處を

看よと。コノ「故然」の二字は福本には無い。コレは「舊に依つて」とか、或は「默然」とか云ふ意ぢや。

咄這維摩老

○咄他作什麼○朝打三千暮打八百○咄得不濟事○好與三十棒

悲生空懊惱

○悲他作什麼○自有金剛王寶劍○爲他閑事長無明○勞而無功

臥疾毘耶離

○因誰致得○帶累一切人○全身太枯槁○病則且置爲

什麼口似匾擔○飯也喫不得○喘也喘不得

七佛祖師來

○客來須看賊來須

打○成群作隊○也須是作家始得

一室且頻掃

○猶有這箇在○元來在鬼窟裏作活計

請問不二門

○若有可說被他說了也○打云和闍黎也尋不見

當時便靠倒

○蒼天蒼天○道什麼○不靠倒

○死中得活○猶有氣息在

金毛獅子無處討

○咄○還見麼○蒼天蒼天

【和調】 咄這の維摩老。(○他を咄して什麼か作さん。○朝打三千、暮打八百。○咄し得るとも事を濟さず。○好し三十棒を與ふるに。○生を悲んで空しく懊惱す。(○他を悲んで什麼か作さん。○自ら金剛王寶劍有り。○他の閑事の爲に無明を長ず。○勞して功無し。○疾に毗耶離に臥す。(○誰れに因つてか致し得る。○一切の人を帶累す。○全身太だ枯槁。○病むことは且らく置く、什麼と爲てか口、匾擔に似たる。○飯も也た喫すること得じ。○喘ぐことも也た喘ぐこと得じ。○七佛祖師來る。(○客來らば須らく看るべし、賊來らば須らく打すべし。○群を成し隊を作す。○也た須らく是れ作家にして始めて得べし。○一室且つ頻りに掃ふ。(○猶ほ這箇の在る有り。○元來鬼窟裏に在つて活計を作す。○不二門を請問す。(○若し説く可き有りとも、他に説きたらる。○打つて云く、闍黎に和して也た尋ねるとも見ず。○當時便ち靠倒す。(○蒼天蒼天。○什麼と道ふぞ。○業倒せず。(○死中に活を得たり。○猶ほ氣息の在る有り。○金毛の獅子討ぬるに處無し。○咄。○還つて見る麼。○蒼天蒼天。)

【提唱】

圓 コレから雪竇の頌ぢや。

「咄這の維摩老」と、ヤイ、スツトウの皮めと。維摩を丸出しにした。頌は此の一句で濟んだぞ。

已下は因縁ぢや。

「生を悲んで空しく懊惱す」と、元來此の維摩老は、死と云ふことも、又た生と云ふことも無いけれどもサ、衆生を感んで心を痛めた爲めに疾を得たのぢや。「生を悲んで」と、即ち菩薩は是れから弘願が起るぢや。「疾に毗耶離に臥す」と、畢竟人を利益せんが爲めに疾むぢや。サー諸人、即今眞箇の維摩老は

毗耶離に臥すか、此の座敷に臥すか、看よ。毗耶離は維摩の生れた處ぢや。

「全身太だ枯槁」と、我が身を以つて人を誡むるから、瘦せて骨と皮ばかりぢや。此の全身とは七尺か、八尺か。上は三十三天より、下は奈落のドン底まで別處はない。十方世界に全身を現すぢやのに、「太だ枯槁」とは如何ぢや。

「七佛の祖師來る」と、サー七佛の師の文殊様の御入來ぢや。文殊は別に招かなくとも、學文や知解や悟を取り除けると、トツクに眞の文殊は來る。

「一室且つ頻りに掃ふ」と、室の掃除で大騒ぎぢや。サー腹の中の知解妄想も、斯のやうに清潔サツパリせねば、文殊は現前せぬぞ。

「不二門を請問す」と、ソコデ維摩が御馳走代りに不二門を請問したが、文殊に取つて返されてサ。「當時便ち靠倒す」と、「仁者當に説くべし」と云はれては弓は取られぬわい。

「靠倒せず」と、併し、よろけはせぬぞ。樊噲でも朝比奈でも、押し到すことはならぬ。恐る可き一黙ぢや。其の峻まることは、金剛の寶劍にも過ぎて居る。又た文殊も、此の默處には靠倒せざる處があるぞ。

「金毛の獅子討ぬるに處無し」と、其の默の處は、金毛の獅子に乗つて御座る文殊が、三千世界をどう尋ねても見えず。

著語 コレから圓悟の著語ぢや。

「咄這維摩老」——「何を咄して什麼か作さん」咄するも、衆生を惑れる心が強い故ぢや。「朝打三千暮打八百」此の維摩は煮ても焼いても喰はれぬ奴ぢや、只だ打て〜。「咄し得る、も事を濟さず」咄し得たとてイタズラ事ぢや。好し三十棒を與ふるに、コリヤ賞か罰かサ。

「悲生空懊惱」——「何を悲んで什麼か作さん」衆生は元來本有圓成ぢやないか。「自ら金剛王寶劍有り」誰が家にか明月清風無からんで、人々箇々金剛王寶劍を具足して居る。「他の閑事の爲に無明を生ず」維摩がいらざる悲み事から、無病の人に灸を据えるやうなものぢや。「勞して功無し」駄目々々、止しになされ。

「臥疾毘耶離」——「誰れに因つてか致し得る」維摩、其の疾は何處から引き出した。人を利益せんが爲めと云へ、誰れが云ひ付けたぞ。「一切の人を帶累す」元と無病ぢやに、いらぬ懊惱などをしてからに、他人まで騒がせるとは厄介な奴ぢや。

「全身太枯槁」——「病むことは且らく置く、什麼と爲てか口、區擔に似たる」病氣は儘の皮よ。文殊に問ひ詰められて、何故口をへの字なりにして黙つて居るぞ。「飯も也た喫すること得じ」「喘くことも也た喘くこと得じ」サウして口を閉ぢて居つては、飯を喫ふことも、息をすることもなるまい。ヤレ〜笑止な。

「七佛祖師來」——客來らば須らく看るべし、賊來らば須らく打すべし、今日來たのは、お客様か泥棒か、お客様なら出て應對へ、又た泥棒なら逐ひ出せ。取ッ違へぬやうにしろ。群を成し隊を作す、文殊が三十二菩薩どころか、八萬の大衆を連れて來た。也た須らく是れ作家にして始めて得べし、維摩の處へ押し掛けて來るのは、文殊程の者でなければ出來ぬ。

「一室且頻掃」——猶ほ這箇の在る有り、己が處は真空ぢや、取り除けるものはないことぢや。「元來鬼窟裏に在つて活計を作す」、掃き清めるのは、ソレは我法二空の穴に居るからのことよ。

「請問不二門」——若し説く可き有りと、他に説きたる、菩薩等が何んと説いても、維摩に説き伏せられる。打つて云く、闍黎に和して也た尋ぬるとも見ず、此の不二門は、雪竇、ソナタと一處になつて探しても見えぬ。ソノ筈サ、若し見るものがあれば不二門ではない。

「當時便靠倒」——蒼天蒼天、攻め倒されて可憐しやく。什麼と道ふぞ、ナンぢや、靠倒したとナ。

「不靠倒」——死中に活を得たり、默の中に大きな活處がある。「猶ほ氣息の在る有り」、まだくたばりはせぬぞ。

「金毛獅子無處討」——咄、大衆に向つて、ヤイ。「還つて見る麼」、サー一默の落處を見得るか如何ぢや。「蒼天蒼天」、文殊でさへ見えぬものを、見るとは叶ふまい、嗚呼悲しやくと。此の「蒼

天」の一句も福本にはない。

雪竇道、咄、維摩老頭上先下一咄作什麼、以金剛王寶劍當頭直截須朝打三千暮打八百、始得梵語云、維摩詰此云無垢稱、亦云淨名、乃過去金粟如來也不見僧問、雲居簡和尚、既是金粟如來爲什麼却於釋迦如來會中聽法、簡云他不爭入我大解脫人不拘成佛不成佛若道他修行務成佛道轉沒交涉譬如圓覺經云以輪迴心生輪迴見入於如來大寂滅海終不能至永嘉云或是或非人不識逆行順行天莫測若順行則趣佛果位中若逆行則入衆生境界壽禪師云直饒備磨鍊得到這田地亦未可順汝意在直待證無漏聖身始可逆行順行所以雪竇道悲生空懊惱維摩經云爲衆生有病故我亦有病懊惱則悲絕也臥疾毗耶離維摩示疾於毗耶離城也唐時王玄策使西域過其居遂以手板縱橫量其室得十笏因名方丈全身太枯槁因以身疾廣爲說法云是身無常無強無力無堅遂朽之法不可信也爲苦惱衆病所集乃至陰界入所共合成七佛祖師來文殊是七佛祖師承世尊旨往彼問疾一室且頻掃方丈內皆除去所有唯留一榻等文殊至請問不二法門也所以雪竇道請問不二門當時便靠倒維摩口似匾擔如今禪和子便道無語是靠倒且莫錯認定盤星雪竇拶到萬仞懸崖上却云不靠倒一手搥一手搦他有這般手脚直是用得玲瓏此頌前面拈云維摩道什麼金

毛獅子無處討非但當時即今也。怎麼還見維摩老麼。盡山河大地草木叢林皆變作金毛獅子也。摸索不著。

【和訓】 雪竇道く、咄這の維摩老と。頭上に先づ一咄を下して、什麼をか作す。金剛王寶劔を以つて、當頭に直截す。須らく朝打三千、暮打八百して始めて得べし。梵語には維摩詰と云ひ、此には無垢稱と云ふ、亦た淨名と云ふ。乃ち過去の金粟如來なり。見ずや、僧、雲居の簡和尚に問ふ、既に是れ金粟如來、什麼と爲てか却つて釋迦如來の會中に於て聽法する。簡云く、他人我を争はずと。大解脱の人は、成佛、不成佛に拘らず。若し他、修行して、務めて佛道を成すと道はば、轉た没交涉。實へば圓覺經に云ふが如きんば、輪廻の心を以つて、輪廻のを見を生じて、如來の大寂滅海に入らんとせば、終に至ること能はじと。永嘉云く、或は是或は非、人識らず。逆行順行、天も測ること莫しと。若し順行する則んば、佛果位中に趣き、若し逆行する則んば、衆生の境界に入る。壽禪師云く、直徳の備庸録して、這の田地に到ることを得るも、亦た未だ汝が意に順ふ可からざること有り。直に無漏の聖身を證せんを待つて、始めて逆行順行す可しと。所以に雪竇道く、生を悲んで空しく懊惱すと。維摩經に云く、衆生病有るが爲の故に、我れ亦た病有り。懊惱は則ち悲絶なり。疾に毗耶離に臥すと、維摩疾を毗耶離城に示せばなり。唐の時王玄策、西域に使して、其の居に過る。遂に手板を以つて、縱横其の室を量るに、十笏を得たり、因つて方丈と名く。金身太だ枯槁と。因に身の疾を以つて、廣く爲に説法して云く、是の身は無常無強、無力無堅にして、遷朽の法なり、信ず可からず。苦を爲し惱を爲す、衆病の集る處。乃至陰界入の、共に合成する所なりと。七佛の祖師來ると。文殊は是れ七佛の祖師、世尊の旨を承けて、彼に往いて、疾を問ふ。一室且つ頻りに掃ふと。方丈の内、皆な所有を除去して、唯だ一榻を留め、文殊の至るを等つて、不二法門を請問すと。所以に雪竇道く、不二門を請問す、當時便ち靠倒すと。維摩口圖擔に似たり。如今の禪和子、便ち道ふ、無語是れ靠倒と。且らく銷つて定盤星を認むること莫れ。雪竇、萬仞懸崖の上に抄到して、却つて云く、靠倒せずと。一手握一手掃。他、這般の手脚有り、直に是れ用る得て玲瓏なり。此れは前面に拈じて、維摩什麼とか道ひしと云ふを頌す。金毛の獅子討ぬるに處

無しと。但當時のみに非らず、即今も也た怎麼。還つて維摩老を見る麼。盡山河大地、草木叢林、皆な變じて金毛の獅子と作るも、也た摸索不著ならん。

【提唱】 コレから圓悟の評ちや。雪竇道く、咄這の維摩老と。頭上に先づ一咄を下して、什麼をか作す。金剛王寶劔を以つて、當頭に直截す」と、雪竇が頭下しに何故咄したと思ふぞ。コレはサ、咄を以つてからに、佛を截り祖を截るためちや。「須らく朝打三千、暮打八百して始めて得べし」と、コレは何處を打つナ。手前で氣を殺し身を苦しめて、朝打三千暮打八百するちや。「梵語には維摩詰と云ひ、此には無垢稱と云ふ、亦た淨名と云ふ。乃ち過去の金粟如來なり」と、維摩が金粟如來の化身ちやと云ふことは、「思惟三昧經」に出て出る。「見ずや、僧、雲居の簡和尚に問ふ、既に是れ金粟如來、什麼と爲てか却つて釋迦如來の會中に於て聽法する」と、僧が簡和尚に問ふのに、金粟如來の化身とも云はれる維摩が、何故靈山會中に在つて、世尊の法を聽くかと。コノ簡和尚は道簡と云ふて、雲居道膺に嗣ぎ、雲居山の第二世となつた人ちや。ソコ道簡和尚が、「簡云く、他、人我を争はずと」、此の語は至つて尊い。今ま引いて證とするは甚だ錯つて居る。「大解脱の人は、成佛、不成佛に拘らず。若し他、修行して、務めて佛道を成すと道はば、轉た没交涉」と、大解脱の人は、只だ下化衆生の願心のみちや。本來成佛、箇々圓成ぢやものを、修行して大悟を得ると云ふは當らぬと。

簡和尚の語に斯く云ふは違ふぞ、ソレこそ没交渉ぢや。「譬へば圓覺經に云ふが如きんば、輪廻の心を以つて、輪廻の眼を生じて、如來の大寂滅海に入らんとせば、終に至ること能はじ」と、生滅の心に生滅の眼を抱いて、如來の不生不滅の大涅槃に入らうとしても、ソレは出來ぬ、まるで方角違ひぢやと、「圓覺經」に云ふてある。「永嘉云く、或は是或は非、人識らず、逆行順行、天も測ると莫し」と、コレは例の如く、「證道歌」の句ぢや。サー勝報身と云ふも下劣身と云ふも、魔王淫女も菩薩天仙も、皆な人々分上の事で、人や天の知つたことぢやないぞ。「若し順行する則んば、佛果位中に趣き、若し逆行する則んば、衆生の境界に入る」と、ぢやから、若し佛道を修めさへすれば菩薩の位も得るが、あらぬサマをすれば衆生ぢや。「壽禪師道く直饒ひ備磨鍊して、這の田地に到ることを得るも、亦た未だ汝が意に順ふ可からざるに在り」と、壽禪師とは永明の延壽禪師のとぢや、法眼の孫ぢや。壽禪師の垂語は此の前に、「心肝を割つて、木石の如く相ひ似たらば、便ち食肉す可し。己が財を見て、他の財糞土の如くならば、便ち侵盜す可し」とある。サー諸人が務めて、此の妬怒痴性即佛性の處に到つても、まだ眞物ぢやないと。コレを南天棒が云はうぞならば、「乗り得ても心許すな雨夜舟、高瀬の浪の有らん限りは」と。又た「若いぬとも心許すな名ぞ立たん、我が住ひ果は姥がふところ」と。「直に無漏の聖身を證せんを待つて、始めて逆行順行す可し」と、即ち眞實無漏の清淨解脱の境界を手に入れた上てこそ、始めて自由自在ぢや。「所以に雪竇道く、生を悲んで

空しく懊惱すと。維摩經に云く、衆生病有るが爲の故に、我れ亦た病有り」と。懊惱は則ち悲絶なり」と。ぢやから雪竇が、維摩は衆生を感んで懊惱した爲め病を得たと云ふた。コレは「維摩經」に詳しくある。懊惱とは悲しみの至極を云ふたのぢや。「疾に毗耶離に臥すとは、疾を毗耶離城に示せばなり」と、コレは維摩が毗耶離に病んで居たからぢや。「唐の時、王玄策、西域に使して、其の居に過る。遂に手板を以つて、縦横其の室を量るに、十笏を得たり、因つて方丈と名く」と、唐の高宗の代に、王玄策と云ふ者が西域に使した時、維摩の住んだ跡を訪ねて、其の室の縦横を計つてみると、丁度十笏有つたから方丈と名付けたのぢやと。「全身太だ枯槁と。因に身の病を以つて、廣く爲に說法して云く、是の身は無常無強、無力無堅にして、遂朽の法なり、信す可からず。苦を爲し惱を爲す、衆病の集る處。乃至陰界入の、共に合成する所なり」と、維摩が自身の疾を衆生に示してからに説法するのに、此の身はたわいなく苟且なもので、遂には朽ち果て、仕舞ふものぢやから、頼むことは出來ぬ。苦惱の集り、六塵六識の入組ぢやものを。「七佛の祖師來ると。文殊は是れ七佛の祖師、世尊の旨を承けて、彼に往いて疾を問ふ」と、文殊が釋迦の命に依つて維摩の疾を見舞つた。「一室且つ頻りに掃ふと。方丈の内、皆な所有を除去して、唯だ一榻を留め」と、コリヤ知解情識を掃蕩し、胸中一絲をも掛けざる處ぢや。「文殊の至るを等つて、不二法門を請問す」と、ソコで維摩と文殊との間に、不二法門の商量が始つた。當時便ち靠倒すと。維摩、口、圓擔に似たり。如今の

禪和子、便ち道ふ、無語是れ靠倒と。且らく錯つて定盤星を認むること莫れ」と、今時の者はサ、維摩の無語を、問ひ詰められて、押し倒されたのぢやと云ふが、ソレは秤の目の無駄星を認めると云ふものぢや。「雪竇、萬仞懸崖の上に拶到して、却つて云く、靠倒せずと、雪竇がサ、一黙の、鳥も通はぬ峻處を拶して云ふのに、イヤ／＼潰されはせぬ、宗旨の作用ぞと。「一手擡二手擡。他、這般の手脚有り、直に是れ用ひ得て玲瓏なり。此れは前面に拈じて、維摩什麼とか道ひしと云ふを頷す」と、雪竇には、縦奪自在の手脚が有るから、托上、抑下、頷し得て妙ぢや。コノ「維摩什麼とか道ひし」と、是れが不二法門か一黙か。「金毛の獅子討ぬるに處無しと。但だ當時のみに非らず。即今も也た恁麼、還つて維摩老を見る麼。盡山河大地、草木叢林、皆な變じて金毛の獅子と作るも、也た摸索不著ならん」と、コレは文殊も探竿はならぬぞ。文殊ばかりではない、即今大衆は如何ぢや。維摩老を見るや。驢年にも也た未だ夢見ざることあらんぢや。

【都盧一校】 都盧は總てと云ふこと。「毗舍離」吠舍離とも云ふ。古代印度の國名。摩揭陀國の北方、恒河を隔てたる處なりと云ふ。佛說法の地なり。「蒙到」 屏風に重き者を掛ければ倒るゝ如きを靠倒と云ふ。「陰界入」 陰は五蘊、界は十八界、入は十二處。

第八十五則 桐峰庵主大蟲

【桐峰庵主大蟲】

垂示云把定世界不漏纖毫盡大地人亡鋒結舌是納僧正令頂門放光照破四天下是納僧金剛眼睛點鐵成金點金成鐵忽擒忽縱是納僧拄杖子坐斷天下人舌頭直得無出氣處倒退三千里是納僧氣宇且道總不恁麼時畢竟是箇什麼人試舉看

【和訓】 垂示に云く、世界を把定して纖毫を漏さず、盡大地の人、鋒を亡し舌を結く、是れ納僧の正令。頂門に光を放つて四天下を照破す、是れ納僧金剛の眼睛。鐵に點じて金と成し、金に點じて鐵と成す。忽に擒忽に縱、是れ納僧の拄杖子なり。天下の人の舌頭を坐斷して、直に氣を出す處無きことを得て、倒退三千里せしむ、是れ納僧の氣宇。且らく道へ、總に不恁麼なる時、畢竟是れ箇の什麼人ぞ。試に舉す、看よ。

【提唱】 第八十五則、「桐峰庵主大蟲」と、コノ則是、桐峰機鋒高しと雖も、宗旨は又た別に道理有ることを明すぢや。

「垂示に云く、世界を把定して纖毫を漏さず、盡大地の人、鋒を亡し舌を結く、是れ衲僧の正令」と、サー三世十方を掌中に握つて一塵をも漏さぬ。此處に到つては、天下の人も手を束ねて口を結ぶ外はあるまいがサ、併し合點せぬことを合點したとは云はれまいぞ。コリヤ把住ぢや、自行三昧ぢや。「頂門に光を放つて四天下を照破す、是れ衲僧金剛の眼睛」と、頂門とは如何なものぞ。サー鍛へ抜いた眼で、佛界魔界を照破する。コリヤ放行ぢや。「鐵に點じて金と成し、金に點じて鐵と成す。忽に擒忽に縱、是れ衲僧の拄杖子なり」と、凡夫が直に眞身舍利とも説き、あつたら眞如を地獄にするとも説く。把定放行ともに、總て拄杖頭上に在つて自由自在ぢや。コリヤ衲僧の作略ぢや、化他三昧ぢや。「天下の人の舌頭を坐斷して、直に氣を出す處無きことを得て、倒退三千里せしむ、是れ衲僧の氣字」と、天下の人の舌頭を奪つて、グツともスツとも云はせぬ處、是れ亦た衲僧の受用底ぢや。「且らく道へ、總に不憚なる時、畢竟是れ箇の什麼人ぞ。試に擧す、看よ」と、上に述べたやうな衲僧にぼつ越えて、サウでもない、カウでもない、何方へも付かぬは何人ぞ。サー本則を看よ。

舉僧到桐峰庵主處便問這裏忽逢大蟲時又作麼生 ○作家

弄影漢 ○草窠裏一箇半箇 庵主便作虎聲 ○將錯就錯 ○却有牙爪 ○同生

同死 ○承言須會宗 僧便作怕勢 ○兩箇弄泥團漢 ○見機而作 ○似則也似是

則未是 庵主呵呵大笑 ○猶較些子 ○笑中有刀 ○亦能放亦能收 僧云

這老賊 ○也須識破 ○敗也 ○兩箇都放行 庵主云爭奈老僧何 ○

劈耳便掌 ○可惜放過 ○雪上加霜又一重 僧休去 ○恁麼休去 ○二俱不了 ○蒼

天蒼天 雪竇云是則是兩箇惡賊只解掩耳偷鈴 ○言猶在耳 ○

遭他雪竇點檢 ○且道當時合作麼生免得點檢 ○天下衲僧不到

【和訓】 擧す。僧、桐峰庵主の處に到つて便ち問ふ、這裏忽ち大蟲に逢はん時、又た作麼生。(○作家、影を弄する漢。○草窠裏一箇半箇。○庵主便ち虎聲を作す。(○錯を將つて錯に就く。○却つて牙爪有り。○同生同死。○言を承けては須らく宗を會すべし。○僧便ち怕る勢を作す。(○兩箇泥團を弄する漢。○機を見て作す。○似たることは似たり、是なることは未だ是ならず。○庵主呵呵大笑。(○猶ほ些子に較れり。○笑中に刀有り。○亦た能放亦た能收。○僧云く、這の老賊。(○也た須らく識破すべし。○敗也。○兩箇都て放行す。○庵主云く、老僧を爭奈何せん。(○劈耳に便ち掌せん。○惜しむ可し、放過することを。○雪上加霜を加ふ又一重。○僧休し去る。(○恁麼に休し去る。○二俱に了せず。○蒼天蒼天。○雪竇云く、是は則ち是、兩箇の惡賊、耳を掩ふて鈴を偷むことを解す。(○言猶ほ耳に在り。○他の雪竇の點檢に遭ふ。○且らく道へ、當時作麼生か點檢を免れ得合き。○天下の衲僧到らず。)

【提唱】

本則 コレから本則ぢや。

「擧す。僧、桐峰庵主の處に到つて便ち問ふ、這裏忽ち大蟲に逢はん時、又た作麼生」と、コレは歴々の出合の仕損ひを擧したものでぢや。是れ雲寶の爲人ぞ、百則の中でも稀れる則ぢや。或僧が桐峰庵主の處へ出掛けて行つて、一つ庵主の脚跟下を見てくれんと、深山幽谷の此の物凄處で、ヒヨツクリ虎に逢ふた時は如何するかと。コノ坊主め、大蟲になりすまいて問ふた。桐峰庵主の傳は詳かでない。「傳燈」の十二に依ると、臨濟の法嗣に四庵主を出す、桐峰庵主、虎溪庵主、覆盆庵主とある。皆な山の名ぢや。

「庵主便ち虎聲を作す」と、是等は見事ぞ。此處に於いては庵主も亦た虎を使はねばならぬ。ソコデ虎聲を作して、此の坊主、眞物か贋かと先づ一手放してやつてサ、若し付け込んで來たら、一ト咬にしてくれべいとした。

「僧便ち怖るる勢を作す」と、作者、機變を知るで、好く働いた。コレは「百丈奇特事」の則の、僧の禮拜と同じやうに賊手段ぢや。

「庵主呵呵大笑」と、コレまでは賓主ともに見事ぢや、コレで置けば好いにサ。
「僧云く、這の老賊」と、油斷のならぬ和尚ぢやと。斯う云ふより外に、どうか働きやうがあら

うものをサ。此の南天棒なら大笑の處で喰ひ付いてみせるぞ。

「庵主云く、老僧を爭奈何せん」と、何んぢや、己を賊と云ふか。此のヨボケめ、己を鬪りものにせうとても、手に合ふものかと。此處は一つ、天下の人の舌頭を坐斷せねばならぬ處ぢや。

「僧休し去る」と、折角敵を擒にしながら、メタ／＼去るとは手ぬるい。大笑で置けば、雪寶に世話は掛けぬものを。龍頭蛇尾の漢ぢやわい。

「雪寶云く、是は則ち是、兩箇の惡賊、只だ耳を掩ふて鈴を偷むことを解す」と、兩人とも、龍蛇を定むるの眼は正しいが、無調法な盜賊ぢやと。雪寶、能く此處を見抜いて點檢したナ。雪寶は一重上手の惡賊ぢや。

著語 コレから著悟の著語ぢや。

「擧僧到桐峰庵主處便問這裏忽逢大蟲時又作麼生」——「作家、影を弄する漢」、此の僧、作家には似て居るがサ、たわいの無い奴ぢや。「草窠裏一箇半箇」お主がやうな虎は、世間にはナンボでもある。別に怖しくもないわい。

「庵主便作虎聲」——「錯を將つて錯に就く」、庵主が、僧の錯りの尻馬に乗つてサ。「却つて牙爪有り」、ソレぢやが、此の虎には牙爪がある。「同生同死」、庵主、虎聲を作したは、此の僧の知音ぞ。「言を承けては須らく宗を會すべし」、庵主の言句は好けれども、宗旨の矢壺は外れべい。

「僧便作怕勢」——「兩箇泥團を弄する漢、團悟が看れば、兩人とも泥の糺み合ひぢやと。コリヤ好い下語ぢや。」機を見て作す、席を相て令を打す、先は見事ぢや。「似たることは也た似たり、是なることは未だ是ならず」、併し、コリヤ眞物ぢやあるまい。後が覺東ないぢやテ。

「庵主呵呵大笑」——「猶ほ些子に較れり、黙つて居るよりは未だ増しか、少しは取柄もある。笑中に刀有り、油断はならぬが、此の刀で骨が切れるかな。亦た能放亦た能收」、此の大笑の中に、放行も把住も籠つて居る。

「僧云這老賊」——「也た須らく識破すべし、何處を指して老賊と云ふたか、能く見分けて看よ。敗也」、兩人ともに敗を取つた。「兩箇都て放行す」、此處は把住しなけりやならぬ處ぢや。

「庵主云爭奈老僧何」——「劈耳に便ち掌せん」、ソナナことを云ふ隙に、耳へ掛けてドヤせば好い。「惜しむ可し、放過することを、喰ひ付くべき處を手放したのは残念な。雪上に霜を加ふ又た一重」、無調法の上に大味噲を付けたわい。

「僧休去」——「恁麼に休し去る、何んと云ふザマぢや。」「二り俱に了せず」、何故喫はせぬぞ。黄葉が百丈に向つて虎聲を作すと、百丈は斧を振り上げて斫る勢をした。スルト黄葉は直に飛び付いて一擱を與へた。虎の喰ひ合ひなら、斯うなければならぬ。「蒼天蒼天」、あゝ苦々しい。「雪竇云是則是兩箇惡賊只解掩耳偷鈴」——「言猶ほ耳に在り」、雪竇の云ふ通り、猶ほ耳に在る

やうな。「他の雪竇の點檢に遭ふ」、ソレ見る、雪竇に繩を入れられて、働きは取れまい。「且らく道へ、作麼生か點檢を免れ得合さ」、サー即今諸人は、雪竇の點檢を如何免れたものぢやナ。「天下の衲僧到らず」、例令天下の衲僧でも、雪竇の點檢を免れ得る田地に到ることはなるまい。

大雄宗派下出四庵主大梅白雲虎溪桐峰看他兩人恁麼眼親手辨且道諸説在什麼處古人一機一境一言一句雖然出在臨時若是眼目周正自然活潑曠地雪竇拈教人識邪正辨得失雖然如此在他達人分上雖處得失却無得失若以得失見他古人則沒交涉如今人須是各各窮到無得失處然後以得失辨人若一向去揀擇言句處用心又到幾時得了去不見雲門大師道行脚漢莫只空遊州獵縣只欲得提擲閑言語待老和尚口動便問禪問道向上向下如何若何大卷抄將去墮向肚皮裏下度到處火爐邊三箇五箇聚頭舉口喃喃地便道這箇是公才語這箇是就身打出語這箇是事上道底語這箇是體裏語體裏裏老爺老娘囉却飯了只管說夢便道我會佛法了也將知恁麼行脚驢年得休歇去古人暫時間拈弄豈有勝負得失是非等見桐峰見臨濟其時在深山草庵這僧到彼中遂問這裏忽逢大蟲時又作麼生峰便作虎聲也好就事便行這僧也會將錯就錯便作怕勢庵主呵呵大笑僧云這老賊峰云爭奈老僧何是則是二俱不了千古之下遭人點檢所以雪竇道是則是兩箇惡賊只

解掩耳偷鈴他二人雖皆是賊當機却不用所以掩耳偷鈴此二老如排百萬軍陣却只鬪掃帚若論此事須是殺人不能眼底手脚若一向縱而不擒一向殺而不活不免遭人怪笑雖然如是他古人亦無許多事看他兩箇恁麼總是見機而作五祖道神通游戲三昧慧炬三昧莊嚴王三昧自是後人脚跟不點地只去點檢古人便道有得有失有底道分明是庵主落節且得沒交涉雪竇道他二人相見皆有放過處其僧道這裏忽逢大蟲時又作麼生峰便作虎聲此便是放過處乃至道爭奈老僧何此亦是放過處著著落在第二機雪竇道要用便用如今人問恁麼道便道當時好與行令且莫盲枷瞎棒只如德山入門便棒臨濟入門便喝且道古人意如何雪竇後面便只如此頌出且道畢竟作麼生免得掩耳偷鈴去頌云

【和訓】大雄の宗派下に四庵主を出す。大梅、白雲、虎溪、桐峰なり。看よ、他の兩人、恁麼に眼親しく手辨ふことを。且らば、自然に活潑地なり。雪竇拈じて、人をして邪正を識り、得失を辨せしむ。然も此の如くなりとも、他の達人分上各窮めて無得失の處に到つて然る後得失を以つて人を辨すべし。若し一向に言句を揀擇する處に去つて用心せば、又た幾時に到つてか、了ずることを得去らん。見すや、雲門大師道く、行脚の漢、只だ空しく遊州獵鼠すること莫れ。只だ兩言語を提擲することを得んと欲して、老和尚の口の動するを得て、便ち禪を問ひ、向上下、如何若何と、大卷に抄し將ち去つて、肚皮裏に壓向して下處し、到る處の火爐邊に、三箇五箇、頭を聚め口を擧げて、喃喃地に便ち道ふ、這箇は是れ公才の語。

這箇は是れ身に就いて打出する語。這箇は是れ事上に道ふ底の語。這箇は是れ體裏の語と。僧が屋裏の老翁老嫗を體するか。飯を啗却し了つて、只管に夢を説いて、便ち我れ佛法を會し了れりと道ふ。也た將に知んぬ、恁麼の行脚、臨年にも休歇し去ることを得んやと。古人、暫時の間の拈弄、豈に勝負得失、是非等の見有らんや。桐峰、臨濟に見ゆ。其の時、深山に在つて庵を卓つ。這の僧、彼の中に到つて遂に問ふ、這裏忽ち大蟲に遣はん時、又た作麼生。峰便ち虎聲を作す。也た好し事に就いて便ち行ず。這の僧、也た錯を將つて錯に就くことを會して、便ち怖る勢ひを作す。庵主呵大笑す。僧云く、這の老賊、峰云く、老僧を爭奈何せん。是は則ち是、二り俱に不了。千古の下、人の點檢に遣ふ。所以に雪竇道く、是は則ち是、兩箇の惡賊、只だ耳を掩ふて鈴を偷むことを解すと。他の二人、皆な是れ賊なりと雖も、機に當つて却つて用ひ、所以に耳を掩ふて鈴を偷む。此の二老、百萬の軍陣を排して、却つて只だ掃帚を聞はしむるが如し。若し此の事を論せば、須らく是れ、人を殺すに眼を眈せざる底の手脚なるべし。若し一向に縱して捨せず、一向に殺して活せずんば、人の怪笑に遣はんことを免れず。然も是の如くなりとも雖も、他の古人、亦た許多の事無し。看よ、他の兩箇恁麼、總に是れ機を見て作す。五祖道く、神通遊戲三昧、慧炬三昧、莊嚴王三昧と。自らは是れ後人、脚跟、地に點せず、只だ去つて古人を點檢して便ち道ふ、得有り失有り。有る底は道ふ、分明に是れ庵主落節すと。且得沒交涉。雪竇道ふ、他の二人相見、皆な放過の處有り。其の僧道く、這裏忽ち大蟲に遣はん時、又た作麼生と。峰便ち虎聲を作す、此れは便ち是れ放過の處なり。乃至道ふ、老僧を爭奈何せん。此れ亦た是れ放過の處なり。著著第二機に落在す。雪竇道ふ、用むんと要せば便ち用むと。如今の人、恁麼に道ふことを聞いて、便ち道ふ、當時好し與に命を行すに。且らく盲枷瞎棒すること莫れ。只だ德山、門に入れば便ち棒し、臨濟、門に入れば便ち喝するが如き、且らく道へ、古人の意如何。雪竇、後面に便ち只だ此の如く頌出す。且らく道へ、畢竟作麼生か、耳を掩ふて鈴を偷むことを免れ得去らん。頌して云く。

【提唱】 コレから圍悟の評ちや。大雄の宗派下に四庵主を出す。大梅、白雲、虎溪、桐峰なり」と、臨濟の法嗣の此の四庵主を大雄の宗派下と云ふたのは、臨濟は百丈の孫ちやからちや。ソレにして

も、大梅、白雲の二人は未審しい、杉洋、覆盆の二庵主を錯つて出したのか、或は百丈下に別に有つたのか、詳かでない。看よ、他の兩人、恁麼に眼親しく手辨ふることを、且らく道へ、諸訛什麼の處にか在る」と、サー桐峰庵主と此の僧とは、見解は一般ぢやのに、何故雪竇に點檢せられたか、諸訛は何處ぢや。「古人の一機一境、一言一句、然も出すこと、時に臨むに在りと雖も、若し是れ眼目周正ならば、自然に活鱖鱖地なり」と、古人は拂子を堅てるも、エヘンと云ふも、皆な其の場／＼に臨んで爲ることぢやがサ、周偏端正の活眼を具へて居るから、實にハヤ活機縱横、潑刺たりぢや。コ、の「出すこと時に臨むに在り」の「出」の字は削つた方が好い。「雪竇拈じて、人をしつて邪正を識り、得失を辨ぜしむ。然も此くの如くなりと雖も、他の達人分上に在つて、得失に處すと雖も、却つて得失無し。若し得失を以つて他の古人を見れば、則ち没交渉」と、今ま雪竇が、諸人をして邪正を識らしめやうとして、差別の上に立つて得失を論ずるがサ、大悟した人の分上に在つては、一切得失と云ふことはないぞ。若し得失の見を以つてしたら、尻に目薬ぢや。「如今の人、須らく是れ、各各窮めて無得失の處に到つて、然る後得失を以つて人を辨ずべし」と、先づ手前で無得失の處まで入得せよ。扱て其の後に、人の得失を分て。「若し一向に言句を棟譯する處に去つて用心せば、又た幾時に到つてか、了ずることを得去らん」と、若し大事を究めずして、只だ／＼言句の上に去つて、是れが得ぢや、是れが失ぢやと棟譯をしやうぞならば、何時になつて大事を了得し

やうぞ。「見ずや、雲門大師道く、行脚の漢、只だ空しく遊州獵縣すること莫れ」と、雲門が道ふのにも、貴様達は何も草鞋を切り減して、諸方を飛び廻るにや及ばぬ。境に障えられずして辨得すれば、何處でも本地の風光ぢや。「只だ閑言語を提擲せんことを得んと欲して、老和尚の口の動するを待つて、便ち禪を問ひ道を問ひ、向上向下、如何若何と、大卷に抄し將ち去つて、肚皮裏に壁向して卜度し」と、只だ／＼役にも立たぬ言語を擲め取らうとしてサ、彼方へ行つちや禪を問ひ、此方へ來ちや道を問ひ、向上が如何ぢや、向下が如何ぢやと、ソレを一切合切抄し取つて、腹が塞がる程詰め込んでからに、計較卜度しサ。「到る處の火爐邊に、三箇五箇、頭を聚め口を擧げて、喃喃地に便ち道ふ」と、室内にも入らず、茶呑場に集つては、燕の三番子のおうに、ベチャクチャと。「這箇は是れ公才の語。這箇は是れ身に就いて打出する語。這箇は是れ事上に道ふ底の語。這箇は是れ體裏の語と。爾が屋裏の老爺老娘を體するか」と、是れは貴人公子の文華ぢやの、是れは自己の胸襟より流出した法身量邊の語ぢやの、是れは借事問ぢやの、是れは本來真如圓證の義を形る内證の語ぢやのと吐きくさるが、ソレで本來の面目を體明することが出来るかサ、馬鹿共めが。「飯を噛却し了つて、只管に夢を説いて、便ち我れ佛法を會し了れりと道ふ。也た將に知んぬ、恁麼の行脚、驢年にも休歇し去ることを得んやと、ソシテ大飯を喰つちや、我は佛法を會したとサ。まるで夢のやうなこと云ふてけつかる。サー此のザマであらうぞならば、彌勒佛下生に到るとも、埒の明くこ

とがあらうやと。コレ迄が雲門の語ぢや。「古人、暫時の間の拈弄、豈に勝負、得失、是非等の見有らんや」と、古人の商量は角力や商賣とは違ふぞ。勝負や損得を見やうとするのは大癡呆ぢや。「桐峰臨濟に見ゆ。其の時、深山に在つて庵を卓つ。この僧、彼の中に到つて遂に問ふ、這裏忽ち大蟲に逢はん時、又た作麼生」と、桐峰は臨濟下の人ぢや。後に深山に在つて住庵した處へ、この僧が遣つて行つて、本則に在る通りの問を仕掛けた。「峰便ち虎聲を作す。也た好し、事に就いて便ち行ず」と、ソコデ桐峰が虎聲を作したのは、コリヤ一機顯はしたのぢや。「この僧也た錯を將つて錯に就くことを會して、便ち怕るる勢を作す」と、又た僧が怕る、勢をしたのは、錯を將つて錯に就いた様なものぞ。「庵主呵呵大笑す。僧云く、この老賊。峰云く、老僧を争奈何せん。是は則ち是、二り俱に不了。千古の下、人の點檢に遭ふ」と、コノ庵主と僧との問答は、好いことは好いがサ、兩方ともに尻のツツマリが付かぬ。ぢやから雪竇の點檢に遭ふたぢや。「所以に雪竇道く、是は則ち是、兩箇の惡賊、只だ耳を掩ふて鈴を偷むことを解すと。他の二人、皆な是れ賊なりと雖も、機に當つて却つて用ゐず、所以に耳を掩ふて鈴を偷む」と、此の二人は惡賊ぢやけれども、手脱りが有つた。僧が怕る、勢を作した時に、方に咬殺して、本分の草料を與ふべきに、働かなかつたのは如何したものぞ。「此の二老、百萬の軍陣を排して、却つて掃箒を鬪はしむるか如し。若し此の事を論ぜば、須らく是れ、人を殺すに眼を眩せざる底の手脚なるべし」と、此の二人の陣立は、最初は立派に見

えだが、終りが散々ぢや、燈心で人を縛るやうでたわいはない。此處では、人を殺してもデロツともせぬやうな手脚が無ければならぬ。「若し一向に縦して擒せず、一向に殺して活せずんば、人の怪笑に遭はんことを免れず。然も是くの如くなりと雖も、他の古人、亦た許多の事無し。看よ、他の兩箇恁麼、總に是れ機を見て作す」と、雪竇は二人共に放行のみぢやと抑下したが、今更闔悟は扶けて云ふぞ。二人は何も解解情識の有つたのではない、機を見て働いたのぢやと。「五祖道く、神通游戲三昧、慧炬三昧、莊嚴王三昧」と、五祖法演が斯く云ふたも、此等(庵主と僧との働きの)の上ぞ。大地を變じて黄金と作することも自由ぢやが、柳に入れば緑、花に入れば紅ぢや。又た淨土の莊嚴は自己に如くはない。何故ならばサ、諸相は非相ぢやから。サ、此の「神通游戲三昧」を、教家では過去、現在、未來を通達するを云ふが、納僧家では日用喫飯の上を云ふぢや。又た「慧炬三昧」は教家では眞俗の二諦を照すを云ひ、納僧家では四天下を照破して、學者を照見するを云ふ。又た「莊嚴王三昧」は、教家では、内莊嚴外莊嚴と分ち、智を内莊嚴、福を外莊嚴と云ふが、納僧家では言句の句中玄を云ふぞ。「抄」には、五祖の語は此の則の拈語ぢやと云ふてある。「自ら是れ後人、脚跟地に點せず、只だ去つて古人を點檢して便ち道ふ、得有り失有りと。有る底は道ふ、分明に是れ庵主落節すと。且得沒交涉」と、然るに後人は、確かなこともない癖に、無暗に二人を點檢して、得ぢや失ぢやと云ひ、又た活眼も無いのに評を下して、コリヤ庵主の仕損ひぢやと。本則の意はソ

ナことではないぞ。「雪竇道ふ、他の二人相見、皆な放過の處有り」と、雪竇が云ふのに、二人の相見には滲漏の處があると、此の己下の評には恐らく脱誤有らん歟。「其の僧道く、這裏忽ち大蟲に逢はん時、又た作麼生と。峰便ち虎聲を作す。此れは便ち是れ放過の處なり」と、此處は、「僧便ち怖るる勢を作す。庵主呵呵大笑。是れ二人放過の處」と入れて補つて見るが好い。「乃至道ふ、老僧を争奈何せんと。此れ亦た是れ放過の處なり」と、又た此處は、「僧云く、這の老賊。庵主云く、老僧を争奈何せんと。是れ二人放過の處なり」と補つて見るが好い。「著著第二機に落在す」と、一手々々、言語道斷の活きた働きがない。「雪竇道ふ、用ゐんと要せば便ち用ゐよ」と、コリヤ次の頌の、「之れを見て取らざれば」と云ふ處を指したのぢや、只だ雪竇の心ばかりを取るぢや。サー打つべき處を打たいでは。我にある三昧ぢやものを。「如今の人、恁麼に道ふことを聞いて、便ち道ふ、當時好し、與に令を行ずるにと。且らく盲枷瞎棒すること莫れ。只だ徳山、門に入れば便ち棒し、臨濟、門に入れば便ち喝するが如き、且らく道へ、古人の意如何」と、今時の者は、只だ打ちさへすれば好いやうに云ふがサ、無暗矢鱈に打つた處で、何んの効があるぞ。徳山、臨濟の棒喝は、盲枷瞎棒ぢやない。「雪竇、後面に便ち只だ此くの如く頌出す。且らく道へ、畢竟作麼生か、耳を掩ふて鈴を偷むことを免れ得去らん。頌して云く」と、次に雪竇が放過の處を著語の意を以つて頌出した。畢竟如何したならば雪竇の點檢を免れ得ることぞ。サー頌を看よ。

見之不取

○蹉過了也○已是千里萬里

思之千里

○悔不愼當初○蒼

天蒼天

好箇斑斑

○闍黎自領出去○爭奈未解用在

爪牙未備

只恐用處不明○待爪牙備向備道

君不見大雄山下忽相逢

○有條攀

條無條攀例

落落聲光皆振地

○這大蟲却恁麼去○猶較些子○幾箇男兒

是丈夫

大丈夫見也無

○老婆心切○若解開眼同生同死○雪竇打葛藤

收虎尾兮捋虎鬚

○忽然突出如何收○收天下衲僧在這裏○忽有箇出來便

與一撈○若無收放備三十棒○教爾轉身吐氣○喝打云何不道這老僧

【和訓】之れを見て取らざれば。(○蹉過了也。○已には千里萬里。之れを思ふこと千里。(○悔らくは當初を愼まざりしとを。○蒼天蒼天。) 好箇斑斑。(○闍黎自領出去。○爭奈せん、未だ用ゐることを解せざること有らん。) 爪牙未だ備はらず。(○只だ恐らくは用處明かならざらんとを。○爪牙の備らんを待つて、備に向つて道はん。) 君見ずや、大雄山下に忽ち相ひ逢ふ。(○條有れば條を攀ぢ、條無くんば例を攀ぢ。) 落落たる聲光皆な地に振ふ。(○這の大蟲却つて恁麼に去る。○猶ほ些子に較れり。○幾箇の男兒か是れ丈夫。) 大丈夫見るや也た無や。(○老婆心切。○若し眼を開くことを解せば同生同死。○雪竇葛藤を打す。) 虎尾を收め虎鬚を捋ぐ。(○忽然として突出せば如何が收めん。○天下の衲僧を收め

て這裏に在く。○忽に箇の用で来る有らば、便ち一歩を與へんに。○若し收むること無くば、備に放す三十棒。○備をして身を轉し氣を吐かしむ。○唱して打つて云く、何んぞこの老賊と道はさる。

【提唱】

爾 コレから雪竇の頰ぢや。

「**之れを見て取らされは**」と、二人ながら行はずべき處を蹉過した。ぢやから。

「**之れを思ふこと千里**」と、證文の出し遅れぢや。いくら後で無念なと思ふても返らぬ。實に、

「**好箇斑斑**」と、二人とも、虎は虎ぢやがサ、毛並が美しいばかりで。

「**爪牙未だ備らず**」と、一向に奪命の神符がないぢや。

「**君見すや、大雄山下に忽ち相ひ逢ふ**」と、昔も去る例ありぢや。大雄山下の虎こそ、見事な虎なれと。コリヤ百丈と黄檗との出合を舉示したのぢや。

「**落落たる聲光皆々地に振ふ**」と、虎聲廣大にして、天を驚かし地に振ひ、天下誰れ知らぬものはないぞ。ソレを此の則と比べてみやれ。

「**大丈夫見るや也た無や**」と、此の句と、次ぎ下の二句とは、瀉山、仰山の問答を引いたのぢや。

サト諸人も、幡隨院長兵衛のやうな男なりや、百丈、黄檗の出合を篤と知りつらう。

「**虎尾を收め虎鬚を捋つ**」と、百丈、黄檗の相見は、始終全うして、虎が手に入つた働ぢや。

【書語】 コレから圓悟の著語ぢや。

「**見之不取**」——「蹉過了也」、庵主も遣り通した。「**已に是れ千里萬里**」、追ふも及ばずぢや。

「**思之千里**」——「悔らくは當初を慎まざりしとを」、ソノ時の了簡が違つた。「**老僧を争奈何せん**」と云ふ處で、手放すと云ふことがあるものかサ。「**蒼天蒼天**」、今更思ふても苦々しいわい。

「**好箇斑斑**」——「**闍黎自領出去**」、雪竇、「**好箇斑斑**」などと自負するが、ナンノ見たくもない。ソノナ虎は用はないから、雪竇背負つて出て失せる。争奈せん、未だ用ゐることを解せざること在于らん、毛並が美しいばかりで大用を知らなさや、剝製の虎も同じぢや。

「**爪牙未備**」——「**只だ恐くは用處明かならざらんことを**」、爪牙が無けりや、働くにも働けまい。働いても確とした働きは出来ぬ。「**爪牙の備らんを待つて、爾に向つて道はん**」、虎なら爪牙が無ければ相手にもならぬ。爪も牙も出来てから、話し相手にならう。

「**君不見大雄山下忽相逢**」——「**條有れば條を攀ち、條無くんば例を攀づ**」、雪竇、葛籠の底から、古手本を引ッ張り出して來たわい。

「**落落聲光皆振地**」——「**這の大蟲却つて恁麼に去る**」、コリヤ又た格別なものぞ。斯うなければ

ならぬ。「猶ほ些子に較れり」流石は百丈ぢや。「幾箇の男兒か是れ丈夫」、男の中の男は多くはないぞ。ハテサテ那箇か是れ不丈夫かサ。

「大丈夫見也無」——「老婆心切」、大丈夫見るか如何ぢやと云ふのは、雪竇も老婆ぞ。「若し眼を開くことを解せば同生同死」、コノ虎を見る眼が有れば、百丈、黄檗の仲間になれる。「雪竇葛藤を打す」、雪竇餘り云ひ過ぎる、やかましうわす。

「收虎尾兮持虎鬚」——「忽然として突出せば如何んが收めん」、雪竇は何んでもない様に云ふが、此の虎が、此處へヒョククリ出て來たら如何すると、圓悟が雪竇に喰ひ掛つた。サ、諸人は如何ぢやナ。此の「收」の字は削るが好い。「天下の衲僧を收めて這裏に在く」、天下の衲僧を取ッ占めると。此の句も好けない、削る可し。「忽に箇の出て來るあらば、便ち一撈を與へんに」、コゝでは「忽有箇出來」の五字が不可ぬ。「若し收むること無くんば、爾に放す三十棒」、若し一撈が出来なけりや、三十棒の價值があるぢや。此の句でも「收」の字が好くない。つまり此處の下語では、全體で十文字を削るのぢや。「爾をして身を轉じ氣を吐かしむ」、雪竇が斯く頷するのは何の爲めぢや。只だ諸人をして轉身の活路を得させんとしてぢや。エ、此の埒明かずめ。「喝して打つて云く、何んぞ這の老賊と道はざる」、圓悟も耐へ兼ねたから強く呵して、サ、大衆、何んぞ我を老賊と云はないのぢや。サ、道へく、看ん。

見之不取思之千里正當險處都不能使等他道爭奈老僧何好與本分草料當時下得若這手脚他必須有後語二人只解放不解收見之不取早是白雲萬里更說什麼思之千里好箇斑斑爪牙未備是則是箇大蟲也解齒牙伏爪爭奈不解咬人君不見大雄山下忽相逢落落聲光皆振地百丈一日問黃檗云什麼處來檗云山下採菌子來丈云還見大蟲麼檗便作虎聲丈於腰下取斧作斫勢檗約住便掌丈至晚上堂云大雄山下有一虎汝等諸人出入切須好看老僧今日親遭一口後來瀉山問仰山黃檗虎話作麼生仰云和尚尊意如何瀉山云百丈當時合一斧斫殺因什麼到如此仰山云不然瀉山云子又作麼生仰山云不唯騎虎頭亦解收虎尾瀉山云寂子甚有險崖之句雪竇引用明前面公案聲光落落振於大地也這箇些子轉變自在要句中有出身之路大丈夫見也無還見麼收虎尾兮持虎鬚也須是本分任爾收虎尾持虎鬚未免一時穿却鼻孔

【和訓】之れを見て取らざれば、之れを思ふと千里と。正に險處に當つて都て使ふと能はず。他の、老僧を爭奈何せんと思ふは、好し自分の草料を與ふるに。當時若し這の手脚を下し得ば、他必ず須らく後語有るべし。二人只だ放つことを解して、收むることを解せず。之れを見て取らざれば、早く是れ白雲萬里。更に什麼の之れを思ふこと千里とか説かん。好箇斑斑、爪牙未だ備らずと。是は則ち是、箇の大蟲、也た牙を藏し爪を伏することを解す。爭奈せん、人を咬むことを解せ

ざることを。君見ずや、大雄山下に忽ち相ひ逢ふ、落たる聲光皆な地に振ふと。百丈、一日黄檗に問ふて云く、什麼の處よりか來る。葉云く、山下に菌子を採り來る。丈云く、還つて大蟲を見る麼。葉便ち虎聲を作す。丈、腰下に於て斧を取つて研る勢を作す。葉、約住して他ち掌す。丈、晩に至つて上堂。云く、大雄山下に一つの虎有り。汝等諸人、出入に切に須らく好く看るべし。老僧今日親しく一口に遣ふと。後來、瀧山、仰山に問ふ、黄檗の虎の話作麼生。仰云く、和尚の尊意如何。瀧山云く、百丈當時一斧に研殺す合し、什麼に因つてか、此くの如くなるに到る。仰山云く、然らず。瀧山云く、子又た作麼生。仰山云く、唯だ虎頭に騎るのみにあらず、亦た虎尾を收むることを解す。瀧山云く、寂子甚だ檢束の句有り。雪寶引き用ひて、前面の公案を明す。聲光落落として大地に振ふ。這箇の些子轉變自在にして、句中に出身の路有らんことを解す。丈、夫見るや也た無やと、還つて見る麼。虎尾を收め虎鬣を持つと。也た須らく是れ本分なるべし。任ひ爾虎尾を收め虎鬣を持つるも、未だ免れず、一時に鼻孔を穿却することを。

【提唱】 コレから圖悟の評ぢや。之れを見て取らざれば、之れを思ふこと千里と。正に嶮處に當つて都べて使ふこと能はず」と、此の僧、虎聲を作した處で、一働さ働く可きに、怕るる勢を作したは殘念ぢや。「他の、老僧を争奈何せんと道はんを等つて、好し本分の草料を興ふるに。當時若し這の手脚を下し得ば、他必らず須らく後語有るべし」と、庵主が、「老僧を争奈何せん」と云ふた處で、本分の草料を喫はせる丈の腕前がありや、庵主も一働さしたらうにサ。「二人只だ放つことを解して收むることを解せず」と、二人ともよけることばかり遣つて、締上げることを、即ち把任かならぬ。「これを見て取らざれば、早く是れ白雲萬里。更に什麼の、之を思ふこと千里とか説かん」と、お

ヤから其の隔りは實にハヤ白雲萬里、遠うして遠しぢや。千里と云ふは愚かなこと。「好箇斑斑、爪牙未だ備らずと。是は則ち是、箇の大蟲、也た牙を藏し爪を伏することを解す。争奈せん。人を咬むことを解せざることを」と、此の虎の爪牙は役に立たぬ、有つても無くても同じぢや、人を咬む術を知らぬ。「君見ずや、大雄山下に忽ち相ひ逢ふ、落たる聲光地に振ふと」ソリヤこそ、眞物の虎が出て來た。「百丈、一日黄檗に問ふて云く、什麼の處よりか來る。葉云く、山下に菌子を採り來る。丈云く、還つて大蟲を見る麼。葉便ち虎聲を作す。丈、腰下に於て斧を取つて研る勢を作す。葉、約住して便ち掌す」と、コリヤ前にも云ふた通りぢや。百丈め、いらざる事を云ふたものぢやから、トウ／＼痛い目を見居つた。ソコデ百丈は何んと吐したかサ。「丈、晩に至つて上堂。云く、大雄山下に一つの虎有り。汝等諸人、出入に切に須らく好く看るべし。老僧今日親しく一口に遣ふと」、百丈が晩の上堂に、大雄山下には一匹の大虎が居るぞ。貴様達好く氣を付けさせ。己も今日一口に遣はれたわいと。サト是れは馬鹿か利根か、何んの心行ぞ。「後來、瀧山、仰山に問ふ」と、是れも又た僞仰宗雲上の物語ぢや。「黄檗の虎の話作麼生。仰云く、和尚の尊意如何。瀧山云く、百丈當時一斧に研殺す合し、什麼に因つてか、此くの如くなるに到る」と、瀧山が仰山に、此の虎の話を開ふたと見える。スルト仰山は、先づ和尚、貴方の思召は如何ぢやと。瀧山は、百丈が其の時、虎を斫り殺して仕舞つたら、此の狼籍はあるまいと。コレを邪解にサ、百丈は斫り殺したではないか、然るに今日子孫繁

昌は如何と。笑ふべし。仰山云く、然らず。瀉山云く、子又た作麼生。仰山云く、唯だ虎頭に騎るのみならず。亦た虎尾を收むることを解す」と、仰山が、某甲が見る處はサウでない。瀉山が、ソレなら如何ぢや。仰山が、百丈、黄檗の元元の恐しさは、斫る勢で虎頭に騎るばかりでなく、一掌して虎尾も收めたのぢやと。瀉山云く、寂子甚だ嶮崖の句有り」と、ソコで瀉山が、仰山の見處の高いのを稱讃してからに、主は恐しいことを云ふ奴ぢやと。雪竇引き用ゐて、前面の公案を明すと、雪竇が此の問答を頷の中に借りて來たのぢや。聲光落落として大地に振ふ。這箇の些子、轉變自在にして、句中に出身の路有らんことを要す」と、落落たる聲光の句は、百丈、黄檗ばかりを讚嘆したのではないぞ。コゝに微妙な仔細がある、智恵有る者は來年見るべしサ。大丈夫見るや也た無やと。還つて見る麼。虎尾を收め虎鬚を拵つと。也た須らく本分なるべし。任ひ爾、虎尾を收め虎鬚を拵つるも、未だ免れず、一時に鼻孔を穿却することを」と、本分の穴に居ては見えることではない。コリヤ合點の行かぬ評ぢや。

【註】「閑言語を提擧せんことを得んと欲して」提擧は擡擧の義なり。「本分の草料」本來牛馬に分與さるべき何草、林の類を云ふ。禪門にては轉じて、棒喝を下す義に用ゆ。

第八十六則 雲門有光明在

【雲門有光明在】

垂示云、把定世界不漏絲毫截斷衆流不存涓滴開口便錯擬議卽差且道作麼生是透關底眼試道看

【和訓】垂示に云く、世界を把定して絲毫を漏さず、衆流を截斷して涓滴を存ぜず。口を開けば便ち錯る、擬議すれば卽ち差ふ。且らく道へ、作麼生か是れ透關底の眼。試みに道へ、看ん。

【提唱】第八十六則、「雲門有光明在」と、コノ則は、雲門の室中、別に道理有ることを明すぢや。「垂示に云く、世界を把定して絲毫を漏さず」と、サ一三千世界を掌中に一掴みにして、芥子一粒も残さぬ、是れ眞實實頭の處ぢや。「衆流を截斷して涓滴を存ぜず」と、又た天竺、唐、日本、四海を斷ち截つて、風の涙程も漏さぬ。コリヤ煩惱の流注を斷つぢや。併し、口を開けば便ち錯る、擬議すれば卽ち差ふ」と、是れ程悟つても、口を開けば何故錯るナ。ソレはサ、まだ一萬里の

關鎖があるからちや、ソレを透過しなければ眞箇ちやないぞ。「且らく道へ、作麼生か是れ透關底の眼。試に道へ、看んと、ソレなら、其の關鎖を透り越した眼玉は、ドンナ眼玉ちや。丸いかな四角かな。サ、道ひ得る者あらば道よて看よ。

舉雲門垂語云人人盡有光明在。○黑漆桶 看時不見暗昏昏

○看時瞎 作麼生是諸人光明。○山是山水是水○漆桶裏洗黑汁 自

代云厨庫三門。○老婆心切○打葛藤作什麼 又云好事不如無。○

自知較一半○猶較些子

【和訓】 舉す。雲門、垂語して云く、人人盡く光明の在る有り。(○黑漆桶) 看の時見えず暗昏昏。(○看の時瞎す) 作麼生か是れ諸人の光明。(○山は是れ山、水は是れ水。○漆桶裏に黒汁を洗ふ) 自ら代つて云く、厨庫三門。(○老婆心切) 葛藤を打して什麼か作さん。(又云く、好事も無きには如かず。(○自ら知んぬ、一半に較ることを。○猶ほ些子に較れり。)

【提唱】

【和訓】 コレから本則ちや。此の則は、雲門大師が向上の一隻眼の上より唱へ出し、將ち來つた底の大事な垂語ちやものを、コンナ胡亂な下語や評では如何して〜。

「舉す。雲門、垂語して云く、人人盡く光明の在る有り」と、碧巖中の大關所、講釋はならぬぞ。

諸解も一向取る可からず、錯つて人々具足の會をなすな。サ、此の垂語の峻峻なるとは、恰も天の九虎關に似て居る。南天棒も這回初めて見得分明ちや。明眼の衲僧もイカナ〜、存じもよらぬとぞ。

「看る時見えず暗昏昏」と、併し、見やうとすれば早や見えぬ。暗昏昏ちや。

「作麼生か是れ諸人の光明」と、眉毛は眼上に横りサ、黒漆潭崙夜裡に走るちや。

「自ら代つて云く、厨庫三門」と、此の語最も毒ちや。目前分明とは邪解々々。大毒鼓ちやもの、

風上に置いて喪身失命するぞ。

「又云く、好事も無きには如かず」と、サテ〜恐しい、前箭は猶ほ軽く後箭は深しか。甚だ親切なものちや。入佛と云ふも大會と云ふも世話の皮と、掃蕩と見ば邪解よ。針頭、鐵を削るちや。

【和訓】 コレから圓悟の著語ちやが、此の下語は總に不可、取る可からずちや。
「舉雲門垂語云人人盡有光明在」——「黒漆桶」、光明の端的は眞ッ暗ちやと、コレは不可ぬ。ソレにしても、「自烈孤明を列す」と頌した雪竇は奇特でおじやる。

「看時不見暗昏昏」——「看る時瞎す」、先づ自己の眼を潰せと。とどかぬ下語ちや。

「作麼生是諸人光明」——「山は是れ山、水は是れ水」、「漆桶裏に黒汁を洗ふ」といかにぬく、皆な合頭ぢや。

「白代云厨庫三門」——「老婆心切」、「葛藤を打して什麼か作さん」、「厨庫ぢや、三門ぢやと、言句が多過ぎると。コレも面白くない。

「又云好事不如無」——「自ら知んぬ、一半に較ることを」、「猶ほ些子に較れり」、「雲門も圓悟も一つ者ぢやと不可々々、削る可しく。

南天棒云く、此の則の講みやうは如何ぢやと問ふ者があらばサ、答へて云はん、老婆心切。

雲門室中垂語接人備等諸人脚跟下各各有一段光明輝騰今古迥絶見知雖然光明恰到問著又不曾豈不是昏昏地二十年垂示都無人會他意香林後來請代語門云厨庫三門又云好事不如無尋常代語只一句爲什麼這裏却兩句前頭一句爲備略開一線路教備見若是箇漢聊聞舉著剔起便行他怕人滯在此又云好事不如無依前與備掃却如今人纔聞舉著光明便去瞠眼云那裏是厨庫那裏是三門且得沒交涉所以道識取鉤頭意莫認定盤星此事不在眼上亦不在境上須是絶知見忘得失淨裸裸赤灑灑各各當人分上究取始得雲門云日裏來往日裏辨人忽然半夜無日月燈光會到處則故是未曾到處取一件物還取

得麼參同契云當明中有暗勿以暗相觀當暗中有明勿以明相遇若坐斷明暗且道是箇什麼所以道心花發明照十方刹盤山云光非照境境亦非存光境俱忘復是何物又云即此見聞非見聞無餘聲色可呈君箇中若了全無事體用何妨分不分但會取末後一句了却去前頭游戲畢竟不在裏頭作活計古人道以無住本立一切法不得去這裏弄光影弄精魂又不得作無事會古人道寧可起有見如須彌山不可起無見如芥子許二乘人多偏墜此見雪竇頌云

【和問】 雲門、室中に垂語して人を接す。備等諸人、脚跟下に各各一段の光明有り。今古に輝騰して、迥かに見知を絶す。然も光明なりと雖も、恰かも問著するに到つて、又を會せず。豈に是れ昏昏地なるにあらずや。二十年垂示するに、都べて人の、他の意を會する無し。香林、後來代語を請ふ。門云く、厨庫三門。又云く、好事も無きには如かずと。尋常代語は只だ一句。什麼と爲てか、這裏却つて兩句なる。前頭の一句は、備が爲に略ぼ一線路を開いて、便ち去つて瞠眼して云く、那れ箇の漢ならば、聊か舉著するを聞いて、剔起して便ち行かん。他、人の此に滯在せんことを怕れて、又云く、好事も無きには如かずと。依前として備が爲に掃却す。如今の人、纔かに光明を舉著するを聞いて、便ち去つて瞠眼して云く、那裏か是れ厨庫、那裏か是れ三門と。且得沒交涉。所以に道ふ、鉤頭の意を識取せよ、定盤星を認むること莫れと。此の事、眼上に在らず、亦た境上に在らず。須らく是れ知見を絶し、得失を忘し、淨裸裸赤灑灑として、各各當人分上に究取して、始めて得べし。雲門云く、日裏に來往し、日裏に人を辨す。忽然として半夜、日月燈光無からんに、會つて到る處、則ち故に是。未だ會つて到らざる處に、一件の物を取らんに、還つて取り得てん麼と。參同契に云く、明中に當つて暗有り、暗を以つて相ひ觀ること勿れ。暗中に當つて明有り、明を以つて相ひ遇ふこと勿れと。若し明暗を坐斷せば、且らく道へ、

是れ箇の什麼ぞ。所以に道く、心花發明して十方刹を照すと。盤山云く、光、境を照すに非らず、境亦た存するに非らず。光、境俱に忘す、復た是れ何物ぞと。又云く、此の見聞に即して見聞に非らず、餘の聲色の君に呈す可き無し。箇の中若し全く無事なることを了せば、體用何んぞ、妨げん分不分明と。但だ最後の一句を會取し了つて、却つて前頭に去つて遊戯せば、畢竟して裏頭に在つて活計を作さず。古人道く、無住の本を以つて一切の法を立すと。這裏に去つて光影を弄し、精珠を弄することを得され、又た無事の會を作すことを得され。古人道く、寧ろ有の見を起すこと、須彌山の如くなる可くとも、無の見を起すこと、芥子許りの如くもす可からずと。二乗の人、多く偏に此の見に墜つ。雪竇頌して云く。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢやが、此の評も總て本則に徹しない。恰かも野老が、公卿の事を論ずるがやうぢや。今ま南天棒は、全文から百二十四字を削つて用ゐるぞ。雲門、室中に垂語して人を接す。爾等諸人、脚跟下に各各一段の光明有り。今古に輝騰して、迥かに見知を絶す。然も光明なりと雖も、恰かも問著するに到つて、又た會せず」と、雲門が垂語して云ふのに、爾等諸人は各々、今古三世を照し抜いて居る大光明を具足しながら、失つて居るぞ。「豈に是れ昏昏地なるにあらずや」と、コノ七字は削るが好い。此の評では雲門とは云はれぬ。大違ひぢや。「二十年垂示するに、都べて人の、他の意を會する無し。香林、後來代語を請ふ」と、香林、何故手前では見ずに代語を請ふた。南天棒なら、三十棒を喫はせる處ぢや。「門云く、厨庫三門。又た云く、好事も無きには如かずと、コリヤ大毒語ぞ、サテく驚き入つたものぢや。「尋常代語は只だ一句、什麼と爲てか、這裏

却つて兩句なる。前頭の一句は、爾が爲に略ぼ一線路を開いて、爾をして見せしむ」と、コレは合點行かぬ云ひ分ぢや、きたない。コノ已下、爾が與に掃却す」に至る六十字は削る方が好い。「若し是れ箇の漢ならば、聊か擧著するを聞いて、別起して便ち行かん。他、人の此に滞在せんことを怕れて」と、大いに穿き違へた。イヤハヤ大間違ひ。又た云く、好事も無きには如かずと、斯う煮殺しては、佛法は地に落ちるぞ。「依前として爾が與に掃却す」と、コレでは雲門の一派は、地を拂ふて盡くぢや。コ、まてが好くない。「如今の人、纔かに光明を擧著するを聞いて、便ち去つて瞠眼して云く、那裏か是れ厨庫、那裏か是れ三門と。且得沒交涉」と、サ、今時の者は、雲門の垂語を聞いて、目を据えてからに、何處が厨庫ぢや、何處が三門ぢやと。大馬鹿共めが。「所以に道ふ、鉤頭の意を識取せよ、定盤星を認むること莫れと」、ぢやから、宗師の慈悲の處、的面の意を看て取れと云ふは此處ぢや。「此の事、眼上に在らず、亦た境上に在らず。須らく是れ知見を絶し、得失を忘し、淨裸裸赤灑灑として、各各當人分上に究取して、始めて得べし」と、コリヤ能見所見の上にも無いがサ、併し知見を絶しては猶ほ見えぬ、淨裸裸では愈々見えぬぞ。雲門云く、日裏に來往し、日裏に人を辨ず」と、此の示衆は恐る可き宗門の爪牙ぢや。古人も蹉過した、今人は猶更のことぢや。「忽然として半夜、日月燈光無からんに、會つて到る處、則ち故に是」と、行きつけた處は尤もよ。「未だ會つて到らざる處に、一件の物を取らんに、還つて取り得てん麼」と、モトならぬぞ

く。已上が雲門の語ぢや。「雲門録」の代語部に、「代つて云く、多少の人を瞞却す」とある、大同小異ぢや。「參同契」に云く、明中に當つて暗有り、暗を以つて相ひ観ること勿れ。暗中に當つて明有り、明を以つて相ひ遇ふこと勿れと。若し明暗を坐斷せば、且らく道へ、是れ箇の什麼ぞ」と、石頭和尚の「參同契」に云ふのに、差別の中の無差別、ソナタ衆が皆な佛ぢや。又た無差別の中の差別、佛ぢやけれども男女の相があると。コノ句に據つてサ、若し明暗を坐斷したら如何ぢやと評しては、本則の意に稱はない、却つて雲門の旨を失ふぞ。コノ三十五字も削つた方が好い。「所以に道ふ、心花發明して、十方刹を照すと」、コレは「圓覺經」の普覺の章にある。光明が發揚すりや十方世界を照すと。コリヤ文義の本を顯はすのぢや。「盤山云く、光、境を照すに非らず、境亦た存するに非らず。光境俱に忘す、復た是れ何物ぞ」と、コリヤ文義の妙を斷するのぢや。能く光は照すが、照さるゝ境に能所が存するから、碍が出来るぞ。サ、照さねども、上は非相非々相天より、下は金輪奈落のドン底まで、皆な佛ぢや、山河大地もない。此の處まで誰れも来るものぢや、コレから眞修に入るぞ。盤山は馬祖の法嗣の盤山實積禪師ぢや。又た云く、此の見聞に即して見聞に非らず、餘の聲色の君に呈す可き無し。箇の中若し無事なることを了せば、體用何んぞ妨げん分分と」、コリヤ三平山の義忠禪師の偈ぢや。「三平先づ拂子を以つて禪床を撃つて云く、聞く聲、聞けば即ち聲すと。又た撃つて云く、見る聲、見れば即ち睛すと。拂子を收めて云く」と、ソレから此

の偈ぢや。コリヤ再び斷じて古人の受用底を明すぢや。サ、此の端的は、見聞に即して見聞に惑はされない處にある。是れ柳は縁と指す處はないから、教へやうはないが、若し全く無事なることを了得すれば、體と用と、分けるも分けなない自由ぢや。但た最後の一句を會取し了つて、却つて前頭に去つて遊戲せば、畢竟裏頭に在つて活計を作さず」と、「好事も無きには如かず」の一句を會得してから、「厨庫三門」を見れば、悟解了知の間に活計はしないと。是に到つて大躋過ぢや。本則の意を是れて打つくわし。「古人道く、無住の本を以つて一切の法を立すと。這裏に去つて光影を弄し、精魂を弄するを得され」と、コレは「維摩經」の觀衆生品にある。一切の法は無住を以つて本とするから、「厨庫三門」の處に向つて、ア、ぢやカウぢやと云ふなど。コレも大惡評ぢや。削る方が好い。「又た無事の命を作すことを得され。古人道く、寧ろ有の見を起すこと、須彌山の如くなる可くとも、無の見を起すこと、芥子許りの如くもす可らずと。二乗の人、多く偏に此の見に墜つ。雪竇頌して云く」と、西天付法第十四祖の龍樹の云ふのに、須彌山のやうに有の見を起しても、芥子許りも無の見を起すなど。併し聲聞緣覺の二乗の者共は、多くは此の無の謬見に落ちるぞ。サ、雪竇の本則を頌する處を看よ。

自照列孤明

○森羅萬象賓主交參 ○裂轉鼻孔 ○晴漢作什麼 爲君通

線 ○何止一線 ○十日並照 ○放一線道即得 花謝樹無影 ○打葛藤有

什麼了期 ○向什麼處摸索 ○黑漆桶裏盛黑汁 看時誰不見 ○瞎 ○不可總扶

離摸壁 ○兩瞎三瞎 見不見 ○兩頭俱坐斷 ○瞎 倒騎牛兮入佛殿

○中三門合掌 ○還我話頭來 ○打云向什麼處去也 ○雪竇也只向鬼窟裏作活計 ○還會

麼 ○半夜日頭出 日午打三更

【和訓】 自照孤明を列す。(○森羅萬象、猶主交參す。○鼻孔を裂轉す。○瞎漢什麼をか作す。○君が爲に一線を通す。○何んぞ止だ一線のみならん。○十日並べ照す。○一線道を放つことは即ち得たり。○花謝して樹に影無し。○葛藤を打せば什麼の了期か有らん。○什麼の處に向つてか摸索せん。○黑漆桶裏に黒汁を盛る。○看る時誰れか見ざる。○瞎。○總に扶離摸壁す可からず。○兩瞎三瞎。○見るや見ざるや。(○兩頭俱に坐斷す。○瞎。○倒に牛に騎つて佛殿に入る。○三門の中つて合掌す。○我に話頭を還し來れ。○打つて云く、什麼の處に向つてか去るや。○雪竇也た只だ鬼窟裏に向つて活計を作す。○還つて會す麼。○半夜日頭出で、日午三更を打す。)

【提唱】

○コレから雪竇の頰ぢや。

「自照孤明を列す」と、コリヤ雲門宗の名劍。古今の評判、一等に尻に目薬ぞ。「厨庫三門」等の

句を並べた、何も彼も投げ出した。所謂自性の孤明を列するのぢやから、男女、在家出家、山河大地、李母張婆と、づらりつと列ねたがサ、本來孤明なるが爲めに、鋒を犯し手を傷けることは少しも無い。實にハヤ、さつぱりとしたものだ。

「君が爲に一線を通す」と、サー何んと通じたぞ。「厨庫三門」と通じた、又た「好事も無きには如かず」と通じた。

「花謝して樹に影無し」と、上の句は明中暗、是れは暗中明ぢや。サー「厨庫山門」、「好事も無きには如かず」の二句が勝れて居るから、頰にも亦た工夫が有るぞ。却つて南泉一株花の頰の、「見聞覺知一一に非らず、山河は鏡中に在つて觀せず」と云ふと何以ぞ。雪竇の此の句と雲門の句とは、八兩半斤ぢや。「謝」とは落つと云ふ義ぢや。

「看る時誰か見ざる」と、誰れも見ぬ者はない。櫻は櫻、梅は梅と見るぢや。此の二句、カウ、ア、と當比べては届かぬぞ。

「見るや見ざるや」と、見たを買はぬか、見ざるを買はないか。茶盆や茶柄杓やアと。此の句は「好事も無きには如かず」と云ふ處を頌したと古來からの評ぢや。

「倒に牛に騎つて佛殿に入る」と、自照孤明の端的は、先づ斯うしたものだ。此の境界に到れば自由自在ぢや。南天棒云く、實に老婆親切、併し是れ三句を具するの妙句ぢや。立白に乗つて針の

上を歩け。倒に牛に騎つて佛殿に入ると、サウでなるものか。サー最初に頌し盡したつたから、此處では何んと云つても金剛王寶劔ぞ。

〔看語〕 コレから圓悟の著語ぢや。

「自照列孤明」——「森羅萬象、賓主交參す」、是れ孤明を列ねた處ぞ。サー此の座敷に、大勢並んで、僧俗男女と交參して居るけれども、佛の腹の中には衆生が一杯、衆生の腹の中には佛が一杯。孤明の上に列つて居る。元と是れ一枚の黄金ぢや。「鼻孔を裂轉す」、コノ光明は人々、鼻の先に在るぞ。「瞎漢什麼をか作す」、畢竟諸人の自性ぢやけれども、用ゐる處がない、情ないことぢや。コレが見えぬ奴は何んとしやうぞ。

「爲君通一線」——「何んぞ止だ一線のみならん」、一線ばかりぢやないぞと、雪竇を弄して云ふ。「十日並べ照す」、大晦日から眞ッ暗がりぢや。「一線道を放つことは即ち得たり」。一線道と云ふから、コレでは未だ半提ぢや。

「花謝樹無影」——「葛藤を打せば什麼の了期か有らん」、此の「花謝して」の句に於て、かゝぐり廻しては不可ぬぞ。「什麼の處に向つてか摸索せん」、コリヤ妙句ぢや。「黒漆桶裏に黒汁を盛る」、一切合切眞ッ暗闇ぢやと。コリヤ無分曉と云ふ意ぢや。

「看時誰不見」——「瞎」、此の瞎の字のサクハイでは蹉過ぞ。「總に扶維摸壁す可からず」、其處等あたりを探し廻すな。「兩瞎三瞎」、正瞎ぢや、瞎漢が多い。「見不見」——「兩頭俱に坐斷す」、何れも彼れも埒明かぬと。「見るや見ざるや」と云ふたから、

明暗共に坐斷した。「瞎」。明暗一如ぢや。「倒騎牛兮入佛殿」——「三門に中つて合掌す」、説似一物ではない、好く當つた。甚だ的當ぢや。

コリヤ自由の義を云ふたもの。「我に話頭を還し來れ」、雪竇、初めには「自照孤明を列す」と云ふたではないか、尻口が合はぬ。退後々々、サー圓悟が代りに云ふて聞かさう。「打つて云く、什麼の處に向つてか去るや」、サー牛に騎つて何處へ行かうとするのぢや。行き處はあるまいかなと。コリヤ「入佛殿」と云ふに當て、云ふたのぢや。「雪竇也た只だ鬼窟裏の活計を作す」、倒に牛に騎つて佛殿に入るとは、一枚平等の見ではないか。ソレでは鬼窟裏の活計ぢやと。南天棒曰く、倒に佛殿に騎つて牛に入れ。「還つて會す麼」、諸人、合點が行つたかナ。「半夜日頭出で、日午三更を打す」、夜中に日が出て、眞晝間に三更の鐘が鳴る。夜かと思へば夜でもなく、日中かと思へば日中でもない。圓悟は、「倒に牛に騎つて佛殿に入る」の句の代語の積りぢやうが、取つても付かぬ下語、又た是れ鬼窟裏の活計ぞ。

自照列孤明自家脚跟下本有此一段光明只是尋常用得暗所以雲門大師與爾羅列此光

明在側面前且作麼生是諸人光明厨庫三門此是雲門列孤明處也盤山道心月孤圓光吞萬象這箇便是真常獨露然後與君通一線亦怕人著在厨庫三門處厨庫三門則且從却朝花亦謝樹亦無影日又落月又暗盡乾坤大地黑漫漫地諸人還見麼看時誰不見且道是誰不見到這裏當明中有暗暗中有明皆如前後步自可見雪竇道見不見頗好事不如無合見又不見合明又不明倒騎牛兮入佛殿入黑漆桶裏去也須是備自騎牛入佛殿看道是箇什麼道理

【和訓】 自照孤明を列すと。自家の脚跟下、本と此の一段の光明有り。只だ是れ尋常用る得て暗し。所以に雲門大師、備が與に此の光明を羅列して、備が面前に在く。且らく作麼生か是れ諸人の光明。厨庫三門と。此れは是れ雲門、孤明を列する處なり。盤山道く、心月孤圓にして、光、萬象を吞むと。這箇は便ち是れ真常獨露。然して後ち君が與に一線を通す。亦た人の厨庫三門の處に著在せんことを怕る。厨庫三門は則ち且らく從却す。朝花亦た謝して樹亦た影無く、日又た落ちて月又た暗し。盡乾坤大地、黑漫漫地。諸人還つて見る麼。看る時誰れか見ざると。且らく道へ、是れ誰れか見ざる。這裏に到つて明中に當つて暗有り、暗中に明有り、皆な前後の歩の如し、自ら見る可し。雪竇道く、見るや見ざるやと。好事も無きには如かずと云ふことを煩す。見合して又た不見、明に合して又た不明。倒に牛に騎つて佛殿に入ると。黑漆桶裏に入り去るや。須らく是れ、備自ら牛に騎つて佛殿に入つて、是れ箇の什麼の道理ぞと道ふを見るべし。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢやが、此の評もとどかぬ。今七十一字を削つて、弄して活龍と

爲すぢや。「自照孤明を列すと。本と此の一段の光明有り」と、「本有此」の三字は入らぬ、削るが好い。「只だ是れ尋常用る得て暗し」と、一段の光明も、向上に受用し得て知らぬ。「所以に雲門大師、備が與に此の光明を羅列して、備が面前に在く」と、ぢやから雲門が、「厨庫三門」とサラケ出して諸人の目の前に置いたぞ。「且らく作麼生か是れ諸人の光明」と、「是諸人光明」の五字も削る方が好い。「厨庫三門と。此れは是れ雲門、孤明を列する處なり」と、「厨庫三門」と云ふのが、雲門の孤明を列した處ぢや。「盤山道く、心月孤圓にして、光、萬象を吞むと。這箇は便ち是れ真常獨露」、サー實相真如の月は、何時になつても偏く十方世界に照り輝いて居るぞ。「月影は入る山の端もつらなりき、絶えぬ光を見るよしもがな」。併し常住不變の月を見たことなら、山の端に入る憂ひは無く好からう。「然して後ち」と、コレは「作麼生か是れ諸人の光明」と一移して然して後と云ふことぞ。「君が與に一線を通す」と、コノ上に「云」の一字を入れて見よ。「亦た人の厨庫三門の處に著在せんことを怕る、厨庫三門は則ち且らく從却す」と、厨庫三門をオツ放せと。コノ十八字も不可ぬ、削るべし。「朝花亦た謝して樹亦た影無く」と、已下の評は總べて不是々々、斯うではないぞ。「日又た落ちて月又た暗し。盡乾坤大地、黑漫漫地」と、コノ十五字も削る方が好い。「諸人還つて見る麼。看る時誰れか見ざると。且らく道へ、是れ誰れか見ざる。這裏に到つて」と、サー見んとすれば見えぬ、見た奴があらば打ち殺せ。ハテ見ないで何んとせう。「明中に當つて暗有り、暗中に

明有り。皆な前後の歩の如し」と、明暗一枚ぢや。左右の足のやうで、離れたものでないと。コノ十四字も削る可し。自ら見る可し。雪竇道く、見るや見ざるや」と、先づ自己を點檢して見よ。「好事も無きには如かずと云ふとを頷す。見に合して又た不見、明に合して又た不明」と、コノ十六字も削り取れ。「見に合して」と云ふ已下は別して悪い。合するとは和する義ぢや。即ち見と不見と、明と不明と引ツくるぢや。「倒に牛に騎つて佛殿に入ると。黒漆桶裏に入り去るや」と、コリヤ正位に轉ずる無分曉ぢや。「須らく是れ、爾自ら牛に騎つて佛殿に入つて、是れ箇の什麼の道理ぞと道ふを看るべし」と、牛に騎つて佛殿に入るよりも、水風呂桶に騎つて、地獄のドン底を三返巡れ。サウしから合點する處もあらうかい。

【厨庫】厨は物を煮燒きする處、庫は物を置く舍なり。庫裡と同意。「三門」山門と書く。當山、又は寺門とも云ふ。山とは城市に對する語にして、古來、城市は俗、山林は眞なりと爲す。畢竟、寺は俗居に反して、本來山の閑靜に依據する故に、城市にあるものも亦た山號を用ゐて、蘭若の遠離處たることを表す。臨濟菴松の語に、「一には山門の與めに墳致と作し、二には後人の與めに標榜と作さん」とあり。「李母張婆」支那には、李、張の姓多きを以つてなり。我國にて、源平藤橘と云ふに同じ。「三句を具するの妙句ぢや」三句とは雲門の三句なり。所謂函蓋乾坤の句、截斷衆流の句、隨波逐浪の句を云ふ。「説似一物ではない云々」南嶽懷讓、六祖に參ず。祖問ふ、甚麼の處より來る。讓云く、嵩山より來る。祖云く、甚麼物か怎麼に來る。讓無語。遂に八載を経て忽然として省あり。乃ち六祖に白す、某甲箇の會處ありと。祖云く、作麼生。讓云く、説似一物即不中と。説似一物とは此語に來由す。

第八十七則 雲門藥病相治

【雲門藥病相治】

垂示云明眼漢沒窠臼有時孤峯頂上草漫漫有時鬧市裏頭赤灑灑忽若忿怒那吒現三頭六臂忽若日面月面放普攝慈光於一塵現一切身爲隨類人和泥合水忽若撥著向上竅佛眼也觀不著設使千聖出頭來也須倒退三千里還有同得同證者麼試舉看

【和訓】垂示に云く、明眼の漢、窠臼沒し。有る時は孤峯頂上草漫漫、有る時は鬧市裏頭赤灑灑。忽ち若し忿怒の那吒、三頭六臂を現じ、忽ち若し日面月面、普攝の慈光を放ち、一塵に於て一切身を現じ、隨類の人と爲つて和泥合水。忽ち若し向上の竅を撥著すれば、佛眼も也た觀不著、設使ひ千聖出頭し來るとも、也た須らく倒退三千里すべし。還つて同得同證の者有り麼。試に舉す、看よ。

【提唱】第八十七則、「雲門藥病相治」と、コノ則は、雲門の宗旨、得るに隨つて、益々進むべきことを明すぢや。

「垂示に云く、明眼の漢、窠臼沒し」と、サー大用現前すれば、逆行順行、天も測ること無しで、

軌則を存ぜざる程に、佛界にも魔界にも居らぬぞ。三千世界、皆な我が肝腸ぢや。「有る時は孤峯頂上草漫漫」と、孤峯頂上とは兼中至の位、人跡不到、鳥も通はぬ處ぢや。目に雲霄を視て、三世の諸佛を吞却すぢや。サー其處に在つて、「草漫漫」とは如何ぢや。佛殿法堂前草深きこと一丈ぢや。放行の處に把住あり、把住の處に放行あり。是れ家舍を離れて途中に在らず。雲門の示衆は皆なサウぢや。「有る時は闍市裏頭赤灑灑」と、コリヤ明暗不二を云ふ。今日是くの如く說法するも、終日説いて未だ曾つて説かずぢや。塵埃の中に交つても、灑々として一ツ端も身に付けぬ無作の境界、是れ途中に在つて家舍を離れずぢや。サー是くの如き大宗師が、時に臨んで作用する則んば、「忽ち若し忿怒の那吒、三頭六臂を現じ」と、棒、兩點の如く、喝、雷奔に似たりて、種々惡辣の手段を以つて學者を接するも、只管爲人の故ぢやぞ。「忽ち若し日面月面、普攝の慈光を放ち」と、又大悲の光を放つて柔和を働くは、慈悲の利益ぢや。「一塵に於て一切身を現じ」と、一指を立つれば、三十の應身、又た百億の分身ぢや。サウして、「隨類の人と爲つて和泥合水」と、ソレ／＼の根器に随つて、地獄の話もしたりサ、色々様々ぢや。コリヤ第二義門の建立、衆生の爲に同事攝ぢや。忽ち若し向上の竅を撥著すれば、佛眼も也た覲不著」と、併しサ、第二義に落ちず、向上の第一竅を撥開すれば、佛眼を以つても窺ひ難い。況んや天魔波旬をやぢや。コリヤ掃蕩ぢや。「設使ひ千聖出頭し來るとも、也た須らく倒退三千里すべし」と、此處に到つては、假令釋迦でも達磨でも、タデ／＼ぢ

や。「還つて同得同證の者有り麼。試に擧す、看よ」と、サー上のやうな作用を、同得同證する底の衲僧があるか如何ぢや。試に擧すから看よ。

擧雲門示衆云藥病相治 ○一合相不可得 盡大地是藥 ○苦瓠連根苦 ○擺向一邊 那箇是自己 ○甜瓜徹蒂甜 ○那裏得這消息來

【和訓】 擧す。雲門、衆に示して云く、藥病相治。(○一合相不可得。盡大地是れ藥。(○苦瓠は根に連つて苦し。○一邊に擺向す。) 那箇は是れ自己。(○甜瓜は蒂に徹して甜し。○那裏よりか這の消息を得來れる。)

【提唱】

本則 コレから本則ぢや。此の則程向上にコキ上げた則はない、古今多少か錯つて判斷した、總に喪身失命ぞ。白隱、頌あり、曰く、「藥病誰れか相治す、火を求むることは水を求むるが如し。苦瓜と甜瓜と、昨日慾滿地」と。

「擧す、雲門、衆に示して云く、藥病相治」と、是れ向上、金鷄一粒の粟ぢや。「藥病相治」とは

サ、無明、煩惱を踏み碎いて、本來の面目を露はす端的、本分と見ても好い。薬も自己も無い筈ぢや。南天棒は下語して、「三叉路口」と云はうぞ。

「盡大地是れ薬」と、薬が盡大地、自己が那箇か。直指人心、盡大地是れ薬。佛はコ、ぢや。南天棒は下語して云く、「門に鳳字を題す」と。

「那箇か是れ自己」と、コ、で何んの自己があるべし、薬があるべし。「自己」とは七面倒、八面倒な。南天棒下語して云く、「板齒、朱砂を嚼む」と。

【釋語】 コレから圓悟の著語ぢや。

「舉雲門示衆云薬病相治」——「一合相不可得、薬病相治すれば、一合相にして不可得ぢや。能所なき處、何方へ見付けても知れぬと。とどかぬ下語ぢや。

「盡大地是薬」——「苦瓠は根に連つて苦し、直下にはれ、乾坤大地一時に露出ぢや。此の下語に就いて白隠が驚かれたことがある。」一邊に擺向す、ソナものは雪隠の檐へても拂ひ退ける。

「那箇是自己」——「甜瓜は蒂に徹して甜し、上の「苦瓠は根に連つて苦し」と云ふと同じぢや、手は付けられぬ。」那裏よりか這の消息を得られる、板齒、朱砂を咬む底の消息は何處から得たぞ。

雲門道薬病相治盡大地是薬那箇是自己諸人還有出身處麼二六時中管取壁立千仞德

山棒如雨點臨濟喝似雷奔則且置釋迦自釋迦彌勒自彌勒未知落處者往往喚作薬病相投會去世尊四十九年三百餘會應機設教皆是應病與薬如將密果換苦葫蘆相似既洵汝諸人業根令灑灑落落盡大地是薬爾向什麼處插背若插得背許爾有轉身吐氣處便親見雲門爾若回顧躊躇管取插背不得雲門在爾脚跟底薬病相治也只是尋常語論爾若著有與爾說無爾若著無與爾說有爾若著不有無與爾去糞掃堆上現丈六金身頭出頭沒只如今盡大地森羅萬象乃至自己一時是薬當恁麼時却喚那箇是自己爾一向喚作薬彌勒佛下生也未夢見雲門在畢竟如何識取鉤頭意莫認定盤星文殊一日令善財去採薬云不是薬者採將來善財徧採無不是薬却來白云無不是薬者文殊云是薬者採將來善財乃拈一枝草度與文殊文殊提起示衆云此薬亦能殺人亦能活人此薬病相治話最難看雲門室中尋常用接人金鷲長老一日訪雪竇他是箇作家乃臨濟下尊宿與雪竇論此薬病相治話一夜至天光方能盡善到這裏學解思量計較總使不著雪竇後有頌送他道薬病相治見最難萬重關鎖太無端金鷲道者來相訪學海波瀾一夜乾雪竇後面頌得最有工夫他意亦在寶亦在主自可見頌云

【和訓】 雲門道く、薬病相治、盡大地是れ薬、那箇か是れ自己と。諸人還つて出身の處有り麼。二六時中、壁立千仞なるこ

とを管取せよ。徳山の棒、雨點の如く、臨濟の喝、雷奔に似たることは則ち且らく置く、釋迦は自ら彌勒、彌勒は自ら彌勒、未だ落處を知らざる者は、往往に喚んで、藥病相ひ投ずるの會を作し去る。世尊四十九年、三百餘會、機に應じて教を説く。皆な是れ病に應じて藥を與ふ、密果を將つて苦葫蘆に換ふるが如くに相ひ似たり。既に汝諸人の業根を洵して、灑灑落落たらしむ。盡大地是れ藥と。彌什麼の處に向つてか、嘴を挿まん。若し嘴を挿得せば、彌に許す、身を轉じ氣を吐く處有つて、便ち親しく雲門を見ることを。彌若し回顧躊躇せば、嘴を挿むこと得ざらんことを管取せよ。雲門、彌が脚跟底に在り。藥病相治、也た只だ是れ尋常の語論。彌若し有に著すれば、彌が與に無と説き、彌若し無に著すれば、彌が與に有と説き、彌若し不有不無に著れば、彌が與に兼攝堆上に去つて、丈六の金身を現じて頭出頭没す。只だ如今、盡大地森羅萬象、乃至自己、一時に是れ藥。恁麼の時に當つて、却つて那箇を喚んでか、是れ自己とせん。彌一向に喚んで藥と作せば、彌勒佛下生にも、也た未だ夢にだも雲門を見ざることを在らん。畢竟如何。鈎頭の意を議取せよ、定盤星を認むること莫れ。文殊、一日善財をして去つて、藥を探らしめて云く、是れ藥ならざる者を探り將ち來れ。善財彌く探るに、是れ藥ならずと云ふこと無し。却り來つて白して云く、是れ藥ならざる者無し。文殊云く、是れ藥なる者を探り將ち來れ。善財乃ち一枝草を拈じて、文殊に度與す。文殊提起して衆に示して云く、此の藥亦た能く人を殺し、亦た能く人を活すと。此の藥病相治の語、最も看難し。雲門、室中等常用て人を接す。金鬘長老、一日雪竇を訪ふ。他は是れ箇の作家、乃ち臨濟下の尊宿。雪竇と此の藥病相治の語を論ず。一夜天光に至つて、方に能く善を盡す。這裏に到つて、學解、思量、計較、總に使不着、雪竇後に須有り、他に送つて道く、藥病相治見ること最も難し、萬重の關鎖太だ端無し、金鬘道者來つて相ひ訪ふ、學海の波瀾一夜に乾くと。雪竇、後面に頌し得て最も工夫有り。他の意、亦た賓に在るか亦た主に在るか、自ら見る可し。頌して云く。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢや。「雲門道く、藥病相治、盡大地是れ藥、那箇か是れ自己と。諸人還つて出身の處有り麼」と、雲門の此の示衆が知りたくば骨を折れ。二六時中、壁立千仞なることを管

取せよ」と、會せなけりや、一切處壁立千仞ぢやが、若し會すれば、自己が元來壁立千仞ぢや。白壁を突き抜いた如く、氣を高く、シャンとしやれ。「徳山の棒、雨點の如く、臨濟の喝、雷奔に似たるとは則ち且らく置く。釋迦は自ら彌勒、彌勒は自ら彌勒、未だ落處を知らざる者は」と、雨點、雷奔の如き峻峻なる處は扱て置きサ、藥病相治の端的は、藥は是れ自ら藥、病は是れ自ら病、柳は綠、花は紅ぢやが、阿字諸法本不生、久遠實成の處を合點しない者は、「往往に喚んで、藥病相ひ投ずるの會を作し去る」と、圓悟、コリヤ天晴の評ぞ。此の語は甚だ風流ぢや。「世尊四十九年、三百餘會、機に應じて教を説く。皆な是れ病に應じて藥を與ふ、密果を將つて苦葫蘆に換ふるが如くに相ひ似たり」と、釋迦が四十九年の説法は何んの爲めぢやと云へばサ、只だ是れ、諸人の無明を斷じて涅槃と爲し、煩惱を菩提に換え、凡を轉じて聖とするに外ならぬ。「既に汝諸人の業根を洵して、灑灑落落たらしむ」と、即ち汝等の妄心を洵汰して、灑灑落落たる田地に達せしむるぢや。「盡大地是れ藥と。彌什麼の處に向つてか嘴を挿まん」と、ソレぢや己が嘴を下さるか、源五兵衛焼餅と。サー少しも違ひはせぬ。若し嘴を挿得せば、彌に許す、身を轉じ氣を吐く處有つて、便ち親しく雲門を見ることを」と、若し嘴を下し得たなら、轉身の處が有つて、雲門と親しく相見するとサ。此の評、外に云ひやうもあらうのに。「彌若し回顧躊躇せば、嘴を挿むこと得ざらんことを管取せよ」と、コノ評は合點が行ぬ。「雲門、彌が脚跟底に在り。藥病相治、也た只だ尋常の語論」と、珍らしくない、尋常に似たと、サ

ウ云ふ譯でないぞ。備若し有に著すれば、備が與に無と説き、備若し無に著すれば、備が與に有と説き」と、コレは「盡大地是れ藥」と云ふ處の評か。此の評は取らぬ。「備若し不有不無に著すれば、備が與に糞掃堆上に去つて、丈六の金身を現して頭出頭没す」と、備が若し不有不無の見に著すれば、備の爲に三毒五欲の中に在つて、丈六の金身を出したり引込めたりと。愈々不可ぬ。「只だ如今、盡大地森羅萬象、乃至自己、一時に是れ藥、恁麼の時に當つて、却つて那箇を喚んでか、是れ自己とせん」と、スツキと違つたぞ。「備一向に喚んで藥と作さば、彌勒佛下生にも、也た未だ夢にだも雲門を見ざることに在らん」と、成程く、上の「釋迦は自ら是れ釋迦」と云ふに届くぞ。「畢竟如何。鈎頭の意を識取せよ、定盤星を認むること莫れ」と、雲門示衆の提起の處を看て取れ、杓子定木では只だ文字のみぢや。「文殊、一日善財をして去つて藥を探らしめて云く、是れ藥ならざる者を探り將ち來れ」と、人々一念發起の善心を善財童子と云ふ。サー文殊が、善財童子に向つて、佛でないもの、即ち實法を取つて來いと云ひ付けた。コノ「不」の字を削るべしと云ふ説は不可ぢや、やはり有つた方が好い。「善財徧く探るに、是れ藥ならずと云ふこと無し。却り來つて白して云く、是れ藥ならざる者無し。文殊云く、是れ藥なる者を探り將ち來れ」と、コノ文殊と善財との問答には、別に云ふべきこともない。「善財乃ち一枝草を拈じて、文殊に度與す」と、ソコデ善財が一枝草を拈じて文殊に度した。「文殊提起して衆に示して云く、此の藥亦た能く人を殺し、亦た能く人を活すと、スルト文殊は

其の一枝草を提起してからに、サー此の藥は能く用ゆれば、人を殺す砒礪狼毒ぢやが、亦た悪用すれば、熊膽よりも能く利くぞと。コリヤ嶮崖に手を撒し、絶後に再び蘇る底ぢや。「此の藥病相治の話、最も看難し。雲門、室中尋常用ひて人を接す」と、是れは圓悟の正筆ぢや。「金鷲長老、一日雪竇を訪ふ。他は是れ箇の作家、乃ち臨濟下の尊宿」と、コノ金鷲長老と云ふは、盧山開先の善暹禪師のことぢや。「大慧武庫」には、「暹道者、久しく雪竇に參ず。竇、擧げて金鷲に住せしめんと欲す。暹、之れを聞き、夜潜かに偈を方丈に書し、即ち遁れ去る。云々」とある。今此の金鷲長老を臨濟下とするは恐らく錯りぢや。善暹は徳山慧遠に嗣ぎ、遠は雙林郁に嗣ぎ、郁は雲門に嗣いだから、即ち善暹は雲門下ぢや。「雪竇と此の藥病相治の話を論ず。一夜天光に到つて、方に能く善を盡す」と、雪竇と此の藥病相治の話を論じ合ふたが、一夜晩方まで論じて、始めて遺憾なく盡すことを得たと、「這裏に到つて、學解、思量、計較、總に使不著」と、極則の處に到つては、學解、思量などは、屁のつツぱりにもならぬ。「雪竇、後に頌有り、他に送つて道く」と、後に雪竇が一頌を作つて金鷲長老に送つた。ソノ頌は如何あらうぞならば、「藥病相治見ること最も難し、萬重の關鎖太だ端無し」と、藥病相治は萬重の關鎖ぢや、知解言詮不及の處、依倚無しで、仕様やうがない。「金鷲道者來つて相ひ訪ふ、學海の波瀾一夜に乾く」と、暹道者の訪ひ來るに逢ふて、辭究り理盡す處まで論じ合ふたと。此の句は季商隱律師と云ふ人の聯句ぢや。「辭林枝葉三春盡き、學海の波瀾一夜に乾く」とある。「雪竇、

後面に頌し得て最も工夫有り。他の意、亦た實に在るか亦た主に在るか、自ら見る可し。頌して云く」と、サト雪竇の頌には許多の工夫があるが、雪竇の意は權りに藥法に在るか、或は實法に在るか、諸人各々自知するが好い。頌を看よ。

盡大地是藥

○教誰辨的 ○撒沙撒土 ○價高處著 古今何太錯 ○言中

有響 ○一筆勾下 ○咄

閉門不造車

○大小雪竇爲衆竭力 ○禍出私門 ○坦蕩

不掛一絲毫 ○阿誰有閑工夫向鬼窟裏作活計

通途自寥廓

○脚下便入草 ○

上馬見路 ○信手拈來 ○不妨奇特

錯錯

○雙劍倚空飛 ○一箭落雙鵝 鼻孔

遼天亦穿却

○頭落也 ○打云穿却了也

【和訓】盡大地是藥。(○誰をしてか的を辨せしめん。○沙を撒し土を撒す。○價高き處に著けよ。古今何んぞ太だ誤る。○言中に響有り。○一筆に勾下す。○咄。) 門を閉ちて車を造らず。(○大小の雪竇、衆の爲に力を竭す。○禍、私門より出づ。○坦蕩として一絲毫を掛けず。○阿誰が閑工夫、鬼窟裏に向つて活計を作す有らん。) 途に通すれば自ら寥廓。(○脚下便ち草に入る。○馬に上つて路を見る。○手に信せて拈じ来る。○妨げず奇特なることを。) 錯錯。(○雙劍、空に倚つて飛ぶ。○一箭、雙鵝を落す。) 鼻孔遼天亦た穿却す。(○頭落ちぬ。○打つて云く、穿却了也。)

【提唱】

圓 コレから雪竇の頌ぢや。

「盡大地是れ藥」と、雪竇、藥病相治の外に、「盡大地是れ藥」とツン出した中に、一句に頌し盡した。コレは許多の拖泥ぞ。併し古今錯つて會する者が多いから。

「古今何んぞ太だ錯る」と、コノ端的は難解難入ぞ、見損ふな。定法と認むるは大錯りぢや。此處を古今の學者、錯つて藥の解を作すぢや。

「門を閉ちて車を造らず」と、コノ句は「文選」の輪篇にある、「吾れ門を閉ちて車を造り、門に出で、轍に合ふ」と云ふから出たのぢや。「車を造らず」とは、修行を用ゐずして間に合せる。造らねども、何處へ持つて行つても間に合ふぞ。此の一句は、衲僧は醍醐の如く吞むぢや。コレと下の二句で、全く本則を形容し得た、圓悟で無ければ下語は行くまい。

「途に通すれば自ら寥廓」と、關振子を透ればクワラリツとして、通る途は何處へ行つても間に合ふ。コレで藥病相治をマン丸に頌した。

「錯錯」と、雪竇、こゝ迄頌して來ると、ハツとして、南無三寶、蹉過ぢやとて、急に錯錯とサ。雲門、雪竇共に錯ぢや。

「鼻孔遼天亦た穿却す」と、悟り切つたと、ナンボ自慢吐いても、此の則に出合ふては鼻を引き廻

されるぞと。コリヤ許さぬ機ぢや、又た雲門の鼻孔遼天を、雪竇が穿却して退けたとも看られる。

【習語】 コレから圓悟の著語ぢや。

「盡大地是藥」——「誰をしてか的を辨ぜしめん、盡大地是れ藥の端的は、誰をして辨ぜしめたるのぢやな。何處も彼も黒屋ぢや。沙を撒し土を撒す、目ツブシを打つた、何んでも目は明かせぬ。價高き處に著よ、無事匣裏に揚在せよ。高上りするな。上れば又た違ふ、下れば又た違ふぞ。福本には價の字を架に作つて、高處に架して著けよ」となつて居る。

「古今何太錯」——「言中に響有り、ドコやら耳にかゝる、聞き悪いぞ。一筆に勾下す、ソナに六ヶ敷のことなら、合點する者はないと點を掛けた。咄、雪竇、漏逗ぢやぞ。」

「閉門不造車」——「大小の雪竇、衆の爲に力を竭す、大小の雪竇、ソロ／＼理を説いて諸人の手を引き掛けるぞ、老婆親切なとぢや。禍、私門より出づ、圓悟の眼から見れば、雪竇、慈悲を垂れて注脚を下したは敗關ぢや。坦蕩として一絲毫を掛けず、禍、私門より出づと云ふて置いて、何故圓悟一絲毫を掛けたぞ。コリヤ雪竇に和して、一場の禍、私門より出づぢや。坦蕩とは、懐を放つて一物をも置かざる底、即ちテツピラぢや。阿誰か閑工夫、鬼窟裏に向つて活計を作す有らん、雪竇、「門を閉ちて車を造らず」と云ふたは、無駄骨を折つて、鬼窟裏の活計を作すものよ。

「通途自寥廓」——「脚下便ち草に入る、グワラリとは行くまい、雪竇落草ぢやぞ。馬に上つて路

を見る、去りながら、衲子が能く見れば、路は分明ぢや。上りか下りか、外へは行かぬ。手に信せて拈じ来る、左でも右でも源に合ふ、少しも違ひはない。妨げず奇特なることを、先づは奇特ぢや。

「錯錯」——「雙劍、空に倚つて飛ぶ、錯錯の處、コリヤ寒しい。空に飛んで没蹤跡ぢや。一箭、雙鵬を落す、錯錯の一箭が、會不會、今時那邊、賓主と、悉く打ち落すぢや。

「鼻孔遼天亦穿却」——「頭落ちぬ、雪竇は頭の落ちるも亦た知らざる人ぢやぞ。打つて云く、穿却了也、圓悟、己も一つと出た。諸人の鼻孔は圓悟に穿却されて仕舞つたぞ、ウツカリするな。

盡大地是藥古今何太錯、倘若喚作藥會、自古自今一時錯了也。雪竇云、有般漢不解、截斷大梅脚、跟只管道、貪程太速、他解截雲門、脚跟爲雲門、這一句惑亂天下人、雲門云、拄杖子是浪許、爾七縱八橫、盡大地是浪看、爾頭出頭沒、閉門不造車、通途自寥廓、雪竇道、爲爾通、一線路、倘若閉門造車、出門合轍、濟箇甚事、我這裏閉門也不造車、出門自然寥廓、他這裏略露些子縫、縛教人見、又連忙却道錯、錯前頭也、錯後頭也、錯誰知、雪竇開一線路、也是錯、既然鼻孔遼天爲什麼也、穿却要會、慶且參三十年、爾有拄杖子、我與爾拄杖子、倘若無拄杖子、不免被人穿却鼻孔。

【和訓】 盡大地是れ藥、古今何んぞ太だ錯ると。備若し喚んで藥の會を作さば、自古自今、一時に錯り了れり。雪竇云く、有る般の漢、大梅の脚跟を截斷することを解せずして、只管道ふ、程を食ること太だ速かなりと。他は雲門の脚跟を截斷することを解す。雲門の這の一句、天下の人を惑亂するが爲めなり。雲門云く、拄杖子是れ浪、備に許す七縱八横。盡大地是れ浪と。看よ備、頭出頭没することを。門を閉ぢて車を造らず、途に通ずれば自ら蒙塵と。雪竇道く、備が爲に一線路を通すと。備若し門を閉ぢて車を造り、門を出でて轍に合せば、箇の甚の事をか濟さん。我が這裏、門を閉ぢて也た車を造らず、門を出づるに自然に蒙塵たり。他、這裏に略些子の繩縛を露して、人をして見せしむ。又た連忙して却つて道ふ、錯錯と。前頭も也た錯、後頭も也た錯。誰れか知る、雪竇一線路を聞く、也た是れ錯なることを。既に然も鼻孔透天、什麼としてか也た穿却する。會せんと要す麼。且らく參せよ三十年。備に拄杖子有らば、我、備に拄杖子を與へん。備若し拄杖子無くんば、免れず人に鼻孔を穿却せらるることを。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢや。「盡大地是れ藥、古今何んぞ太だ錯ると。備若し喚んで藥の會を作さば、自古自今、一時に錯り了れり」と、コリヤ好評ぞ、南天棒も甚だ賞翫ぢや。「雪竇云く、有る般の漢、大梅の脚跟を截斷することを解せずして、只管道ふ、程を食ること太だ速かなりと」、大梅とは、大梅法常禪師ぢや、馬祖の法嗣ぢや。コリヤ、「禪林類聚」を見ると分る。「大梅の常禪師臨終、衆に示して云く、來るを抑ゆ可き莫く、往くを追ふ可き莫しと。從容として鼯鼠(むさび)の鳴聲を聞き、乃ち云く、此の物に即して他物に非らず、汝善く護持せよ。吾當に逝くべしと。雪竇云く、這の漢生前莽鹵、死後瞞頂。此の物に即して他物に非らずと、是れ何物ぞ。還つて分付の處有りや。

有る般の漢、大梅の脚跟を截斷することを解せずして、只管道ふ、程を食ること太だ速かなり」とある。大梅の、「來るも抑ゆ可き莫く、行くも追はず」の語、反吐が出るわい。大抵の者はサ、大梅が死に臨んで急いだから、「此の物に即して他物に非らず」と云ふたなど、大梅の平生受用底を截斷することがならぬ。「他は雲門の脚跟を截斷することを解す、雲門の這の一句、天下の人を惑亂するが爲めなり」と、コレは圓悟の評ぢや。雪竇は、雲門の「盡大地是れ藥」の一句が、天下の人を惑すから、雲門の脚跟を截斷したと。サ、何んと截斷したぞ、「古今何んぞ太だ錯ると、コレでホダ腰を切つた。」雲門云く、拄杖子是れ浪、備に許す七縱八横。盡大地是れ浪と、看よ備が頭出頭没すると」と、此の語は雲門ではなく雪竇ぢや。「雲門錄」には、「擧す。傳大士の云く、禪河浪に隨つて靜かに、定水波を逐ふて清しと。師、拄杖を拈じ、燈籠を指して云く、還つて見る麼。若し見ると言はば是れ破凡夫。若し見ずと云はば一雙の眼の在る有り。備作麼生か會す。良久して復た拄杖を拈して云く、盡大地是れ浪にあらず」と。而して「雪竇後錄」には「上堂、云く禪河浪に隨つて靜かに、定水波を逐ふて清しと。若し拄杖子是れ浪ならば、納僧便ち七縱八横。忽ち乾坤大地是れ浪ならば、便ち扶籬摸壁なることを見ん。且らく道へ、放行するが好き、把住するが好き」とあるから、雪竇の語と見る方が好い。コリヤ雪竇、天下の人を惑亂するではないか。サ、「拄杖子」とは何んぢやナ。本分かサ。拄杖子が浪なりや、七顛八倒の上直しぢや。盡大地が浪なりや、寝たり起きたりぢやと。コリヤ砒礪狼毒

ちやぞ。此處等を打ッ越せ。サテ何んと下語する。鍋の鑄掛、藥鑪の直しとサ。「門を閉ぢて車を造らず、途に通ずれば自ら寥廓と」、雪竇、又たコリヤ人を惑亂するな。「雪竇道く、備が爲に一線路を通ずと。備若し門を閉ぢて車を造り、門を出て轍に合せば、箇の甚の事をか濟さん。我が這裏、門を閉ぢて也た車を造らず、門を出づるに自然に寥廓たり」と、門を閉ぢて車を造らないから、門を出ても自然に寥廓ぢやと。コリヤとどかぬ評ぢや。「他、這裏に略ぼ些子の縫罅を露して、人をして見せしむ」と、此の二句の中に、本則をマン丸に頌した。「又た連忙して却つて道ふ、錯錯と」、慌てて錯錯とサ。「前頭も也た錯、後頭も也た錯」と、「盡大地是れ藥」と云ふも錯ぢや、「門を閉ぢて車を造らず」と云ふも錯ぢや。「誰か知る、雪竇一線路を開く、也た是れ錯なることを」と、サ、今日も又た錯かナ。「既に然も鼻孔遼天、什麼と爲てか也た穿却する。會せんと要す麼。且らく參ぜよ三十年」と、お主、鼻を高くしても、圓悟が鼻面を通すぞ。會せんとするなら、先づザツと三十年も坐り込め。「備に拄杖子有らば、我、備に拄杖子を與へん。備若し拄杖子無くんば、免れず人に鼻孔を穿却せらることを」と、コレは芭蕉山の慧清禪師の上堂の語を引いし來たのぢや。云く、「上堂、拄杖を拈じて衆に示して曰く、備に拄杖子あらば、我、備に拄杖子を與へん。備、拄杖子無くんば、我、備が拄杖子を奪却せんと」。是れ又た金鷄一粒の粟ぢや。コノ拄杖子の話は語路が、「門を閉ぢて車を造らず、途に通ずれば自ら寥廓」と能く似たから、此處に擧揚したものを、「免れず人に鼻孔を穿却せらるる

ことを」と云ふては、三文がものもないぞ。錦に木綿を縫いだやうな、コレで芭蕉の一句子を埋没した。

【註】「忿怒の那吒」 那吒は八臂の惡鬼なり。「同事攝」 菩提薩埵四攝法の一。「三藏法數」卷の十七に云く、「四に同事攝とは、謂く、菩薩法眼を以つて、明らかに衆生の根性を見、其所樂に隨つて即ち形を分つて示現す。其の所作を同らし、其れをして各々利益に活かしむ。是れに因つて親愛の心を生じ、依附して道を愛し、眞理に住することを得、故に同事攝と名く」と。又た「正法眼藏」、四攝法卷に、「同事と云ふは不違なり、自にも不違なり、他にも不違なり。例へば人間の如きは、人間に同ぜるがごとし」と。「三叉路口」 樹木の兩枝又は三枝あるが如く、數條に分る、道路の分岐點たり。即ち對待二邊の迷路の端緒を云ふ。「大慧武庫」に出づ、太陽平侍者に對する語。「門に鳳字を題す」。公案也。「板窗、朱砂を嘔む」。公案也。「善財童子」。「華嚴經」入法界品に出づる菩薩の名。福城長者の子にして、後ち發心して文殊菩薩に隨ふて南方に行き、五十三人の善智識を歴訪せりと云ふ。寺院山門の樓上に、觀音の脇土として、其の左邊に善財童子の像を安置す。「芭蕉山の慧清禪師」 芭蕉和尚は南塔光涌の法嗣なり。「會元」の第九に云く、「鄂州芭蕉山の慧清禪師は新羅國人なり」と。

第八十八則 玄沙接物利生

【玄沙接物利生】

垂示云門庭施設且恁麼破二作三入理深談也須是七穿八穴當機敲點擊碎金鎖玄關據令而行直得掃蹤滅跡且道諳訛在什麼處具頂門

眼者請試學看

【和訓】垂示に云く、門庭の施設、且らく恁麼に二を破して三と作す。入理の深談、也た須らく是れ七穿八穴なるべし。當機の敲點、金鎖玄關を擊碎す。令に據つて行ず、直に得たり、蹤を掃ひ跡を滅することを。且らく道へ、論訛什麼の處にか在る。頂門の眼を具する者、請ふ試に學す、看よ。

【提唱】第八十八則、「玄沙接物利生」と、コノ則是便ち玄沙の三種病、只だ雲門のみ、受用自在なることを明すぢや。

「垂示に云く」と、コノ垂示は、次の八十九則の垂示と入れ違ひになつて居ると云ふ説もあるが、今且らく此の儘に讀んで置かう。「門庭の施設」と、施設とは門前に旗を立て、法席のあることを知らしめるぢや。圓悟がコノ「碧巖集」の評唱の時ぢやつたから、斯う云ふた。サー權化門の接物利生はサ、「且らく恁麼に二を破して三と作す」と、サウでもないけれどもサ、今ま權に一つの物を色々に割り碎いて、彼方此方と取り計らうぞ。生死涅槃、煩惱菩提、コノ二を打ち破つて、不二を三と云ふて聞かすぞ。「入理の深談、也た須らく七穿八穴なるべし」と、又た向上に、眞如本分の法門に入つては、脱洒自在ぢや。「當機の敲點、金鎖玄關を擊碎す」と、師學對揚の場合にはサ、機に應ずる

敲破點破、即ち棒喝を行じて、無相の佛に縛られて居る鎖を断ち切つて、樂にしてやるぢや。「令に據つて行ず」と、朝打三千、暮打八百。コレが禪門の法度ぢや。「直に得たり、蹤を掃ひ跡を滅することを」と、左すれば佛を殺し祖を殺して、蹤跡もない。「且らく道へ、論訛什麼の處にか在る」と、畢竟其の入り組の處は何處か。「頂門の眼を具する者、請ふ試に學す、看よ」と、ソレを知らうとするには、先づ自己の眼を潰して掛れ。サー本則を看よ。

舉玄沙示衆云諸方老宿盡道接物利生 ○隨分開個舖席 ○隨家豐

儉 忽遇三種病人來作麼生接 ○打草只要蛇驚 ○山僧直得目瞪口呆

○管取倒退三千里 患盲者拈鏡豎拂他又不見 ○端的瞎 ○是則接物

利生 ○未必不見在 患聾者語言三昧他又聞 ○端的聾 ○是則接物

利生 ○未必聲在 ○是那箇未聞在 患啞者教伊說又說不得 ○端的啞 ○

是則接物利生 ○未必啞在 ○是那箇未說在 且作麼生接若接此人不得

佛法無靈驗 ○誠哉是言 ○山僧拱手歸降 ○已接了也 ○便打 僧請益雲

門 ○也要諸方共知 ○著 雲門云汝禮拜著 ○風行草偈 ○咄 僧禮

拜起 ○這僧拗折拄杖子也 雲門以拄杖極僧退後門云汝不是

患盲 ○端的睛 ○莫道這僧患盲好 復喚近前來僧近前 ○第二杓惡

水澆 ○觀音來也 ○當時好與一喝 門云汝不是患聾 ○端的聾 ○莫道這僧

患聾好 門乃云還會麼 ○何不與本分草料 ○當時好莫作聲 僧云不

會 ○兩重公案 ○蒼天蒼天 門云汝不是患啞 ○端的啞 ○口吧吧地 ○

莫道這僧啞好 僧於此有省 ○賊過後張弓 ○討什麼碗

【和訓】 舉す。玄沙、衆に示して云く、諸方の老宿、盡く道ふ、接物利生と。(○分に隨つて個の舖席を開く。○家の豐儉に隨ふ。) 忽ち三種病人の來るに遇はば、作麼生か接せん。(○草を打つては只だ蛇の驚くを要す。○山僧直に得たり、目雖し口味するを。○到退三千里なることを管取せよ。) 患盲の者、拈鏡懸拂、他又た見ず。(○端的睛す。○是れ則ち接物利生。○未だ必ずしも見ずんばあらざることあり。) 患聾の者、語言三昧、他又た聞かず。(○端的聾す。○是れ則ち接物利生。○未だ必ずしも聾せざることあり。○是れ那箇か未だ聞かざることあり。) 患啞の者、伊をして説かしむるに、又た説くこと得じ。(○端的啞す。○是れ則ち接物利生。○未だ必ずしも啞せざることあり。○是れ那箇か未だ説かざることあり。)

且つ作麼生か接せん。若し此の人を接することを得ずんば、佛法靈驗無からん。(○誠なる哉是の言。○山僧、手を拱して歸降せん。○已に接し了れり。○便ち打つ。) 僧、雲門に請益す。(○也た諸方共に知らんことを要す。○著。雲門云く、汝禮拜著。(○風行けば草振す。○咄) 僧、禮拜して起つ。(○這の僧、拄杖子を拗折せん。) 雲門、拄杖を以つて拈く。僧、退後す。(○門云く、汝是れ患盲にあらずや。(○端的睛す。○這の僧、患盲と道ふこと莫くんば好し。○復た近前來と喚ぶ。僧、近前す。(○第二杓の惡水澆ぐ。○觀音來也。○當時好し一喝を與ふるに。○門云く、汝是れ患聾にあらずや。(○端的聾す。○這の僧、患聾と道ふこと莫くんば好し。○門乃ち云く、還つて會す麼。(○何んぞ本分の草料を與へざる。○當時好し聲を作すこと莫からんに。○僧云く、不會。(○兩重の公案。○蒼天蒼天。○門云く、汝是れ患啞にあらずや。(○端的啞す。○口吧吧地。○這の僧、啞すと道ふこと莫くんば好し。○僧、此に於て省有り。(○賊過ぎて後ち弓を張る。○什麼の碗をか討ねん。)

【提唱】

本訓 コレから本則ぢや。

「舉す。玄沙、衆に示して云く、諸方の老宿、盡く道ふ、接物利生と」サテ／＼恐しい此の示衆。

此の南天棒も三十年の間、胡乱に會し去つた。今日見來れば、纔かに舉著するを聞いて、思はず寒毛卓豎すぢや。

「忽ち三種病人の來るに遇はば、作麼生か接せん」と、サー天下の老和尚達は、誰れも／＼接物利生と云ふて居るが、コノ三種病人が出て來たら、如何接待するぞと。併し諸人は、先づ最初に此の病人にならねば、隻手の聲は聞えぬぞ。コレから其の三種病人を擧げたのぢや。即ち。

「患旨の者、拈錘豎拂、他又た見ず」と、眼が見えなけりや、拄杖を豎てやうが、拂子を振らうが、何をして見せやうが、トントお構ひなしぢや。否サ、上、諸佛を見ず、下、衆生を見ず、百千の文殊が宗乘を擧揚しても解らぬやうな盲目だらけぢやと。是れ暗裏に文彩を施すぢや。

「患聲の者、語言一味、他又た聞かず」と、コリヤ無生音の端的ぢや。三世の諸佛が、妙法を演説しても聞かぬ。

「患啞の者、伊をして説かしむるに、又た説くこと得じ」と、サー言語道斷、心行所滅の位に入れば、口を開いて舌頭上にあらずぢや。

「且つ作麼生か接せん。若し此の人を接すること得ずんば、佛法靈驗無からん」と、サー此の病人を、如何サクバイしたものでぢや。若しソレが出来なけりや、佛法々と云ふた處が、何んのヘンテツもないと。此の語、天に倚る長劔ぢや。

「僧、雲門に請益す」と、或る坊サマが、此の玄沙の示衆を解し得なかつたので、雲門に請益したものと見える。ソコデ。

「雲門云く、汝禮拜著」と、マア聞き度くば禮拜せいと。牛頭を按じて草を喫せしむるぢや。奇特なる雲門の用處、南天棒も三十年錯つて會したわい。

「僧、禮拜して起つ」と、コノ糞馬鹿め、雲門の云ふ通りに禮拜した。

「雲門、拄杖を以つて拄く。僧、退後す。門云く、汝是れ患旨にあらずや」と、スルト雲門が拄杖を以つて坊サマを拄いた。コリヤ言語で行かぬことぢや。坊サマが不意を喰つて、タヂ／＼と退後する

すると、雲門が、汝、ソレ眼が見えぬではないかと。併し雲門、大分手ヌルイぞ。南天棒なら、此處で此の坊主を一つダヤし付けて、アイタ／＼と泣面を搔くの待つて講釋してやらうものを。

「復た近前來と喚ぶ。僧、近前す」と、雲門が又た、此方へ來いと云ふた。僧が進んで行く。

「門云く、汝是れ患聲にあらずや」と、汝、ソレ耳が開えぬではないかと。

「門乃ち云く、還つて會す麼」と、會つたか如何ぢやと。

「僧云く、不會」と、此の坊主が、此處で黙つたら如何ぢや。

「門云く、汝是れ患啞にあらずや」と、汝、ソレ口が開けぬではないかと。

「僧、此に於て省有り」と、此の坊主、やう／＼會つたかな。併し斯う教へて間に合ふものかサ。

「舉玄沙示衆云諸方老宿盡道接物利生」——「分に隨つて仏の鋪席を開く」、皆なソレ／＼己の器量につれて店を出した、まるで夜店のやうぢや。「家の豊儉に隨ふ」、富んだ者は富んだやうに、貧しい者は貧しいなりにサ。

「忽遇三種病人來作麼生接」——「草を打つては只だ蛇の驚くとを要す」、草に用はない、三種病に

も用はない。只だ三種病に依つて、悟りの釘や楔を抜くぢや。「山僧直に得たり、目瞪し口呿する」とを、大小大の圖悟も、此の示衆に出合ふてはキヨロ／＼する。正階正旨の處、圖悟も説不得ぢや。「倒退三千里なることを管取せよ」、コレには、明眼の衲子も倒退三千里ぢや、近傍することは出来ぬ。

「患盲者拈鏡豎拂他又不見」——「端的瞎す」、明盲、一法を見ずぢや。此處の下語は總て取らぬ。「是れ則ち接物利生」、コレも不是々々。「未だ必らずしも見ずんばあらざることに在り」、常見ではないから、本來自己の面目を一向見ぬてはないと。コレも不可ん。福本には「不見」が「盲」とある。

「患聾者語言三昧他又不聞」——「端的聾す」、耳が、つぶれて居る。「是れ則ち接物利生」、未だ必らずしも聾せざることに在り、「己に耳遠になるてはない」、徹底聾せぬ場がある。「是れ那箇か未だ聞かざることに在り」、又た耳あれども未聞の場があるぞ。

「患啞者教伊説又説不得」——「端的啞す」、終日説いて未だ會つて説かずぢや。コノ三字が大事ぢや。身心脱落、脱落身心すると、此の場がある。「是れ則ち接物利生」、コレで草木國土、悉皆成佛ぢや。「未だ必らずしも啞せざることに在り」、何も啞と決めて仕舞ふには及ばぬぞ。「是れ那箇か未だ説かざることに在り」、エ、何を吐かすか、喋舌らぬ者はないわい。

「且作婬生接若接此人不得佛法無靈驗」——「誠なる哉是の言」、實にハヤ、尤も至極ぢや。「山僧、手を拱して歸降せん」、圖悟も甲を脱いで降参々々。「已に接し了れり」、トツクに救ひ取つて置いた

ぢや。「便ち打つ」、何故打つた、豐坊鐵砲放つた。サー三人ともに許さぬぞ。玄沙も赤面ぢや。

「僧請益雲門」——「也た諸方共に知らんことを要す」、會らなけりや方々へ持ち廻つて歩け。「著雲門に請益するとは、成る程問ひ當てた。

「雲門云汝禮拜著」——「風行けば草堰す」、雲門の威風は、靡かぬ草木もない。「咄」、コリヤ雲門を咄したのぢやが、又た僧をも咄した。下へ掛けて看よ。

「僧禮拜起」——「這の僧、拄杖子を拗折せん」、糞馬鹿め、汝が拄杖子は如何した。何故打ッさらはないのぢや。

「雲門以拄杖柱僧退後門云汝不是患盲」——「端的瞎す」、退後つた處が直に瞎ぢや。「這の僧、患盲と道ふこと莫くんば好し」、去りながら、仔細に看來れば、此の僧は正因を具して居る、瞎ぢやない。

「復喚近前來僧近前」——「第二杓の惡水澆ぐ」、雲門、前には「禮拜著」と云ひ、又た「近前來」と、二度目の泥水を打ち掛けた。「觀音來也」、近前來と云はれて、近前した處を見ると、此奴耳が聞えるな。耳根圓通なりや觀音様ぢや。「當時好し一喝を與ふるに」、雲門、ナカ／＼合點せぬぞ。此の坊主も此處で一つ、雲門をドキ、させやうものを、ウカ／＼と近前したは残り多いぞ。

「門云汝不是患聾」——「端的聾す」、雲門の語を聞いた端的に聾ぢや。「這の僧、患聾と道ふこと莫くんば好し」、去りながら、此の僧、耳が聞えぬと云はれるかナ。

「門乃云還會麼」——「何んぞ本分の草料を與へざる」思ひ切つてドヤせば好いに。「當時好し聲を作すこと莫からん」此の坊サマ、此處で黙つたが勝しぢや。

「僧云不會」——「兩重の公案」あゝ見事なと弄した。「蒼天蒼天」埒は明かぬ、苦々しい。

「門云汝不是患啞」——「端的啞す」不會と云ふた處、正しく啞ぢやと。コリヤ扶けて云ふたぢや。

「口吧吧地」雲門も大分喋舌つた。「この僧、啞すと道ふこと莫くんば好し」啞とはかり云ふな。

「僧於此有省」——「賊過ぎて後ち弓を張る」ヤレ／＼やつと氣が付いたか。「什麼の碗を討ねん」古御器など持ち廻つて何んとせうぞ。

此の則に就いて白隠に一頌有り、云く、「約絲水を絞る謝郎が舟、明眼の衲僧暗に愁を結ぶ。白紙端無し六字を書す、此の僧昨昨日巖頭を自す」と。各々能く味ふてみるが好い。

玄沙參到絶情塵意想、淨裸裸赤灑灑地、處方解恁麼道、是時諸方列刹相望尋常示衆道、諸方老宿盡道接物利生、忽遇三種病人來、時作麼生接、患盲者拈錘豎拂他又不見患聾者語言三昧他又不開患啞者教他說又說不得且作麼生接若接此人不得佛法無靈驗如今人若作盲聾瘖啞會卒摸索不著所以道莫向句中死却須是會他玄沙意始得玄沙常以此語接人有僧久在玄沙處一日上堂僧問和尚云三種病人話還許學人說道理也無玄沙云許

僧便珍重下去沙云不是不是這僧會得他玄沙意後來法眼云我聞地藏和尚舉這僧語方會三種病人話若道這僧不會法眼爲什麼却恁麼道若道他會玄沙爲什麼却道不是不是一日地藏道某甲聞和尚有「三種病人話」是否沙云是藏云「玆琛現有眼耳鼻舌和尚作麼生接玄沙便休去若會得玄沙意豈在言句上」他會底自然殊別後有僧舉似雲門門便會他意云汝禮拜著僧禮拜起門以拄杖拄這僧退後門云汝不是患盲復喚近前來僧近前門云汝不是患聾乃云會麼僧云不會門云汝不是患啞其僧於此有省當時若是箇漢等他道禮拜著便與掀倒禪床豈見有許多葛藤且道雲門與玄沙會處是同一別佗兩人會處都只一般看佗古人出來作千萬種方便意在鈎頭上多少苦口只令諸人各各明此一段事五祖老師云一人說得却不會一人却會說不得二人若來參如何辨得他若辨這兩人不得管取爲人解粘去縛不得在若辨得纔見入門我便著草鞋向爾肚裏走幾遭了也猶自不省討什麼碗出去且莫作「盲聾瘖啞會好若恁麼計較」所以道眼見色如盲等耳聞聲如聾等又道滿眼不視色滿耳不聞聲文殊常觸目觀音塞耳根到這裏眼見如盲相似耳聞如聾相似方能與玄沙意不爭多諸人還識「盲聾瘖啞底漢子」落處麼看取雪竇頌云

【和訓】

玄沙、參じて情塵意想を絶して、淨裸裸赤灑灑地の處に到つて、方に恁麼に道ふことを解す。是の時諸方列刹相ひ望提唱碧巖集 下卷 (第八十八則 玄沙接物利生)

尋常、衆に示して道く、諸方の老宿、盡く道ふ、接物利生と。忽ち三種病人の來るに逢はん時、作麼生か接せん。患盲の者、拈鏡豎拂、他又た見ず。患聾の者、語言三昧、他又た聞かず。患啞の者、他をして説かしむるとも、又た説くこと得じ。且つ作麼生か接せん。若し此の人を接すること得ずんば、佛法靈驗無からんと。如今の人、若し盲聾瘖啞の會を作さば、卒に摸索不著ならん。所以に道ふ、句中に向つて死却すること莫れ。須らく是れ、他の玄沙の意を會して始めて得べし。玄沙常に此の語を以つて人を接す。僧有り、久しく玄沙の處に在り。一日上堂。僧問ふ、和尚云ふ、三種病人の語、還つて學人が道理を説くことを許さんや、也た無や。玄沙云く、許す。僧便ち珍重して下り去る。沙云く、不是不是と。この僧、他の玄沙の意を會得す。後來法眼云く、我れ地藏和尚の、この僧の語を擧するを聞いて、方に三種病人の語を會すと。若しこの僧、不會と道はば、法眼、什麼としてか却つて慳に道はん。若し他、會すと道はば、玄沙、什麼としてか道はん、不是不是と。一日地藏道く、某甲問く、和尚に三種病人の語有り、是なりや否や。沙云く、是。藏云く、瑛瑛現に眼耳鼻舌有り、和尚作麼生か接せん。玄沙便ち休し去る。若し玄沙の意を會得せば、豈に言句上に在らんや。他の會する底、自然に殊別なり。後、僧有り、雲門に舉似す。門便ち他の意を會して云く、汝、禮拜者。僧、禮拜して起つ。門、拄杖を以つて拄く。この僧退後す。門云く、是れ患盲にあらずや。復た近前來と喚ぶ。僧、近前す。門云く、汝、是れ患聾にあらずや。乃ち云く、會す麼。僧云く、不、會。門云く、汝、是れ患啞にあらずやと。其の僧、此に於て省有り。當時若し是れ箇の漢ならば、他の禮拜者と道はんを等つて、便ち與に禪床を撤倒せば、豈に許多の葛藤有ることを見んや。且らく道へ、雲門と玄沙との會處、是れ同か是れ別か。他の兩人の會處、都て只だ一般。看よ、他の古人、出で來つて千萬種の方便を作すことを。意、釣頭上に在り。多少か苦口なる。只だ諸人をして、各各此の一段の事を明めしむ。五祖老師云く、一人は説き得て却つて不會、一人は却つて會して説不得。二人若し來參せば、如何んが他を辨得せん。若しこの兩人を辨すること得ずんば、人の爲に杖を解き、杖を去り得ざること、在らんことを會取せよ。若し辨得せば、纔かに門に入るを見て、我れ便ち草鞋を著けて、爾が肚裏に向つて走ること、幾く遣了れり。猶ほ自ら省せずんば、什麼の碗をか討ねん。出で去れと。且らく、盲聾瘖啞の會を作すこと莫くんば好し。若し慳に計較せば、所以に道ふ、眼、色を見て盲の如く等しく、耳、聲を聞いて聾の如く等しくと。又た道く、滿眼色を視ず、滿耳鼻を聞かず。文

珠常目に觸れ、觀音耳根に塞ると。這裏に到つて、眼見に盲の如くに相ひ似、耳聞いて聾の如くに相ひ似て、方に能く玄沙の意と多きことを争はじ。諸人還つて盲聾瘖啞底の漢子の落處を識る麼。雪竇の頌を看取せよ。云く。

【提唱】 コレから圓悟の評ちや。「玄沙、參じて情塵意想を絶して、淨裸裸赤灑灑地の處に到つて、方に慳慳に道ふとを解す」と。此の示衆はサ、玄沙が親しく參到得し、佛祖の活眼を開いて云ひ出したのちや。「是の時諸方列刹相ひ望む」と。此の當時は諸寺諸山、何れも法幢の盛んなとであつた。「尋常、衆に示して道く、諸方の老宿、盡く道ふ、接物利生と。忽ち三種病人の來るに遇はん時、作麼生か接せん。患盲の者、拈鏡豎拂、他又た見ず。患聾の者、語言三昧、他又た聞かず。患啞の者、他をして説かしむるとも、又た説くこと得じ。且つ作麼生か接せん」と。コリヤ本則にある玄沙の示衆ぢや。眼見れども盲の如く、耳聞けども聾の如き、手に餘つた奴が出て來たならば、如何んが接得するか。「若し此の人を接すること得ずんば、佛法靈驗無からんと」と。若し此の三種病人を接することが出来なけりや、佛法も糞の役に立たぬと。此の語には身の毛も皆な棘立つぞ。「如今の人、若し盲聾瘖啞の會を作さば、卒に摸索不著ならん」と。併し三種病人と云ふても、尋常の盲聾底でも、瘖啞底でもないぞ。「所以に道ふ、句中に向つて死却すること莫れ。須らく是れ、他の玄沙の意を會して始めて得べし」と。玄沙の句中に向つて死却するなど。傍から斯う云ふても死却するぞ。「玄沙常に

此の語を以つて人を接す。僧有り、久しく玄沙の處に在り」と、玄沙は常に此の三種病人の話を以つて人を接得した。スルト一人の久參の坊サマがあつた。「一日上堂。僧問ふ、和尚云ふ、三種病人の話、還つて學人が道理を説くことを許さんや、也た無や」と、或る日の上堂に、坊サマが問ふた。和尚、コナタの云はれる三種病人の話に向つて、學人が道理を説くことを許しめざるか如何ぢやと。天晴々々。此の僧、玄沙の骨髓を呑込み切つて問ふて出た。「玄沙云く、許す」と、玄沙が、何んでも云ふたが好いと云ふと、「僧便ち珍重して下り去る」と、坊サマはズキトコサと出て行つた。愛い奴ぢや、引ッ捕へて穿鑿せよ。「沙云く、不是不是」と、玄沙、口惜しさに云ふたか、サテ〜名將。「這の僧、他の玄沙の意を會得す」と、コナことは云はん方が好い。コノ八字は削つて仕舞へ。「後來法眼云く、我れ地藏和尚の、這の僧の話を擧するを聞いて、方に三種病人の話を會すと」、法眼は正直な人ぢや。此の語も、是は則ち是ぢやがサ、只だ惜むらくは爪牙欠くると在りぢや。コノ地藏和尚の羅漢瑤琛は玄沙の法嗣で、法眼の師ぢや。「若し這の僧、不會と道はば、法眼、什麼と爲てか却つて慳慳に道はん。若し他、會すと道はば、玄沙、什麼と爲てか却つて道はん、不是下是と」、サ、若し此の僧が會せなかつたとすれば、法眼は何故斯のやうに云ふたぞ。又た僧が會したとすれば、何故玄沙は、不是不是と云ふたぞと。法眼はドウもぬるい人ぢや、玄沙の「不是不是」には奇體なことがあるサ。「一日地藏道く、某甲聞く、和尚に三種病人の話有り」と、是なりや否や、沙云く、是」と、コ

は三種病人に就いて、玄沙と地藏との問答ぢや。「藏云く、瑤琛現に眼耳鼻舌有り、和尚作麼生か接せん」と、地藏が、某甲は三種病人では御座らぬ、現に眼も耳も鼻も舌もある。斯のやうな者と、和尚は如何して接得せられるぞと。サテ〜好箇奇特の一句、膽冷を股戰く。大抵な骨折りて出る語ではない。コレで玄沙の手を扭ぢ上げた。兩人は眼と眼と見合せたらう。「玄沙便ち休し去る」と、スマヌ奴な、無病な人ぢやから休したのか、休して何とせう。「若し玄沙の意を會得せば、豈に言句上に在らんや」と、又か錯つて注脚を下したぞ、到らぬ講釋ぢや。「他の會する底、自然に殊別なり」と、地藏の會得底は見事ぢや。「後、僧有り、雲門に舉似す。門便ち他の意を會して云く、汝、禮拜著。僧、禮拜して起つ。門、拄杖を以て怪く。這の僧退後す。門云く、是れ患盲にあらずや。復た近前來と喚ぶ。僧、近前す。門云く、汝是れ患聾にあらずや。乃ち云く、會す麼。僧云く、不會。門云く、汝是れ患啞にあらずやと。其の僧、此に於て省有り」と、コリヤ本則で云ふたから、今ま茲では別に云ふこともない。併し此の坊主、「省有り」と云ふが、コリヤ心元ないぞ。「當時若し是れ箇の漢ならば、他の禮拜著と道はんを等つて、便ち與に禪床を掀倒せば、豈に許多の葛藤有るこを見んや」と、其の時一働き出来る奴だつたら、雲門が禮拜著と云ふと共に、禪床を引ツくり返へば、七川倒なことは起るまいにサ。「且らく道へ、雲門と玄沙との會處、是れ同か是れ別か。佗の兩人の會處、都べて只だ一般」と、寧ろ玄沙底は行け様とも、争てか雲門底に徹するを得んや。茲は都べて別ぢやと書い

た方が好い。「看よ、佗の古人、出て來つて千萬種の方便を作すことを。意、鈞頭上に在り。多少か苦口なる。只だ諸人をして、各各此の一段の事を明めしむ」と、古人が方便の爲に種々様々の言句を吐くも、其の真意は言中にあるのではない。叮嚀親切を極むるも、只だ諸人をして、向上の一大事を明らかにせんが爲めぢや。「五祖老師云く、一人は説き得て却つて不會、一人は却つて會して説不得。二人若し來參せば、如何んが他を辨得せん」と、此の語は最も毒ぢや。若し三種病を見徹せば、即ち此の語の尊ぶ可きを知らうぞ。五祖は玄沙と眼一般ぢや。サー一人は喋舌るが不會、一人は會しても説不得ぢや。コノ縑素を如何辨ずるか。「若し這の兩人を辨ずること得ずんば、人の爲に粘を解き縛を去り得ざること不在らんことを管取せよ」と、コレが辨ぜられなきや、爲人度生も絲瓜の皮ぢや。「若し辨得せば、纒かに門に入るを見て、我れ便ち草鞋を著けて、爾が肚裏に向つて走ること、幾く遭し了れり」と、サー若し辨得したら、學人が門に入るや否や、己が糞草鞋を穿いてからに、お主の腹の中で饒鋒立をしてみせうと。コリヤ兩重の公案ぢや。「猶ほ自ら省せずんば、什麼の碗をか討ねん。出て去れと、自己を省ぬやうな埒無しなら、用はオいから出て失せろと。コレ迄が五祖の語ぢや。「且らく、盲聾瘖啞の會を作すこと莫くんば好し。若し恁麼に計較せば」と、此の「若恁麼計較」の五字は福本にはない、削るが好い。又た此の已下、「與玄沙意不爭多」に至るまでの六十字を取らぬ。共に削るべし。「所以に道ふ、眼、色を見て盲の如く等しく、耳、聲を聞いて聾の如く等しく」と、

コレは「維摩經」の弟子品の句ぢや。コノ評で本則を濟さんとせば、月に籠ぢやぞ。「又た道く、滿眼色を視ず、滿耳聲を聞かず、文殊常に目に觸れ、觀音耳根に塞ると」、コリヤ長沙景岑の「六根清淨」の跋ぢや。コノ文殊、觀音と、是れこそ眞箇の見聞ぞ。是れ又た容易の看を作すな。「華嚴經」に、「文殊を以つて眼門と爲し、觀音を耳門と爲す」とある。「這裏に到つて、眼見て盲の如くに相ひ似、耳聞いて聾の如くに相ひ似て、方に能く玄沙の意と多きことを争はじ」と、コレは手前のホテツ腹に在る。鴉のガア／＼雀のチウ／＼、犬のワン／＼猫のニャア／＼も、玄沙の意と大きな違ひはないと。コレまでが不可ぬ。「諸人還つて盲聾瘖啞底の漢子の落處を識る麼。雪竇の頰を看取せよ。云く」と、サー此の盲聾瘖啞の落處は如何ぢや。雪竇の頰を看よ。「漢子」の二字も削つた方が好い。

盲聾瘖啞

○已在言前○三竅俱明○已做一段了也

杳絕機宜

○向什麼

處摸索○還做計較得麼○有什麼交涉

天上天下

○正理自由○我也恁麼

堪

笑堪悲

○笑箇什麼悲箇什麼○半明半暗

離婁不辨正色

○瞎漢○巧匠

不留蹤○端的瞎

師曠豈識玄絲

○聲漢○大功不立賞○端的聾

爭如獨

坐虛牕下

○須是恁麼始得○莫向鬼窟裏作活計○一時打破漆桶

葉落花

開自有時 ○即今什麼時節 ○切不得作無事會 ○今日也從朝至暮明日也從朝至暮
 復云還會也無 ○重說偈言 無孔鐵鎚 ○自領出去 ○可惜放過 ○
 便打

【和訓】 盲聾瘖啞。(○已に言前に在り。○三蒙俱に明かなり。○已に一段と做し了れり。) 杳として機宜を絶す。(○什麼の處に向つてか摸索せん。○選つて計較を做し得ん麼。○什麼の交渉か有らん。) 天上天下。(○正理自由。○我も也た怎麼。) 笑ふに堪へたり悲しむに堪へたり。(○箇の什麼をか笑ひ、箇の什麼をか悲しむ。○半明半暗。○離妻正色を辨ぜず。○瞎漢。○巧匠、眼を留めず。○端的時す。師曠豈に玄絲を識らんや。○舞漢。○大功、賞を立せず。○端的舞す。争でか如かん虚臆の下に獨坐して。(○須らく是れ怎麼にして始めて得べし。○鬼窟裏に向つて活計を作すこと莫れ。○一時に漆桶を打破す。○葉落ち花開く自ら時有り。○即今什麼の時節ぞ。○切に無事の會を作すことを得され。○今日も也た朝從り暮に至り、明日も也た朝從り暮に至る。) 復た云く、選つて會すや也た無や。(○重說偈言。○無孔の鐵鎚。○自領出去。○惜しむ可し放過することを。○便ち打つ。)

【提唱】

圓 コレから雪賢の頌ぢや、

「盲聾瘖啞」と、本則を一句に提げた。實參實究してみりや、外に示衆はないぞ。

「杳として機宜を絶す」と、了簡分別は届かぬ。

「天上天下」と、云ふこともなくて、天上天下とは、イヤハヤ。有り難いと云はうか、啼いて好からうか。雪賢も讚嘆及ばずぢや。

「笑ふに堪へたり悲しむに堪へたり」と、此處を識得して見たれば耐らぬぞ。可笑しいとも悲しいとも、如何も斯うも述べられるものでない。

「離妻正色を辨ぜず」と、此處に至つては、目が届かぬ。百歩の外能く秋毫の未をも見る離妻でもサ、能う見分け得ぬぞ。

「師曠豈に玄絲を識らんや」と、此の處、ナカ／＼師曠も、玄絲の微妙な調は知らぬ。師曠は山を隔て、蟻の鬨を聞くと云ふ人ぢや。此の離妻と師曠と二人のことは評の中にある。

「争でか如かん虚臆の下に獨坐して」と、イヤハヤ呆れ果てたものぢや。何故争でか如かんぢや。虚臆の下に獨坐するのがサ。左様／＼。南天棒云く、コレと下の句との二句は、塗毒鼓のやうぢや、喪身失命するな。コリヤ又た親不知、子不知ぢや、恐しい。手前で手前を知らぬ。

「葉落ち花開く自ら時有り」と、或時は葉落ち、或時は花開く。三種病と首ツ引の語ぢや。佛祖も亦た喪身失命ぞ。

「復た云く、選つて會すや也た無や」と、上の境界、餘り心元ないから、人の錯つて句中の旨を會

せんことを恐れて、雪竇が大衆へ一拶を與へたのぢや。

「無孔の鐵鏈」と、コリヤ雪竇の一本鎗、南天棒も四十年と云ふもの、此の句に推し倒れた。無孔の鐵鏈ぢや役に立つものではない、スツトの皮ぢや。

「言聲瘖啞」コレから圓悟の著語ぢや。此の著語も總に不可、取らぬが勝しぢや。

「已に言前に在り」云はぬ以前に知れたと。届かぬ。三竅俱に明かなり、眼耳口の三竅、雪竇の云ふ迄もない、一竅明かなれば三竅共に明かぢや。「已に一段と做し了れり」一段三竅、三竅一段、きたない。一段とは一句と云ふ程のことぢや。コノ下語も届かぬぞ。

「杳絶機宜」「什麼の處に向つてか摸索せん」、機宜を絶した人ぢや程に、取り付く島はない。「還つて計較を做し得てん麼」妄想かはいて間に合ふものか。「什麼の交渉か有らん」、何んの掛合があらうぞい。

「天上天下」「正理自由」、本具の大理は自由ぢやと。コレも取らぬが好い。「我も也た恁麼」、圓悟も外に云ふことはなくて、仕方なしに其の通りと出たぢや。

「堪笑堪悲」「箇の什麼をか笑ひ、箇の什麼をか悲しむ」、元來言聲瘖啞ぢやないか、何處に笑ふ可きことがある、何處に悲しむ可きことがある。「半明半暗」、笑ふと悲しむとに掛けて云ふたが、明暗双々と見ては届かぬ。

「離婁不辨正色」「瞎漢」、正色を辨せなけりや瞎漢ぢや。「巧匠、蹤を留めず」、細工上手は蹤跡を絶するから、小刀目が見えぬ。「端的瞎す」、見えぬからこそ好い、サウなければならぬ。

「師曠豈識玄絲」「響漢」、コレは又た響漢ぢや。「大功、賞を立せず」、眞實に修行し果せば、師の世話にも、佛祖の世話にも預らぬ。大功不幸ぢや。「立せず」とは隣知らずぢや。師賞などは有功用ぢや。「端的響す」、眞響が顯はれたぞ。

「爭如獨坐虛牕下」「須らく是れ恁麼にして始めて得べし」、コノ下語は大違ひぢや、取る可からず。「鬼窟裏に向つて活計を作すこと莫れ」、ソノやうな無相平等ではいかぬ。「一時に漆桶を打破す」、洒落の境界ぢや、打破の分ではいかぬぞ。

「葉落花開自有時」「即今什麼の時節ぞ」、佛ぢやか祖師ぢやか、何の時節ぢや。「切に無事の會を作すことを得され」、併し有事の無事のと、ソナ沙汰ではない。「今日も也た朝従り暮に至り、明日も也た朝従り暮に至る」、「自ら時有り」と云ふから、ソナことを云ふたのか。不可々々。

「復云還會也無」「重説偈言」、ヒチくどい。落草ぢや。「無孔鐵鏈」「自領出去」、ソリヤも主の手前のことよ。「惜しむ可し放過することを」、「便ち打つ」、雪竇、大切なことまで云ふて仕舞ふたナ。

盲聾瘖啞杏絶機宜盡爾見與不見聞與不聞說與不說雪竇一時與爾掃却了也直得盲聾瘖啞見解機宜計較一時杏絶總用不著這箇向上事可謂真盲真聾真啞無機無宜天上天下堪笑堪悲雪竇一手擡一手搦且道笑箇什麼悲箇什麼堪笑是啞却不啞是聾却不聾堪悲明明不盲却不明明不聾却不聾離妻不辨正色不能辨青黃赤白正是瞎離妻黃帝時人百步外能見秋毫之末其目甚明黃帝游於赤水沈珠令離朱尋之不見令契詬尋之亦不得後令象罔尋之方獲之故云象罔到時光燦爛離妻行處浪滔天這箇高處一著直是離妻之目亦辨他正色不得師曠豈識玄絲周時絳州晉景公之子師曠字子野一云晉平公之樂太師也善別五音六律隔山聞蟻鬪時晉與楚爭霸師曠唯鼓琴撥動風絃知戰楚必無功雖然如是雪竇道他尙未識玄絲在不聾却是聾底人這箇高處玄音直是師曠亦識不得雪竇道我亦不作離妻亦不作師曠爭如獨坐虛臆下葉落花開自有時若到此境界雖然見似不見聞似不聞說似不說飢即喫飯困即打眠任佗葉落花開葉落時是秋花開時是春各各自有時節雪竇與爾一時掃蕩了也又放一線道云還會也無雪竇力盡神疲只道得箇無孔鐵鎚這一句急著眼見方見擬議又蹉過師舉拂子云還見麼遂敲禪床一下云還聞麼下禪床云還說得麼

【和訓】 盲聾瘖啞、杏として機宜を絶すと。爾が見と不見と、聞と不聞と、説と不説とを盡して、雪竇、一時に爾が與に掃却し了れり。直に得たり、盲聾瘖啞の見解、機宜計較、一時に杏として絶して、總に用不着なることを。這箇向上の事、謂つ可し、真盲真聾真啞、機無く宜無しと、天上天下、笑ふに堪へたり悲しむに堪へたりと、雪竇、一手擡一手搦。且らく道へ、箇の什麼をか笑ひ、箇の什麼をか悲しむ。笑ふに堪へたり、是れ啞却つて不聾、是れ聾却つて不聾。悲しむに堪へたり、明明として不盲却つて盲、明明として不聾却つて聾。離妻正色を辨せずと。青黃赤白を辨するに能はず、正に是れ瞎。離妻は黃帝の時の人なり、百歩の外に、能く秋毫の末を見る、其の目甚だ明かなり。黃帝、赤水に遊んで珠を沈む。離朱をして之れを尋ねしむるに見ず、契詬をして之れを尋ねしむるに亦た得ず。後に象罔をして之れを尋ねしめて、方に之れを獲たり。故に云く、象罔到る時光燦爛、離妻行く處浪滔天と。這箇高處の一著、直に是れ離妻が目も、亦た他の正色を辨すること得じ。師曠豈に玄絲を識らんやと。周の時、絳州の晉の景公の子なり。師曠字は子野。(一)に云く、晉の平公の樂太師なりと。(二)善く五音六律を別つ。山を隔てて蟻の鬪を聞く。時に晉、楚と覇を争ふ。師曠、唯だ琴を鼓して、風絃を撥動して、戰、楚の必らず功無からんことを知る。然も是くの如くなりとも難し。雪竇道く、他尙は未だ玄絲を識らざることありと。不聾却つて是れ聾底の人、這箇高處の玄音、直に是れ師曠も亦た識ること得じ。雪竇道く、我も亦た離妻と作らず、亦た師曠と作らず、争でか如かん虚臆の下に獨坐して、葉落ち花開く自ら時有らんにはと。若し此の境界に到らば、然も見ると雖も見ざるに似、聞くと聞かざるに似、説くとも説かざるに似ん。飢ゆれば即ち喫飯し、困ずれば即ち打眠す。任佗あれ葉落ち花開くことを。葉落つる時は是れ秋、花開く時は是れ春、各各自ら時節有り。雪竇、爾が與に一時に掃蕩し了れり。又た一線道を放つて云く、還つて會すや也た無やと。雪竇、力盡き神疲れて、只だ、箇の無孔の鐵鎚と道ひ得たり。箇の一句、急に眼を著けて見ば、方に見ん。擬議せば又た蹉過せん。師、拂子を舉げて云く、還つて見る麼。遂に禪床を敲くこと一下して云く、還つて聞く麼。禪床を下つて云く、還つて説得す麼。

【提唱】 コレから圓悟の評ちやが、コノ評は本則の意にも、頌意にも徹して居らぬ。今ま全體の中

から百四十字を削つて之れを用ゐることとする。「盲聾瘖啞」と、コノ四字に一則を擧げた。「杳とし
て機宜を絶すと」假令上根機の者でも届かぬ、文殊普賢も倒退三千ぢや。「爾が見と不見と、聞と不
聞と、説と不説とを盡して」と、コノ十四字は削る方が好い。「雪竇、一時に爾が與に掃却し了れり。直
に得たり、盲聾瘖啞の見解、機宜計較、一時に杳として絶して、總に用不着なること」と、サー機宜
を絶すりや、腰にブラ下げたり、懐中へ入れるやうな厄介なものは一つもないぢや。コ、で「見解」
の二字は削つた方が好い。「這箇向上の事、謂つ可し」と、此の本則の如きは、些子向上の事ぢやも
のを、「眞盲眞聾眞啞、機無く宜無し」と、度す可き衆生も無い、説く可き法も無いと。斯くの如く
評しては、向上の些子を失ふ、本則は三文がものもない。コノ十字は削る可し。見ても見られでも
無いを眞盲と云ふ。「天上天下、笑ふに堪へたり、悲しむに堪へたり」と、機宜無き處に至つては、天
上天下、第二日ない境界なる故、笑ふに堪へたり悲しむに堪へたりぢや。「雪竇、一手擡一手搦。且
らく道へ、箇の什麼をか笑ひ、箇の什麼をか悲しむ」と、サー何が笑ふに堪へたりぢや、何が悲しむ
に堪へたりぢや。「笑ふに堪へたり、是れ啞却つて不聾、是れ聾却つて不聾。悲しむに堪へたり、明
明として不盲却つて盲、明明として不聾却つて聾」と、コノ二十六字も削つた方が好い。サー無處か
ら説き出す故に、平等大慧から差別を具するぢや。眞如の月も明々ぢやけれ共、顛倒するから具し
ながら暗い。「離婁正色を辨ぜず」と、コノ次の「青黃赤白を辨ずること能はず、正に是れ瞎」と、コノ

十字も入らぬ、削る可しぢや。「離婁は黃帝時代の人なり、百歩の外に、能く秋毫の末を見る、其の目
甚だ明かなり」と、コノ離婁は黃帝時代の人ぢや。百歩の先に、ドンナ微細なものでも見分けた位に
其の目は明かであつた。「黃帝、赤水に遊んで珠を沈む。離婁をして之れを尋ねしむるに見ず、契詔
をして之れを尋ねしむるに得ず、後に象罔をして之れを尋ねしめて、方に之れを獲たり」と、黃帝が
一日赤壁に遊んで、誤つて珠を沈めたが、離婁(コレは明を意味するぢや)も見出し得なかつた、又
た契詔(コレは言辯を意味するぢや)も尋ね得なかつた、併し象罔(コレは無心を意味するぢや)は尋
ね當てたと。コレは「莊子」の天地篇にある。「故に云く、象罔到る時光燦爛、離婁行く處浪滔天と」、
コリヤ風穴の語ぢや。無心の時、自己の玉は燦然たる光を放つが、利根過ぎると光は隠れる。「這箇
向上の一著、直に是れ離婁が目も、亦た他の正色を辨ずること得じ」と、這裏に到つては、離婁が目
も、目前照々たる正色を辨ずることは出来ぬぞ。「師曠豈に玄絲を識らんやと。周の時、絳州の晉の
景公の子なり」と、コレから又た師曠の因縁話しぢや。晉の都は元と絳州ぢやから、「絳州の晉」と云
ふ。又た景公の子と云ふは臣の誤りぢや。「師曠字は子野、一に云く、晉の平公の樂太師なりと。」善
く五音六律を別つ、山を隔てて蟻の鬪を聞く」と、此の師曠は甚だ耳の鋭い人であつたから、山を隔
て、居つても、蟻の鬪ふのを聞いたと云ふことぢや。「時に晉、楚と覇を争ふ。師曠、唯だ琴を鼓
して、風絃を撥動して、戰、楚の必らず功無からんことを知る」と、襄公の十八年、晉と楚とが互に

戰つた時、師曠は唯だ琴を弾じて居ながら、楚が必らず敗北することを知つたと。「左傳」に云ふのに、「師曠曰く、吾れ驟かに北風を歌ひ、又た南風を歌ふ。南風競はず死聲多し、楚必らず功無からん」と。楚は南にあつた。然も是くの如くなりとも雖も、雪竇道く、他尙ほ玄絲を識らざると在り」と、コノ師曠ですら、微妙なる玄絲は知らぬ。「不聲却つて是れ豊底の人」と、コノ七字も無い方が好い。削ることく。「這箇向上の玄音、直に是れ師曠も亦た識ること得じ」と、向上の大事は、少しでも利根發明が出ると見えぬぞ。「雪竇道く、我も亦た離婁と作らず、亦た師曠と作らず」と、雪竇がサ、離婁もいやぢや、師曠もいやぢやと。「争てか如かん虚牕の下に獨坐して、葉落ち花開く自ら時有らんには」と、此の句には別に評す可き仔細がある。コリヤ難透難解を透過した後のことぢや。何んぞ止だ此處に及ばうや。「若し此の境界に到らば、然も見ると雖も見ざるに似、聞くと聞かざるに似、説くとも説かざるに似ん。飢ゆれば即ち喫飯し、困ずれば即ち打眠す。任佗あれ葉落ち花開くことを。葉落つる時は是れ秋、花開く時は是れ春。各各自ら時節有り」と、已下の評は都べて取らぬ、コノ四十九字は削る可しく。可厭ぢやナ、是れこそ衲が昔の見解ぢや、不是々々。「雪竇、爾が與に一時に掃蕩し了れり」と、掃さちぎつた場とは是れも可厭ぢや。「又た一線道を放つて云く、還つて會すや也た無やと。雪竇、力盡き神疲れて、只だ、箇の無孔の鐵鎚と道ひ得たり」と、末後の一句は雪竇千鈞の弩弓ぢやものを、「力盡き神疲れて」とは何んぢや。是ではマルデ雪竇の眞意を會して居らん。

コノ四字も削れ。「這の一句、急に眼を著けて看ば、方に見ん。若し擬議せば又た蹉過せん」と、「無孔の鐵鎚」の一句には、天下の人も撼不得ぢや。「師、拂子を擧して云く、還つて見る麼」と、コリヤ圓悟が玄沙、雪竇に代つて、三種病人を接して見せた處ぢや。「遂に禪床を敲くこと一下して云く、還つて聞く麼。禪床を下つて云く、還つて説得す麼」と、コレも不可ぬ、削つて仕舞へく。

圓悟「無生音」音ありても耳に入らず、恰も音無きか如き境地を云ふ。「離婁」「莊子」には、離婁を離婁に作る。

第八十九則

雲巖問道吾手眼

【雲巖問道吾手眼】

垂示云通身是眼見不到通身是耳聞不及通身是口說不著通身是心鑒不出通身即且止忽若無眼作麼生見無耳作麼生聞無口作麼生說無心作麼生鑒若向箇裏撥轉得一線道便與古佛同參參則且止且道參箇什麼人

【和訓】垂示に云く、通身是れ眼、見不到。通身是れ耳、聞不及。通身是れ心、説不出。通身は即ち且らく止く、忽ち若し眼無くんば作麼生か見ん、耳無くんば作麼生か聞かん、口無くんば作麼生か説かん、心無くんば作麼生か鑒せん。若し箇裏に向つて、一線道を撥轉し得ば、便ち古佛と同參。參は則ち且らく止く、且らく道へ。箇の什麼人にか參ぜん。

【提唱】第八十九則、「雲巖問道吾手眼」と、コノ則是サ、大悲の手眼、別に參到す可きことを明すのぢや。

「垂示に云く、通身是れ眼、見不到」と、通身是れ眼なるも、見届けられぬことがある。離婁の如きも正色を辨ぜずぢや。滿眼元と色に非らずで、眼で一杯見て無い。三世十方、目一つぢやが、見るともないぞ。「通身是れ耳、聞不及」と、山河大地皆な我が耳ぢやが、此處に至つては師曠の如きも、亦た聞き分け得ぬ。滿耳元と聲に非らず、耳に一杯聞いて聞いた沙汰はない。「通身是れ口、説不著」と、富婁那の如き辯舌でも、こればかりは説き得ぬ。「通心是れ心、鑒不出」と、頭の素天邊から足の爪先まで心鏡があつても、映し出して見ることはならぬ。何んと爲て見やうはないがサ。「通身は即ち且らく止く」と、圓悟、第二義門に下つての爲人ぢや。「忽ち若し眼無くんば作麼生か見ん、耳無くんば作麼生か聞かん、口無くんば作麼生か説かん、心無くんば作麼生か鑒せん」と、無眼無耳、是れ眞の見聞ぞ。無口が即ち眞の説ぢや。無心にして始めて映し出すことが出来る。「若し箇裏

に向つて、一線道を撥轉し得ば、便ち古佛と同參」と、隻手の聲を聞いたならば、ヤレ／＼ナアと合點するぢや。サ一さうあらうぞならば、眼耳口心なき處に向つて、撥轉し得て自由自在ぢや。三世の諸佛とも手を把つて共に行き、同一眼に見、同一耳に聞くぞ。參は則ち且らく止く。且らく道へ、箇の什麼人にか參ぜん」と、ソノ同參底は扱て置いて、先づ誰れに參じたら好からうぞ、それには次の本則を看よと。前に云ふたやうに、コノ垂示は、八十八則のと入れ違ひぢやと云ふ説もある。

舉雲巖問道吾大悲菩薩用許多手眼作什麼 ○當時好與本分草

料○備尋常走上走下作什麼○閑黎問作什麼 吾云如人夜半背手摸枕

子 ○何不用本分草料○一盲引衆盲 巖云我會也 ○將錯就錯○賺殺一船

人○同坑無異土○未免傷鋒犯手 吾云汝作麼生會 ○何勞更問○也要問過

○好與一撈 巖云徧身是手眼 ○有什麼交涉○鬼窟裏作活計○泥裏洗土塊

吾云道即太煞道只道得八成 ○同坑無異土○奴見婢慙慙○癩兒牽伴

巖云師兄作麼生 ○取入處分爭得○也好與一撈 吾云通身是手眼

○蝦跳不出斗 ○換却偏眼睛移却舌頭 ○還得十成也未 ○喚爹作爺

【和訓】 擧す。雲巖 道吾に問ふ、大悲菩薩、許多の手眼を用ひて什麼か作さん。(○當時好し本分の草料を與ふるに。○備尋常走上下、什麼をか作す。○關黎問ふて什麼をか作さん。) 吾云く、人の夜半に、背手にして枕子を摸するが如し。(○何んぞ本分の草料を用ひざる。○一言、衆首を引く。) 巖云く、我れ會せり。(○錯を將つて錯に就く。○一船の人を賺殺す。○同坑に異土無し。○未だ免れず鋒を傷り手を犯すことを。吾云く、汝作麼生か會す。(○何んぞ更に問ふとを勞せん。○也た問過せんことを要す。○好し一抄を與ふるに。巖云く、偏身是れ手眼。(○什麼の交渉か有らん。○鬼窟裏に活計を作す。○泥裏に土地を洗ふ。) 吾云く、道ふことは即ち太煞だ道ふ、只だ八成を道ひ得たり。(○同坑に異土無し。○奴は婢を見て感觀。○癩兒、伴を牽く。) 巖云く、師兄作麼生。(○人の處分を取らば争でか得ん。○也た好し一抄を與ふるに。) 吾云く、通身是れ手眼。(○蝦跳れども斗を出でず。○偏が眼睛を換却し、舌頭を移却す。○還つて十成なることを得るや也た未しや。○爹を喚んで爺と成す。)

【提唱】

本則 コレから本則ぢや。

「擧す。雲巖、道吾に問ふ、大悲菩薩、許多の手眼を用ひて什麼か作さん」と、大慈大悲の觀世音菩薩は、千手千眼を具して居つて、何をするのぢやと。雲巖は曇晟禪師と云ひ、又た道吾は、宗智禪師と云ひ、共に藥山の法嗣ぢや。

「吾云く、人の夜半に、背手にして枕子を摸するが如し」と、スルト道吾は、水を掬へば月は手に在りサ。夜夢中で枕を探して取るやうなものぢや、通身手眼ぢやからと。道吾、此の語は意到つて句到らず、サテ〜ぬるい答話ぞ、合頭ぢや。南天棒なら、鑿鐵砲放つたと云ふべい。

「巖云く、我れ會せり」と、雲巖が、あゝ合點しましたと。是れ深坑に没溺すぢや。

「吾云く、汝作麼生か會す」と、ソレなら、如何合點したのぢや。

「巖云く、偏身是れ手眼」と、サテ〜身體中が眼で御座ると。コレぢやまてる化け物ぢや、昔でもコンナ見世物は無かつたぞ。

「吾云く、道ふことは即ち太煞だ道ふ、只だ八成を道ひ得たり」と、口前は好いが、ソレぢや未だトツクとしないと。「不二抄」に云ふのに、「成」は畢ぢや、樂を奏して小終するを一成と云ふ。故に

八成は不十成で、不十分のことぢや。

「巖云く、師兄作麼生」と、コナタの見解は如何で御座る。

「吾云く、通身是れ手眼」と、瀬戸も街道も眼ぢやとは如何ぢや。手臂は外に向つて曲らずぢや。

通身と云ひ、偏身と云ひ、玆に些子の譯があるぞ。

習語 コレから圓悟の著語ぢや。

「擧雲巖問道吾大悲菩薩用許多手眼作什麼」——「當時好し本分の草料を與ふるに」、コンナこと

を問ふ雲巖なら、三十棒を喫はせば好いに。「爾尋常走上走下、什麼をか作す」、人々具足ぢやから、此の通り常足でも用は足りる。寝たり起きたり、是れ千手か是れ千眼か。閻黎問ふて什麼をか作さん、何も珍らしげに問ふには足らぬ。

「吾云如人夜半背手摸枕头」——「何んぞ本分の草料を用ひざる」、茲は如何しても打ちノメさなければならぬ處ぢや、道吾脱かつたぞ。「一盲、衆盲を引く」、何方も盲目ぢや。

「巖云我會也」——「錯を將つて錯に就く」、道吾が、「人の夜半に、背手にして枕子を摸するが如し」と云へば、雲巖は「我れ會せり」と、コリヤ雲巖が錯を將つて、道吾の錯に就いたのぢや。一犬虚を吠へて萬犬實を傳ふか。「一船の人を賺殺す」、元來、會も不會もないのに、會と云ふたのは乗合を賺したやうなものぢやと、「會」と云ふを奪つた。「同坑に異土無し」、雲巖も道吾も、同じやうに三十棒ぢや。「未だ免れず鋒を傷り手を犯すことを」、雲巖、「我れ會せり」と云ふたは大失敗ぢや。何方も喪身失命ぞ。

「吾云汝作麼生會」——「何んぞ更に問ふことを勞せん」、雲巖の腹の中は見えた、もう問ふがものではない。「也た問過せんことを要す」、併し又た問ふたも好い。「好し一拶を與ふるに」、一つ點檢してみればならぬ處ぢや。

「巖云徧身是手眼」——「什麼の交渉か有らん」、ソノやうな見解は、蚊が牛の角を刺した程のこ

ともない。「鬼窟裏に活計を作す」、ソリヤ妄想分別ばかりぢや。「泥裏に土塊を洗ふ」、ムサ／＼しい見識ぞ。どうも垢抜けがせぬ。

「吾云道即太煞道只道得八成」——「同坑に異土無し」、同じやうなグレ仲間ぢや。「奴は婢を見て慇懃」、下部同士は仲が好い。「癩兒、伴を牽く」、癩兒は癩兒、コレも知音同士か。

「巖云師兄作麼生」——「人の處分を取らば争でか得ん」、人真似をしては埒は明くまい。「也た好し一拶を與ふるに」、併し、好く一本入れた。

「吾云通身是手眼」——「鰾跳れども斗を出でず」、圓悟が目から見れば、徧身を通身とは、餅をカチンと云ふやうなものぢや。如何云ふても、此處を出るとはならぬ。「爾が眼睛を換却し、舌頭を移却す」、悟りの眼玉の入れ換へ、舌の入れ換へサ。「還つて十成なることを得るや也た未しや」、雲巖の答は八成ぢやと云ふたが、ソレならば道吾の答は十成かサ。各々判じて看よ。「爹を喚んで爺と成す」、徧身と通身との違ひは、爹と爺との違ひと同じぢや。

雲巖與道吾同參藥山四十年脇不著席藥山出曹洞一宗有三入法道盛行雲巖下洞山道吾下石霜船子下夾山大悲菩薩有八萬四千母陀羅臂大悲有許多手眼諸人還有也無百丈云一切語言文字俱皆宛轉歸于自己雲巖常隨道吾咨參決擇一日問他道大悲菩薩用

許多手眼作什麼當初好與他劈脊便棒免見後有許多葛藤道吾慈悲不能如此與他說道
 理意要教他便會却道如人夜半背手摸枕子當深夜無燈光時將手摸枕子且道眼在什麼
 處他便道我會也吾云汝作麼生會巖云偏身是手眼吾云道即太煞道只得八成巖云師
 兄又作麼生吾云通身是手眼且道偏身是底是通身是底是雖似爛泥却脫洒如今人多去
 作情解道偏身底不是通身底是只管咬他古人言句於古人言下死了殊不知古人意不在
 言句上此皆是事不獲已而用之如今下注脚立格則道若透得此公案便作罷參會以手摸
 渾身摸燈籠露柱盡作通身話會若恁麼會壞他古人不少所以道他參活句不參死句須是
 絕情塵意想淨裸裸赤洒洒地方可見得大悲話不見曹山問僧應物現形如水中月時如何
 僧云如驢觀井山云道即煞道只得八成僧云和尚又作麼生山云如井觀驢便同此意也
 爾若去語上見總出道吾雲巖圈續不得雪竇作家更不向句下死直向頭上行頌云

【和調】 雲巖、道吾と同じく藥山に參ず。四十年、脇、席に著けず。藥山、曹洞の一派を出ず、三人有つて法道盛んに行はる。
 雲巖下の洞山、道吾下の石霜、船子下の夾山なり。大悲菩薩、八萬四千の母陀羅臂有り。大悲、許多の手眼有り、諸人遇つて
 有りや也た無や。百丈云く、一切の語言文字、俱に皆な宛轉して自己に歸すと。雲巖常に道吾に隨つて咨參決擇す。一日他に
 問ふて道く、大悲菩薩、許多の手眼を用ゐて什麼か作さんと。當初好し、他の與に劈脊に便ち棒せば、後に許多の葛藤有ること
 とを見るを免れん。道吾慈悲、此くの如くなること能はず、他の與に道理を説く。意、他をして便ち會せしめんことを要す。

却つて道ふ、人の夜半に、背手にして枕子を摸するが如しと。深夜、燈光無き時に當つて、手を將つて、枕子を摸る、且らく
 道へ、眼什麼の處にか在る。他便ち道く、我れ會せりと。吾云く、汝作麼生か會す。巖云く、偏身是れ手眼。吾云く、道ふ
 ことは即ち太煞だ道ふ、只だ八成を道ひ得たり。巖云く、師兄又た作麼生。吾云く、通身是れ手眼と。且らく道へ、偏身是
 底か是、通身是底か是。爛泥に似たりと雖も、却つて脫洒なり。如今の人、多く去つて情解を作して道ふ、偏身底は不是、通
 身底は是と。只管他の古人の言句を咬んで、古人の言下に於て死したる。殊に知らず、古人の意、言句上に在らざることを。
 此れ皆な是れ、事已むことを獲ずして之れを用ゆ。如今注脚を下し、格則を立てて道ふ、若し此の公案を透得せば、便ち罷參の
 會を作さんと。手を以つて渾身を摸り、燈籠露柱を摸つて盡く通身の話會を作す。若し恁麼に會せば、他の古人を摸すること
 と少なからず。所以に道ふ、他、活句に參じて、死句に參せざれと。須らく是れ、情塵意想を絶して、淨裸裸赤洒洒地にし
 て、方に大悲の語を見得するに可なるべし。見ずや、曹山、僧に問ふ、物に應じて形を現する、水中の月の如くなる時如何。
 僧云く、隨の井を觀るが如し。山云く、道ふことは即ち煞だ道ふ、只だ八成を道ひ得たり。僧云く、和尚又た作麼生。山云
 く、井の隨を觀るが如しと。便ち此の意に同じ。爾若し語上に去つて見ば、總に道吾、雲巖の圈續を出づること得じ。雪竇作
 家、更に句下に向つて死せず、直に頭上に向つて行く。頌して云く。

【提唱】 コレから圓悟の評ちや。「雲巖、道吾と同じく藥山に參ず」と、此の雲巖、道吾は藥山下の
 同參ぢや。「傳燈錄」「會元」「佛祖統要」等は、道吾が雲巖に問ふたと有るが、「雪竇頌古集」と此の
 錄(碧巖集)とは、同じく雲巖が道吾に問ふたとして有る。景聰が云ふのに、道吾は師兄で、雲巖は
 師弟ぢや。古本には、道吾が雲巖に問ふと作つて有る。法眷なるが故に、強ち苦とは爲さずと。「四
 十年、脇、席に著けず」と、四十年間も脇を席に著けなつた程、刻苦したものぢや。「藥山、曹洞の

一宗を出す、三人有つて法道盛んに行はる。雲巖下の洞山、道吾下の石霜、船子下の夾山なり」と、
 藥山の法嗣の中では、道吾宗智、雲巖曇晟、船子徳誠と、此の三人が殊に名高い。ソシテ道吾下
 りは石霜慶諸が出て、雲巖下よりは洞山良价が出て、別に曹洞の一流を立て、又た船子下よりは夾
 山善會が出た。何れも綿密に、坐禪辨道を第一とせられたから、宗旨は低いが子孫は多い。又た雲
 門下は子孫は寂しいが皆な一騎當千の宗匠ぞ。「大悲菩薩、八萬四千の母陀羅臂有り。大悲、許多の
 手眼有り、諸人還つて有りや也た無や」と、「母陀羅」とは、茲に翻して印と云ふ、母陀羅臂とは印手、
 或は多手と云ふ義ぢや。コリヤ人々具足ぢや。八萬四千の模様は一々の印手ぢや。觀音を本鉢とし
 て、八萬四千の手眼有り、是れ八萬四千の煩惱を對待するのぢや。八萬四千を縮めて千手千眼と云
 ふ。コレは「楞嚴經」に詳しく出て居る。「百丈云く、一切の語言文字、俱に皆な宛轉して自己に歸す
 と」、是れ即ち衲僧の千手三昧ぢや。宛轉と轉して、自己に歸せしむ。八萬四千の手眼と同じことぢ
 や。コレは「會元」の百丈章を見ると能く分る。云く、「夫れ讀經、看教、語言、皆な須らく宛轉して
 歸して自己に就く。但し是れ一切の言教、祇だ如今を明らめ自性を鑑覺す。但し一切の有無、諸境
 に轉ぜられず。是れ衲導師、能く一切の有無、諸境、是れ金剛慧なることを照破せば、即ち自由獨
 立の分有らん」と。「雲巖常に道吾に隨つて咨參決擇す」と、雲巖の方が年長ではあつたが、見處は道
 吾が先にあつたから、雲巖は道吾を師兄と喚んで法を尋ねた。「一日他に問ふて道く、大悲菩薩、許

多の手眼を用ひて什麼か作さんと、雲巖が道吾に問ふた。觀音様は千手千眼もあつて、邪魔にはな
 るまいかと。此處で本則が出て來た。當初好し、他の興に劈脊に便ち棒せば、後に許多の葛藤有る
 とを見るを免れんと、此處で直にコツントやらうぞならば、後になつて、そのはあるまいにサ。
 「道吾慈悲、此くの如くなること能はず、却つて他の興に道理を説く。意、他をして便ち會せしめん
 ことを要す。却つて道ふ、人の夜半に、背手にして枕子を摸するが如し」と、道吾め、涙脆くて、本
 分の草料をも與へずに、夜夢中で枕を探すやうななど、いらざることを云ふたから、事面倒にな
 つたがサ、コレも畢竟、雲巖に悟らせやうとした爲めぢや。「深夜、燈光無き時に當つて、手を將つ
 て枕子を摸る。且らく道へ、眼什麼の處にか在る」と、サト手も足も眼ではないかナ。「他便ち道く、
 我れ會せりと。吾云く、汝作麼生か會す。巖云く、徧身是れ手眼。吾云く、道ふことは太煞だ道ふ、
 只だ八成を道ひ得たり。巖云く、師兄又た作麼生。吾云く、通身是れ手眼と、コリヤ本則で云ふた
 通りぢや。「且らく道へ、徧身是底か是、通身是底か是」と、サト徧身と通身と、徧身が是かサ、通
 身が是かサ。コノ「是底」の是の字は、二字共に削るが好い。爛泥に似たりと雖も、却つて脱洒なり
 と、ムサ／＼しいやうぢやが洒落ぢやと。斯うではない、己に書かせると斯うは書かぬぞ、コレで
 は嬉しくない。如今の人、多く去つて情解を作して道ふ、徧身底は不是、通身底は是と。只管他の
 古人の言句を咬んで、古人の言下に於て死したる。殊に知らず、古人の意、言句上に在らざること

を」と、道吾が、雲巖の答處を未だ十分でないと言ふたものぢやから、ソレに付き廻つて、偏身は不是ぢやが、通身は是ぢやなど、云ふから、何時まで経つても古人の眞意は會らぬのぢや。「此れ皆な是れ、事已むことを獲ずして之れを用ゆ」と、古人も是れ已むを獲ずして、偏身、通身の言句を用ゐたと。此處も斯うではない。「如今注脚を下し、格則を立てて道ふ、若し此の公案を透得せば、便ち罷參の會を作さんと」今時の者は云ふ、格式や法則を立て、此の公案を透得すりや、大ヒマが明かうぞと。「手を以つて渾身を摸り、燈籠露柱を摸つて、盡く通身の話會を作す」と、方々を摸つてみるに、都べて手眼ぢやなど、云ふは邪解ぢや。「若し恁麼に會せば、他の古人を壞すること少なからず」と、コレでは古人の血滴々の示衆もダイ無しぢや。「所以に道ふ、他、活句に參じて、死句に參ぜざれと。須らく是れ、情塵意想を絶して、淨裸赤洒洒地にして、方に大悲の語を見得するに可なるべし」と、此の評では評し効がない。「見ずや、曹山、僧に問ふ、物に應じて形を現する、水中の月の如くなる時如何」と、此の問答は勝れて居るから、サー看よと類則を持ち出した。「僧云く、驢の井を覷るが如し」と、コリヤ無心にして應ずる義ぢや。「山云く、道ふとは即ち煞だ道ふ、只だ八成を道ひ得たり、僧云く、和尚又た作麼生。山云く、井の驢を覷るが如しと。便ち此の意に同じ」と、コノ曹山の語の俊利なることは、洞山に過ぎて居る。イヤハヤ、何んとも云ひやうはない。此の公案の意と本則の意とは同じぢや。「倘若し語上に去つて見は、總に道吾、雲巖の圈續を出づること得

じ。雪竇作家、更に句下に向つて死せず、直に頭上に向つて行く。願して云くと、サー諸人、若し言句の上に於て求めたなら、道吾、雲巖の繩張りをホツ越えた自由の働きは出來まいぞ。雪竇は流石作家ぢやから、直に頭上に行いて願出した。次ぎ下の雪竇の頌を看よ。

偏身是

○四肢入節○末是衲僧極則處

通身是

○頂門上有半邊○猶在窠窟裏○瞎

拈來猶較十萬里

○放過則不可○何止十萬里

展翅鵬騰

○些子塵埃○

六合雲

○些子境界○將謂奇特○點

搏風鼓蕩四溟水

○些子塵埃○

將謂天下人不奈何○過

是何埃埒兮忽生

○重爲禪人下注脚○斬○拈却著那裏

那箇毫釐兮未止

○別別○吹散了也○截

君不見

○又恁麼去

網珠垂範影重重

○大小大雪竇作這箇去就○可惜許○依舊打葛藤

棒頭手眼從何起

○咄○賊過後張弓○放爾不得○盡大地人無出氣處○放得又須喫棒○又打咄云且道山僧底是雪竇底是

咄

○三喝四喝後作麼生

【和訓】 徧身是。(〇四肢八節。〇未だ是れ納僧極則の處にあらず。通身是。(〇頂門上に半邊有り。〇猶ほ窠窟裏に在り。〇障す。拈じ來れば猶ほ十萬里に較る。(〇放過せば則ち不可。〇何んぞ止だ十萬里のみならん。翅を展べて鵬騰す六合の雲。〇些子の境界。〇將に奇特と謂へり。〇點。風に搏つて鼓蕩す四溟の水。(〇些子の塵埃。〇將に謂へり、天下の人、徧を奈何ともせじと。〇過。是れ何んの埃壙を忽に生ず。(〇重ねて神人の爲に注脚を下す。〇斬。〇拈却して那裏にか著けん。那箇の毫釐未だ止まざる。〇別別。〇吹き散じ了れり。〇截。君見すや。(〇又た恁麼にし去る。網珠繩を垂れて影重重。(〇大小大の雪竇、淨箇の去就を作す。〇可惜許。〇舊に依つて葛藤を打す。棒頭の手眼何れ從りか起る。〇咄。〇賊過ぎて後ち弓を張る。〇備を放すこと得じ。〇盡大地の人、氣を出す處無けん。〇放得せば又た須らく棒を喫すべし。〇又た打つて咄して云く、山僧底が是、雪竇底が是。咄。(〇三喝四喝の後ち作麼生。)

【提唱】

圓 コレから雪竇の頰ぢや。

「徧身是」、「通身是」と、サー徧身是か、通身是か、コレは分ち難い、大いに詭訛あるからぢや。昔時愚堂と大愚と、互に此の頰を講じたことがある。愚堂が云ふのに、通身の句の方が勝つて居る、「通身是」より「徧身是」を見れば、拈じ來れば猶ほ十萬里に較る。ソノ寒じきことは、六合四溟はれ何んの埃壙毫釐ぞと。大愚が云ふに、然らず、設使徧身通身も、我が納僧門下より見れば、猶ほ十萬里に較ると。此の二人を南天棒が評すればサ、愚堂は設使死蛇なりとも、弄することを解すれば活龍となるの手脚があるが、大愚は只だ丸出しぢや、ソレなら雪竇の心は如何あらうぞなれば、雲

巖も取らず道吾も取らず、又た雲巖も捨てず道吾も捨てない。實にハヤ、此の頰は光前絶後ぢや、若し見得分明ならば、祖師門下の言は、龍の水を得たるが如しぢや。

「拈じ來れば猶ほ十萬里に較る」と、サー向上に穿鑿し去れば、徧身も通身も、千手大悲の端的とは、猶ほ十萬里も隔つて居ると。又たモウ一つの見方は、未透の等閑者が拈せば、何んの役にも立たぬ。此の骨合を篤と呑込んだ者とは、十萬里の違ひぢや、没交渉ぢやと云ふのぢや。

「翅を展べて鵬騰す六合の雲」と、サー其の達ひ目は如何かと云へばサ、大鵬が勢ひ寒じく大空に翅を廣げてと。コレと次の句とは、道吾、雲巖の機用を云ふたものぢや。コノ「鵬」と云ふ字は、當に「崩」に作るべきである。何故と云へばサ、此の句は鵬のことを云ふと雖も、而も其の名體を云はず、唯だ其の用を擧ぐるまでぢやから、福本、蜀本共に同じく崩としてある。不二も、二本に依つて崩に作るが好いと云つて居る。韓愈の詩には、「崩騰して相ひ排拶す」とある。又た「圓悟錄」にも、「大鵬摩霄の翅を展べんと欲す、誰れか顧みん六合の雲を崩騰す。云々」とある。

「風に搏つて鼓蕩す四溟の水」と、大鵬が浪に搏つてからに、四大海の水を打ち揚げて千瀉として、龍を呑むやうぢや。併し。

「是れ何んの埃壙を忽に生ず」と、千手大悲の菩薩より見れば、又た納僧の眼から見ればサ、崩騰も鼓蕩も、何んの埃壙ぞや。

「那箇の毫釐ぞ未だ止まざる」と、僅かな風にも、微塵が舞つたやうぢやと。雪竇自身の翅を長く展べて見せた。其の腕力の寒じサ、寒毛卓豎ぢや。コリヤ此の碧巖中の正味、衲僧參禪の肝腸ぢや。

「君見ずや」と、サー大衆、能く聞かつしやれ。

「網珠鏡を垂れて影重重」と、千手大悲の當體は主伴無盡ぢや、重々の大光明ぢや。此の南天棒、拂子を擧げて曰く、網珠は天上の物語り、コノ拂子の毛毎に、東京は八百八町、京も大阪も、天地も地獄も映る、此の大事を云はうぞならば、遠近の道はさまざま、多けれど、闊浮へいざと云ふ人ぞなき」と。大悲の話は別に在るではない、三千世界が觀音の千手ぢや、コレを大悲の話と云ふ。

「棒頭の手眼何れ従りか起る」と、コノ網珠の重々たる處より、臨濟、徳山の大機も出た。三世の諸佛、歴代の祖師も是れより出たぞ。

「咄」と、ヤイ馬鹿めと。コリヤ雪竇自身の點檢ぢや。福本には「喝」とある。

【啓語】 コレから圓悟の著語ぢや。

「偏身是」——「八肢八節」、頭から足の爪元まで、千手千眼だらけぢや。「未だ是れ衲僧極則の處にあらず」、「偏身是」なんぞと、衲僧の極則とする處は、まだ／＼ソナナことではない。

「通身是」——「頂門上に半邊有り」、道吾の云ひ分は、頂門上に半分の眼を具した分ぢやと。「猶ほ窠窟裏に在り」、「通身是」と云ふも、まだ／＼窠窟裏を出ぬと道吾を奪つた。「瞎す」、ナニ盲目サ。

「拈來猶較十萬里」——「放過せば則ち不可」、偏身是、通身是を放過せば不可ぢやと。サウでなく、取るに足らぬ。「何んぞ止だ十萬里のみならん」、雪竇は十萬里の違ひぢやと云ふが、ナカ／＼如何して、ソレばかりの違ひぢやない。遠うして遠しぢや。

「展翅騰騰六合雲」——「些子の境界」、大悲千手眼に比すれば、ソナナことは屁のカツバぢやと。コノ下語は取らぬ。「將に謂へり奇特と」、小さい悟は役に立たぬぞ。「點」、ポツンと。圓悟、得意の一手ぢや。

「搏風鼓蕩四溟水」——「些子の塵埃」、風に搏つてと云ふても、砂塵にも、及ばぬわいと。コレも不可。「將に謂へり、天下の人、爾を奈何ともせじと」、天下の人も如何ともし難いやうな作略があるかと思ふたりや、何んぢや、ソレばかりのことか。「過」、雪竇、蹉過ぢやぞ。

「是何埃壙兮忽生」——「重ねて禪人の爲に注脚を下す」、ソナナ講釋は小煩い、おけ／＼と。コノ句も不可々々。「斬」ソナナことは直下に斬り拂へ。「拈却して那裏にか著けん」、サー此のムサ／＼しい境界を、何處へ片付けやうぞ。持ち廻つても、著ける處はあるまいぞ。

「那箇毫釐兮未止」——「別別」、コリヤ雪竇の別語ぢや。「吹き散じ了れり」、毫釐未だ止まらずと云ふが、ソナナ埃なら、斯うして「吹きすれば、何處かへ飛んで仕舞ふわい。「截」、未だ止まなけりや、圓悟の能く切れる小刀で一寸斷ち截つてやらう。

「君不見」——「又た恁麼にし去る」、又た何んのタワ言を吐くぞ。

「網珠垂範影重重」——「大小大の雪竇、這箇の去就を作す」、雪竇、左様な振舞をするかと。南天棒云く、雪竇は傳來の些子の大事を紛碎したつたものを、此の下語では濁り下つた。「可惜許」、アツタラものをダイなしぢや。「舊に依つて葛藤を打す」、網珠などと、「華嚴」の真似をして、面倒なことを持ち出したナ。

「棒頭手眼從何起」——「咄」、コノ咄は屈かぬ。」「賊過ぎて後ち弓を張る」、今頃になつての詮議は遅い。ソラ、臨濟や徳山に喫はせられるぞ。「爾を放すこと得し」、雪竇、お主は放されぬ奴ぢや。「盡大地の人、氣を出す處無けん」、コノ棒頭の機用には、天下の人も命を乞ふぢや。「放得せば又た須らく棒を喫すべし」、圖悟をして思ふ存分に打せたら、雪竇も棒は免れまい。「又た打つて咄して云く、且らく道へ、山僧底が是か、雪竇底が是か」、サ、雪竇が咄と、圖悟が咄と、何方が是か。諸人如何ぢや、サ、道へくと、大衆に擲した處ぢや。福本には、「又」が「便」とあり、「咄云」の二字が無い。コノ句は、「咄」の下にあつた方が見好い。

「咄」——「三喝四喝の後ち作麼生」、雪竇の咄を咎めてサ、三喝四喝の後は何仕舞つたものぞ。偏身是通身是若道背手摸枕子底便是以手摸身底便是若作恁麼見解盡向鬼窟裏作活計

畢竟偏身通身都不是若要以情識去見他大悲話直是猶較十萬里雪竇弄得一句活道拈來猶較十萬里後句頌雲巖道吾奇特處云展翅騰騰六合雲搏風鼓蕩四溟水大鵬吞龍以翼搏風鼓浪其水開三千里遂取龍吞之雪竇道爾若大鵬能搏風鼓浪也太煞雄壯若以大悲千手眼觀之只是些子塵埃忽生相似又似一毫釐風吹未止相似雪竇道爾若以手摸身用作手眼堪作何用於此大悲話上直是未在所以道是何埃塩兮忽生那箇毫釐分未止雪竇自謂作家一時拂迹了也爭奈後面依舊漏逗說箇喻子依前只在圈縲裏君不見網珠垂範影重重雪竇引帝網明珠以用垂範手眼且道落在什麼處華嚴宗中立四法界一理法界明一味平等故二事法界明全理成事故三理事無礙法界明理事相融大小無礙故四事事無礙法界明一事徧入一切事一切事徧攝一切事同時交參無礙故所以道一塵纒舉大地全收一塵含無邊法界一塵既爾諸塵亦然網珠者乃天帝釋善法堂前以摩尼珠爲網凡一珠中映現百千珠而百千珠俱現一珠中交映重重主伴無盡此用明事事無礙法界也昔賢首國師立爲鏡燈喻圓列十鏡中設一燈若看東鏡則九鏡鏡燈歷然齊現若看南鏡則鏡鏡如然所以世尊初成正覺不離菩提道場而徧昇切利諸天乃至於一切處七處九會說華嚴經雪竇以帝網珠垂示事事無礙法界然六相義甚明白即總即別即同即異即成即壞舉一相則六相俱該但爲衆生日用而不知雪竇拈帝網明珠垂範況此大悲話直是如此爾若

善能向此珠網中明得拄杖子神通妙用出入無礙方可見得手眼所以雪竇云棒頭手眼從何起教爾棒頭取證喝下承當只如德山入門便棒且道手眼在什麼處臨濟入門便喝且道手眼在什麼處且道雪竇末後爲什麼更著箇咄字參

【和訓】 偏身是、通身是と。若し背手にして杖子を摸る底便ち是、手を以つて身を摸る底便ち是なりと道はん。若し恁麼の見解を作さば、盡く鬼窟裏に向つて活計を作す。畢竟、偏身通身、都て不是。若し、情識を以つて去つて、他の大悲の話を見んと要せば、直に是れ猶ほ十萬里に較る。雪竇、一句を弄し得て、活せしめて道く、拈じ來れば猶ほ十萬里に較ると。後句に、雪竇、道吾、奇特の處を頌して云く、翔を展べて颯然す六合の雲、風に拂つて鼓蕩す四溟の水と。大鵬、龍を呑むに、翼を以つて風を拂つて浪を鼓す。其の水開くること三千里、遂に龍を取つて之れを呑む。雪竇道く、偏若し大鵬にして、能く風を拂つて浪を鼓して、也た太然だ雄壯なるも、若し大悲の千手眼を以つて之れを觀れば、只だ是れ些子の塵埃、忽ちに生ずるに相ひ似たり。又た一毫蓋の風に吹かれて未だ止まざるに似て相ひ似たり。雪竇道く、偏若し手を以つて身を摸つて、用ゐて手眼と作さば、何の用を作すにか堪へん。此の大悲の語の上に於て、直に是れ未だ。所以に道ふ、是れ何んの埃法ぞ忽ちに生ずる、那箇の毫蓋ぞ未だ止まざると。雪竇自ら謂へらく、作家にして一時に迹を拂ひ了れりと。爭奈せん、後面に舊に依つて漏返して、箇の論子を読くとを。依前として只だ圓滑の裏に在り。君見すや、網珠鏡を垂れて影重重と。雪竇、帝網の明珠を引いて、以つて鏡を垂るることを用ゆ。手眼、且らく道へ、什麼の處にか落在す。華嚴宗の中に四法界を立つ。一には理法界、一味平等を明すが故に。二には事法界、理を全うして事を成すことを明すが故に。三には理事無礙法界、理事相融して、大小無礙なることを明すが故に。四には事事無礙法界、一事徧く一切事に入り、一切事徧く一切事を攝して、同時に交參無礙なることを明すが故に。所以に道ふ、一塵總かに舉つて、大地全く收ると。一一の塵、無邊法界を含す。一塵既に徧り、諸塵も亦た然り。網珠と云ふは、乃ち天帝釋の善法堂の前に、摩尼珠を以て網を爲る。凡そ一珠の中に、百千珠を映現し、而も百千珠、俱に一

珠の中に現す。交映重重にして、主伴無盡なり。此れを用ゐて、事事無礙法界を明す。昔し賢首國師、立てて鏡燈の喻を爲す。圓かに十鏡を列ねて、中に一燈を設く。若し東鏡を看れば、則ち九鏡の鏡燈、歷然として齊しく現す。若し南鏡を看んにも、鏡鏡如然たり。所以に世尊、初め正覺を成じて、菩提道場を離れずして、徧く切利諸天に昇り、乃至、一切處に於て七處九會に華嚴經を説く。雪竇、帝網珠を以つて、事事無礙法界を垂示す。然も六相の義、甚だ明白なり。即ち、即同、即異、即成、即壞、一相を舉すれば、即ち六相俱に該ぬ。但し衆生、日に用ゐて知らざるが故に、雪竇、帝網明珠を拈じて鏡を垂れて、此の大悲の語に況ふること、直に是れ此くの如し。偏若し善能く、此の珠網の中に向つて、拄杖子を明得して、神通妙用、出入無礙ならば、方に手眼を見得す可し。所以に雪竇云く、棒頭の手眼何れ從りか起ると。偏をして棒頭に取證し、喝下に承當せしむ。只だ德山、門に入れば便ち棒するが如きんば、且らく道へ、手眼什麼の處にか。臨濟門に入れば便ち喝す。且らく道へ、雪竇末後、什麼と爲てか更に箇の咄の字を著く。參。

【提唱】 コレから圓悟の評ちや。「偏身是、通身是と。若し背手にして杖子を摸る底便ち是、手を以つて身を摸る底便ち是なりと道はん。若し恁麼の見解を作さば、盡く鬼窟裏に向つて活計を作す」と、サ一偏身是、通身是の語詛をボツ越えれば是、サも無ければホダ腰は立たぬ。「畢竟、偏身通身、都て不是」と、コレは頌の處で云ふたやうに大愚和尚の心ちや。「若し情識を以つて去つて、他の大悲の語を見んと要せば、直に是れ猶ほ十萬里に較る」と、若し思量や分別を以つて偏身通身の語詛を頌した大悲の語を見やうとしたら、片フタも窺かれぬぞ。「雪竇、一句を弄し得て、活せしめて道ふ、拈じ來れば猶ほ十萬里に較ると」、ぢやから雪竇が、偏身是、通身是の句を活かして頌して見せ

た。「後句に、雲巖、道吾、奇特の處を頌して云く、翅を展べて鵬騰す六合の雲、風に搏つて鼓蕩す四溟の水と。大鵬、龍を呑むに、翼を以つて風に搏つて浪を鼓す。其の水開くこと三千里、遂に龍を取つて之を呑む」と、大鵬と云ふ鳥は寒じいものぢや。浪を打つて四大海を干涸にして龍を呑む。丁度雲巖、道吾の機用がツレぢや。「鵬騰」の鵬は、崩でなければならぬ。「雪竇道く、倘若し大鵬にして、能く風に搏つて浪を鼓して、也た太煞だ雄壯なるも、若し大悲の千手眼を以つて之れを觀れば、只だ是れ些子の塵埃、忽に生ずるに相ひ似たり。又た一毫釐の風に吹かれて未だ止まざるに似て相ひ似たり」と、併し、大鵬の雄壯なる振舞も、衲僧の向上の事から見れば、風に吹かれて塵埃が舞つて居るやうなものぢや。「倘若大鵬」の若の下に、福本には「似たるを得ば」の二字がある。「雪竇道く、倘若し手を以て身を摸つて、用ひて手眼と作さば、何んの用を作すにか堪へん。此の大悲の話の上に於て、直に是れ未だ。所以に道ふ、是れ何んの埃塩ぞ忽に生ずる、那箇の毫釐を未だ止まざると、偏身、通身を穿鑿して居つては未だぢや、埒は明かぬ。「雪竇自ら謂へらく、作家にして一時に迹を拂ひ了れり」と、否サ、迹を拂ひはせぬぞ。「爭奈せん、後面に舊に依つて漏逗して、箇の喻子を説くことを」と、雪竇が漏逗して座敷を汚したと。南天棒云く、「雪竇、漏逗ではない、肝腸に毛が生えて居る、恐しいとがあるぞ。「依前として只だ圈續の裏に在り」と、コリヤ教意ぢやからぢや。「君見ずや、網珠範を垂れて影重重と」、前箭は猶ほ軽く、後箭は深しぢや。「雪竇、帝網の明珠を引い

て、以つて範を垂るることを用ゆ」と、雪竇が帝網の明珠を引くと雖も、是れ決して教意に墮したのではない。「範を垂る」と云ふを邪解する者が多いぞ。「手眼、且らく道へ、什麼の處にか落在す」と、コリヤ圓悟の一撈ぢや。「華嚴宗の中に四法界を立つ」と、華嚴に四法界があるぢや。ソレは、「一には理法界、一味平等を明すが故に」と、諸佛の全身に漏る、者は無く、佛と衆生と二つはない。コリヤ本具の大理、正位、空諦ぢや。「二には事法界、理を全うして事を成すことを明すが故に」と、柱は柱と差別の境界ぢやが、一味の中から分れ出た故に、本と一つ黄金ぢや。コリヤ十方法界一片の大理、偏位、假諦ぢや。「三には理事無礙法界、理事相融して、大小無礙なることを明すが故に」と、金かと思へば器物、器物かと思へば金ぢや。コリヤ事の成るを辨する、理即ち事、事即ち理ぢや。「四には事事無礙法界、一事普く一切事に入り、一切事徧く一切事を攝して、同時に交參無礙なることを明すが故に」と、拂子頭上に三千界を接すると。圓悟の此の譯は未だぢや。燈籠躍つて露柱に入り、一徧、一切に入り、一切徧に一切に接する。コリヤ徧中正の一位、徧位一片、古佛、巖柱と相ひ交るぢや。圓悟禪師が一日舟を舩して、無盡居士に謁し、華嚴の旨要を劇談して云ふのに、華嚴現量の境界、理事全身、初めて假法無し。所以に一切にして萬、萬を了して一と爲す。一復た一、萬復た萬、浩然として窮り無し。心、佛、衆生の三、無差別。卷舒自在、無礙圓融、此れ極則なりと雖も、終に是れ風無きに匝々の波と。公(無盡居士)是に於て、覺えず榻を促がす(ソんなことを云つて居らんで

サツサと歸れと云ふことぢや。師(圓悟)遂に問ふて曰く、此に到る、祖師西來意と同一と爲すや、別と爲すや、公曰く、同。師曰く、且得没交渉と。公は之れが爲に慍つた。師曰く、見ずや、雲門道く、山河大地、絲毫の過患無きも、猶ほ是れ轉句。直に一色を見ざるを得て、始めて是れ半提、更に須らく向上全提の時節有るを知るべしと。彼の徳山、臨濟、豈に全提に非らずやと。ソコデ公、瞿然として手を額に加へて曰く、眞淨先師と雖も、亦た是の如く審かならんやと。翌日復た理法界、事法界を擧して、理事無礙法界に至つた。師又た問ふて曰く、此れ禪と説く可きか。公曰く、正に好し禪と説く可きに。師笑つて曰く、然らず、正に是れ法界の量未だ減せず。若し事事無礙法界に到らば、法界の量減ず、始めて好し禪と説くにと。華嚴の四法界を知らんとせば、此の問答を能く味ふて看よ。「一塵纔かに擧つて、大地全く收ると。一一の塵、無邊法界を含す。一塵既に爾り、諸塵も亦た爾り」と、一塵の中に三千世界が全く收るぢやがサ、コリヤ師家に、頭を百も二百も打たれねばいかぬぞ。「網珠と云ふは、乃ち天帝釋の善法堂の前に、摩尼珠を以つて網を爲る。凡そ一珠の中に、百千珠を映現し、而も百千珠、俱に一珠の中に現す。交映重重にして、主伴無盡なり。此れを用ひて、事事無礙法界を明す」と、コリヤ網珠の講釋ぢや。此の網珠と云ふのはサ、天帝釋が十善を説法する法堂の前に、摩尼珠即ち如意珠を以つて作つた網ぢや。一珠の中に百千珠が現れて重々として交映し、大網珠、小網珠、盡くる無しと云ふ。コレは事事無礙法界を明すのぢや。サー人々

も、即今摩尼珠で貫き抜いて、コノ座敷に居るわサ。「昔し賢首國師、立てて鏡燈の喩を爲す。圓かに十鏡を列ねて、中に一燈を設く。若し東鏡を看れば、則ち九鏡の鏡燈、歴然として齊しく現す。若し南鏡を看んにも、則ち鏡鏡如然たり」と、コノ賢首大師は又た香象國師とも云ふて、華嚴宗を大成した人ぢや。ソノ賢首大師が、鏡燈の譬論を立てた。ソレは如何あらうぞなればサ、圓く十鏡を並べて、中央に一燈を置くと、ソノ鏡の中の何れを見ても、他の九鏡が歴然として映現すると云ふのぢや、即ち主伴無盡ぢや。コレも事事無礙法界を明すぢや。「所以に世尊、初め正覺を成じて、菩提道場を離れずして、徧く切利諸天に昇り、乃至一切處に於て、七處九會に華嚴經を説く」と、世尊が成道第二七日に、七處九處にて説かれたのが華嚴經ぢや。「菩提道場を離れずして、徧く切利諸天に昇り」と、コリヤ一身なるが故ぢや。切利諸天は須彌山の頂にある、中央が切利天ぢや。又た「七處九會」とはサ、第一、菩提場會。第二、普光明堂會。第三、切利天宮會。第四、夜摩天宮會。第五、兜率天宮會。第六、他化自在天宮會。第七、重會普光明堂會。第八、三會普光明堂會。第九、逝多園林會ぢや。普光明堂では三會説いたから、七處九會となるぢや。「雪竇、帝網珠を以つて、事事無礙法界を垂示す」と、網珠は元より事事無礙法界を明すのぢやが、今ま雪竇も頌の中に用ひて、事事無礙法界を明したと云ふは如何。大悲千手を垂示すると云ふたら好からう。「然も六相の義、甚だ明白なり」と、コレは頌意とは違ふた。六相とはサ、「即總、即別」と、賢愚全體彌陀ぢや。「即同、即

異と、地獄天堂も平等の佛性ぢや。「即成、即壞」と、其の儘壞、其の儘成。即ち成と見れば壞、壞と見れば成ぢや。「一相を擧すれば、則ち六相俱に該ぬ」と、コノ中の一相に、六相が皆な具つて居る。網珠と同じぢや。「但し衆生、日に用ゐて知らざるが爲に、雪寶、帝網明珠を拈じて、籠を垂れて、此の大悲の事に況ふること、直に是れ此くの如し」と、手の舞ひ足の踏む處、是れ千手眼と云ふことを衆生は知らぬから、雪寶が帝網珠を將つて來て明したのぢや。「爾若し善能く、此の珠網の中に向つて、拄杖子を明得して、神通妙用、出入無礙ならば、方に手眼を見得す可し」と、サ一此の網珠を識得して、把住放行の上に於て、自由自在ならば、大悲の手眼も亦た見得するであらうぞ。「所以に雪寶云く、棒頭の手眼何れ従りか起ると。爾をして棒頭に取證し、喝下に承當せしむ。只だ徳山、門に入れば、便ち棒するが如きんば、且らく道へ、手眼什麼の處にか在る。臨濟、門に入れば便ち喝す。且らく道へ、手眼什麼の處にか在る」と、此の徳山、臨濟の棒喝下で會得したならば、山河大地、何處も彼處も手眼ぢや。「且らく道へ、雪寶末後、什麼と爲てか更に箇の咄の字を著く。參」と、雪寶は、「棒頭の手眼何れ従りか起る」と云ふて置いて、何故「咄」とやつたか。サ一諸人、仔細に參詳して看よ。

註 (八萬四千の模様) 八萬四千の煩惱に對す。(愚堂) 臨濟宗。名は東定、俗姓は伊藤氏、美濃國伊自良の人也。正親町

天皇の天正七年に生る。幼にして東光寺に入りて出家、十三歳にして薙髮し、十九歳の時、遍參の途に上る。南嶺岳、説心堂、物外播、鐵山鈍等を歴訪し、後ち聖澤寺の窟山に謁して印可を受け、稻葉氏の請に應じて、美濃の正傳寺に住す。後ち大仙寺の荒廢を修理して此に住す。寛永五年、妙心寺に住し、後ち三度、妙心寺に住す。後水尾上皇より僧伽梨衣を賜ふ。後ち龍翔寺を再興し、又た正燈寺に住す。豊後養徳寺の開山となり、又た伊勢の中山寺、美濃の高井寺の第一世となる。晩年に及びて山城國華山寺に退去して餘生を養ひ、後西院帝寛文元年十月一日寂。壽八十三。其の遺偈に云く、「今日利益、老僧積存、他日利益、附囑兒孫」と。大圓寶鑑國師の諡號を賜ふ。(大愚) 臨濟宗。名は性智、號は大愚、別に堆雲軒、倚松道人と稱す。山城の人なり法を大海弘に嗣ぐ。應永三年、伊勢の安養寺に住し、尋いて清見、東福、南禪、天龍、建仁、普門、鹿苑、常在光寺の諸寺を歴住す。永享十一年六月三十日慧日山堆雲院に寂。壽八十有餘。(埃壙) 壙は於蓋の切、塵なり、通じて場に作る。「此の下語ては濁り下つた」濁るは穢すの意。(無盡居士) 姓は張、字は天覺、無盡は號、名は商英。官吏なり。「維摩經」を見ふに及んで、深く佛乘を信じて心を祖道に留む。天祐六年、江西の漕と爲る、首めて東林の照覺禪師に謁して所見を呈するに許可を蒙る。玉露の慈古鏡、兜率の悅、其の他を歴訪す。天祐八年八月、悅と建昌の途中に、十頌を賦して互に應酬す。公、一日大慧宗杲に謂つて云く、予、雪寶の拈古を問る、百丈再び馬祖に參する因縁に曰く、「大冶の精金應に變色無かるべし」と云ふに至つて、卷を投じて歎じて云く、審するに是くの如くならば、豈に臨濟今日有らんやと。大慧云く、居士の見處、眞淨、死心と合ふ。公の語に因らずんば、争てか眞淨、死心の用處を見ん。若し二大老に非らずんば、雪寶、馬師を顯はすこと難からんのみと。即ち佛果圓悟禪師を請じて、雪寶頌古百則の評唱を爲さしむ。是れ碧巖集なり。公、宣和四年十一月黎明、遺表を口上して、子弟に命じて書せしめ、俄に枕を取つて門窓の上に擲つ。聲、雷の震ふが如し、衆之れを視れば已に薨す、壽詳かならず。(眞淨) 臨濟宗黃龍派。支那陝府の人、姓は鄭氏。幼にして出家し、初めは大馮山に在りて辨道し、後ち黃龍に參じて印可を受く。後ち金陵に至り、王荆王に請ぜられて、報寧寺の開山と爲る。勅して眞淨禪師と號す。宗の徽宗の崇寧元年寂。壽七十八。(十善) 不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見の十を云ふ。

第九十則 智門般若體

【智門般若體】

垂示云聲前一句千聖不傳面前一絲長時無間淨裸裸赤灑灑頭蓬
鬆耳卓朔且道作麼生舉試看。

【和訓】垂示に云く、聲前の一句、千聖不傳。面前の一絲、長時無間。淨裸裸赤灑灑。頭蓬鬆、耳卓朔。且らく道へ、作麼生。試に舉す、看よ。

【提唱】第九十則、「智門般若體」と、コノ則是、般若の體の用、別に參ぜざる可からざることを明すのぢや。

「垂示に云く」と、此の垂示は、第九十四則の垂示の前半と同じぢや。一本には無いのも有る。「聲前の一句、千聖不傳」と、未だ舉せざる已前、是れ自悟自證の田地ぢやから、千聖不傳ぢや。無字の隻手の聲の、何んの彼のと云ふは上皮的沙汰、彌陀と云ふも妙法と云ふも上皮的沙汰ぢや。「面前の一絲、長時無間」と、サハ去りながら、正念工夫間斷なき處、聲前の一句は、人々の面前に掛在

して分明ぢや。此の「一絲」とは何物ぞ、是れ十二時中、綿々として斷ぜざる理ぢや。舒れば三千世界に彌綸す、と思へば又た蟻の鬚程もない。「淨裸裸赤灑灑」と、コリヤ其の關所をボツ越えて、サツバリと摺り削いた處の境界ぢや。六道四生、五慾八風に在りと雖も、其の中に處して、即ち是れ淨裸裸、赤灑灑ぢや。コノ已下の二句は、上の句の著語みたやうなものぢや。「頭蓬鬆、耳卓朔」と、鬚鬆は髮のぼう／＼と亂れたる貌。卓朔はハッキリ聞き取ると云ふこと。サー形貌には關はぬ、形は島の夷でもサ。「雪竇後錄」に云ふのに、「上堂。僧問ふ、如何なるか是れ佛。師（雪竇）云く、頭蓬鬆、耳卓朔。僧云く、不會。師云く、笑悲するに堪へたり」と。「且らく道へ、作麼生。試に舉す、看よ」と、サー是りや何人か、次ぎ下の本則を看よ。

舉僧問智門如何是般若體

○通身無影象○坐斷天下人舌頭○用體作

什麼 門云蚌含明月

○光吞萬象即且止棒頭正眼事如何○曲不藏直○雪上加霜又一重

僧云如何是般若用

○倒退三千里○要用作什麼 門云兔

子懷胎

○嶮○苦瓠連根苦甜瓜徹蒂甜○向光影中作活計不出智門窠窟○若有

箇出來且道是般若體是般若用○且要土上加泥

【和訓】 擧す。僧、智門に問ふ、如何なるか是れ般若の體。(○通身、影象無し。○天下の人の舌頭を坐斷す。○體を用ゐて什麼か作さん。) 門云く、蚌、明月を含む。(○光り萬象を呑むことは即ち且らく止く、棒頭正眼の事如何。○曲、直を藏さず。○雪上に霜を加ふ又た一重。) 僧云く、如何なるか是れ般若の用。(○倒退三千里。○用を要して什麼か作さん。) 門云く、兔子懷胎。(○嶮。○苦瓠は根に連つて苦く、甜瓜は蒂に徹して甜し。○光影の中に向つて活計を作さば、智門の窠窟を出でず。○若し箇の出で来る有らば、且らく道へ、是れ般若の體か是れ般若の用か。○且らく要す、土上に泥を加ふことを。)

【提唱】

本則 コレから本則ぢや。

「擧す。僧、智門に問ふ、如何なるか是れ般若の體」と、僧が智門和向に般若の體を問ふた。「般若の體」とは何んぢやな。コリヤ本分ぢやぞ。サー此の則は宗門の巴鼻ぢや、向上の言句を拈弄して、空生の窠窟を打出せるに、下語並に評は、多く空生の見に墮ちて居る。ぢやから此の南天棒は一向に取らぬ。今假りに筆削を加へて、好き處を扶け用ゐるぢや、コノ則には、第二十一則の「智門蓮花荷葉」を参照して看るがよ。

「門云く、蚌、明月を含む」と、是れ寒しいものぞ。格外の言句、用を以つて答へた。曬珠光り燦爛たりぢや。サー蚌が用か、月が體か、諸人どうぢや。

「僧云く、如何なるか是れ般若の用」と、今度は、般若の用と出た。是れ又た無孔の鐵鎚ぞ。

「門云く、兔子懷胎」と、コリヤ何んぢやナ。體を以つて答へた。鐵樹抽鐵珊瑚の花ぢや。

著語 コレから圓悟の著語ぢや。

「擧僧問智門如何是般若體」——「通身、影象無し」、本來影も像もない、全體是れ般若の大光明ぢやと。コリヤ合頭ぢや、「天下の人の舌頭を坐斷す」、言詮不及ぢやからサ。無孔の鐵鎚當面に擲つぢや。「體を用ゐて什麼か作さん」、馬鹿め、體と用とを分けて問ふたから奪つた。奪つた處が眞の般若ぢや、體はないぞ。

「門云蚌含明月」——「光り萬象を呑むことは即ち且らく止く、棒頭正眼の事如何」「光り萬象を呑む」とは、「蚌、明月を含む」と云ふと同様ぢや。ソレは問はずサ、何故喫はさぬぞ、是れ般若の妙用の棒頭ぢやと。コノ句は取らぬぞ。「曲、直を藏さず」、智門、眞直に答へられた。元來智門は、體にも用にも居らぬ人ぞ。「雪上に霜を加ふ又た一重」、「蚌、明月を含む」と云ふたは、雪に霜を振り掛けたやうな。實にハヤ天寒く人寒く、滴水滴凍すぢや。又た體を問ふたのに用を以つて答へたは、一重上手に出たのぢや。

「僧云如何是般若用」——「倒退三千里」、タワ言云はずにスツ込め。「用を要して什麼か作さん」、體を問ふたら、もう用を問ふことはない。ソレで済んでをるぢや。

「門云兔子懷胎」——「嶮」、智門の答話は、親知らず子知らずぢや。「苦瓠は根に連つて苦く、甜

瓜は蒂に徹して甜し、上霄漢に透り、下黄泉に徹する。容易ならぬ答話ぢや。實に盡大地兔子懐胎ぞ。「光影の中に向つて活計を作さば、智門の窠窟を出てす」。若し智門の答話を、體用に涉つて會したら役に立たぬぞ。コレより已下の下語は取らぬ。「若し箇の出て來るあらば、且らく道へ、是れ般若の體か是れ般若の用か」。眼の明いた者なら、智門の答は、是れ體か是れ用か。サー道へく。「且らく要す、土上に泥を加ふることを」。體とも用とも云は、土上に泥を加ふるのぢやが、爲人の方便としては、且らく斯うもあらうかい。

智門道蚌含明月 兔子懐胎都用中秋意 雖然如此古人意却不 在蚌兔 他是雲門會下尊宿一句語 須具三句 所謂函蓋乾坤 句截斷衆流 句隨波逐浪 句亦不消安排 自然恰好便去 驗處答這僧話 略露些子 鋒銛不妨奇特 雖然恁麼他古人終不去弄光影 只與備指些路頭 教人見這僧問如何是般若體 智門云 蚌含明月 漢江出蚌 蚌中有明珠 到中秋月出 蚌於水面浮開口 含月光 感而產珠 合浦珠是也 若中秋有月 則珠多 無月 則珠少 如何是般若用 門云 兔子懐胎 此意亦無異 兔屬陰 中秋月生 開口吞其光 便乃懐胎 口中產兒 亦是月則多 無月則少 他古人答處 無許多事 他只借其意 而答般若光也 雖然恁麼 他意不在言句上 自是後人去言句上 作活計 不見盤山道心 月孤圓 光吞萬象 光非照境 境亦非存光 境俱亡復

是何物 如今人但瞠眼喚作光 只去情上生解 空裏釘橛 古人道 汝等諸人 六根門頭 晝夜放大光明 照破山河大地 不止眼根 放光鼻舌身意 亦皆放光也 到這裏 直須打疊 六根下無一星事 淨裸裸 赤灑灑 地方見此話 落處 雪竇正恁麼 頌出

【和訓】 智門云く、蚌、明月を含む。兔子懐胎と。都てて中秋の意を用ゆ。然も此くの如くなりとも、古人の意、却つて蚌兔の上にならず。他は是れ雲門會下の尊宿、一句語に須らく三句を具すべし。所謂、函蓋乾坤の句、截斷衆流の句、隨波逐浪の句。亦た安排を消ひざれども、自然に恰好なり。便ち驗處に去つて、這の僧の語に答へて、略は些子の鋒銛を露す。妨げず奇特なることを。然も恁麼なりとも、他古人終に、去つて光影を弄せず、只だ備が與に些の路頭を指して、人をして見せしむ。這の僧問ふ、如何なるか是れ般若の體。智門云く、蚌、明月を含むと。漢江に蚌を出す、蚌中に明珠有り。中秋の月の出づるに到つて、蚌、水面に於て浮んで、口を開いて月光を含んで、感じて珠を産す。合浦の珠是れなり。若し中秋、月有る期んば珠多く、月無き期んば珠少し。如何なるか是れ般若の用。門云く、兔子懐胎と。此の意亦た異なること無し。兔は陰に屬す、中秋月生するに、口を開いて其の光を吞んで、便乃ち懐胎して、口中より兒を産す。亦た是れ、月有る期んば多く、月無き期んば少し。他古人の答處、許多の事無し。他、只だ其の意を借りて般若の光に答ふ。然も恁麼なりとも、他の意、言句上に在らず。自らは是れ後人、言句上に去つて活計を作す。見ずや、盤山道く、心月孤圓にして、光萬象を含む。光境を照すに非らず、境も亦た存するに非らず。光境俱に亡す、復た是れ何物ぞと。如今の人、但だ瞠眼して喚んで光と作して、只だ情上に去つて解を生じ、空裏に橛を釘つ。古人道く、汝等諸人、六根門頭に晝夜大光明を放ち、山河大地を照破す。只だ眼根より光を放つのみならず、鼻舌身意も也た皆な光を放つと。也た這裏に到つて、直に須らく六根下を打疊して、一星事無く、淨裸裸赤灑灑地にして、方に此の語の落處を見るべし。雪竇、正恁麼に頌出す。

【提唱】 コレから圓悟の評ぢや。「智門道く、蚌、明月を含む。兔子懐胎と」、コノ智門光祚禪師は、香林の遠に嗣ぎ、遠は雲門に嗣いだから、ツマリ雲門の孫ぢや。又た雪竇は智門の法嗣ぢや。「都べて中秋の意を用ゆ。然も此くの如くなり」と雖も、古人の意、却つて蚌兔の上に在らず」と、コノ十八字は削つた方が好い。蚌兔の上に在ると在るまいと、ソナナことを云ふ處ぢやないわい。「他は是れ雲門會下の尊宿、一句語に須らく三句を具すべし。所謂、函蓋乾坤の句、截斷衆流の句、隨波逐浪の句」と、智門は雲門會下の古徳ぢやから三句を具すると。コレも亦た取らぬ。此處で斯う云ふは無理なことぞ。尤も具したる時は、鳥の鳴くにも無量の法門が籠つては居るがサ。「亦た安排を用ゐざれども、自然に恰好なり」と、安排、加減もない、自然に恰好ぢや。「便ち嶮處に去つて、這の僧の話に答へて、略ぼ些子の鋒鋒を露す。妨げず奇特なることを」と、人の寄り付かれぬ、命知らずの處に於てサ、ちよいと切尖を見せた。然も恁麼なりと雖も、他の古人終に、去つて光影を弄せず、只だ爾が與に些の路頭を指して、人をして見せしむ」と、併しサ、智門の答處は大熱概の如しぢや。是れ汝等諸人をして、向上の一路を指して見せたのぢや。「這の僧問ふ、如何なるか是れ般若の體」と、ソナナとを問ふのは、是れ鑑覺を認めて精魂を弄するのぢや。「智門云く、蚌、明月を含む」と、流石は智門ぢや。「漢江に蚌を出す、蚌中に明珠有り。中秋の月の出づるに到つて、蚌、水面に於いて浮んで、口を開いて月光を含んで、感じて珠を産す、合浦の珠是れなり。若し中秋月有る則んば珠

多く、月無き則んば珠少し」と、コレは、蚌が八月十五夜に月を見て珠を産すると云ふ事ぢや。「文選」に、「蚌蛤の珠、胎して月と虧全す」とある。「勝覽」の三十八を見ると、廣西路の廉州に合浦縣あり、産物に珠を出す云々と。併し漢江と云ふ川は合浦にはない、コレを同處に見たのは暗記の失かサ。「如何なるか是れ般若の用。門云く、兔子懐胎と」、僧が又た般若の用を問ふと、智門は、兔子懐胎と答へた。「此の意亦た異なること無し。兔は陰に屬す、中秋月生ずるに、口を開いて其の光を呑んで、便乃ち懐胎して、口中より兒を産す。亦た是れ、月有る則んば多く、月無き則んば少し」と、此處でも亦た故事を引いて證とするぢや。「論衡」には、「兔、毫(光なり)を舐めて孕む、其の子を生ずるに及んで、口より生ず」とある。我國でも子供が、「うさぎく何を見て孕んだ、月の光を見て孕んだ」と唄つて居る、アレぢや。「他の古人の答處、許多の事無し。他、只だ其の意を借りて般若の光に答ふ」と、コノ二十字は削るが好い。智門の言句は、石火矢の火蓋を切つたやうぢや、如何にか他の意を借らんやぢや。「他の意、言句上に在らず。自らは是れ後人、言句上に去つて活計を作す」と、智門の意は言句上に在るのではないが、今時の者等が好き勝手にタワ言を吐くぢや。「見ずや、盤山道くと、サ、盤山寶積禪師の道ふを看よ。「心月孤圓にして」と、地獄も天堂も、真如ちやから孤圓ぢや。「光萬象を呑む」と、萬象に影はない、萬象を全ふして、ソツクリと一段の靈光ぢや。「光、境を照すに非らず、境も亦た存ずるに非らず」と、照す可き光もなく、照さるゝ境もない。コレは隻手の聲を